333.3
W12

0023868000

0023868-000

333.3-W12ウ

戦争経済

和田善太郎・著

清水書房

昭和18

ADD

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月23日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

333.3
W12

戰爭經濟

和田善太郎著

東京・神田
清水書房版

960
131

はしがき

一

國家生存圏の運命を賭けての世界戰は、國内における國民の總力を、國家戰力昂揚化の一點に集中すべきことを要請する。いふまでもなくすべての國々は、國家戰力の消長が戰ひの勝敗を決する關鍵として强調し、それが昂揚に努力を惜まざるものゝごとくである。

しかるに、こゝに理解しがたきものは、國家戰力の昂揚化と背反する思想と體制とが、戰力の擴充をもたらしうるかのごとくに理論づけられて殘存し、横行してゐることである。すなはち、それは在來の經濟學の中に見うけられる理論であり、それに基礎づけられる經濟體制である。

國家の戰爭經濟力は、國家の政治的指導と、國民の活動とが統一的に遂行されるならば成立し、またかゝる體制が、家族的道義の顯現において運營されるならば、戰ひに勝ち拔かんとする偉大なる國民の情熱が一層集中されて、戰爭經濟力を最大限に增强しえられるであろうことは、ものを素直に觀る人々ならば、誰にでも理解しうる筈である。

それにもかゝはらず、現世における國家經濟は、國家所要の經濟的目的を達成する前に、國民はまづ營利の收得、資本の利潤獲得の目的に奉仕しなければならないといふ、二筋の道を歩むべく低迷せざるをえない。また國家圏内の凡ゆる財は、國家の財であるにもかゝはらず、國家財政は、國民の擔稅能力、公債消化能力に制肘されてゐる民主々義的財政體系であつて、國家が經濟力の源泉たる國民の活動力を最大限に動員しえないといふ惱みに陷つてゐる。

かくのごとく國家の要請も、國民の戰ひに勝つための心とその行動も、經濟部面においては中斷されてゐる。――かような經濟體制とそれが理論的背景を形成する經濟學は、はたしてまことの經濟學であろうか。

二

地上に生きとし生けるものは、慈愛深き太陽の光りと、かぎりなき自然のめぐみをうけて育生される。人類もその例外におかれるものではない。が、人類は自然のめぐみにのみ依存することなく、進んで自然を活用して他動物を征服するに成功した。

いふまでもなく、人類は孤立して生活するものではない。幼兒は家庭の温床ではぐくまれるやうに、ひとは血族的に、民族的に生成し、その國家の體内で生存を維持することができる。

それがため地上には多くの血族的、民族的な國家が樹立されるにいたつた。

しかしながら、自然のめぐみは人類が設定した各自の國家圏にあまねく存在するものではなかつた。各國家生存圏は自らの生存を維持し向上せしめるために、自然のめぐみを求めてやまない。かくのごとき自然と人類の生存形態との矛盾は、人類をしてかつては動物に對してのみ使用したところの武器を、他の國家生存圏に對して使用せしめ、こゝに深刻凄慘なたゝかひを開始せしめた。

血のつながる家族内部や血族的國家には、骨肉の情愛を基底とする道義が存在する。しかるに人類は各自の國家生存圏に據つて血みどろの鬪爭を展開すること幾星霜のうちに、家族的性格の道義的國家と、混血的社會の個人主義的精神に立つ國家の存在とに集大成されてきた。

人智は日毎に進歩し、自然のめぐみを小地域から大地域へと求め、近代にいたつては世界の涯にまで求める樣になつた。戰ひの規模は、生存資源活用範圍の擴大とともに擴大し、つひに世界的規模の戰ひ――世界戰にまで擴大されるにいたつたのである。

自然のめぐみを自己のみが占有せんとする動物的・個人主義的世界觀に立つ國家生存圏と、家族的道義的世界觀に立つ國家生存圏との對立的存在は、兩者をして、自らの世界觀を地上に

顯現せんとする世界史的決戰を展開せしめるにいたつたことは、また必然の勢ひといはねばならぬ。

動物的・個人主義的世界觀に立つて鬪爭するかぎり、戰ひは從來の歷史を繰り返すばかりであつて、その終結を永遠にみることができないであらう。何故ならば、かゝる目的の戰ひに勝利したところで、生存せんとする他民族から、やがては無限の憎惡と反擊に際會することを豫約するに等しいものである。それはかの米英が陷りつゝある今日の姿が如實に示してゐる。

それに反して自然のめぐみを「萬邦をして各々其の所を得しめ、兆民をして悉く其の堵に安んぜしむる。」といふ道義的精神に基いて活用し、世界をして家族體的體制へと建設するところの、「八紘爲宇」の生存體制を建設するならば、永き年月に亘つて繰り返へされた血みどろの人類鬪爭も、つひに終焉を告ぐるにいたるであらう。

かゝる聖なる理念と理想とは、わが國肇國以來の精神であつて、今より二千六百餘年前、すでに建國の大詔に闡明せられたる偉大な構想である。

三

想へば人類の戰ひは、かたときも休むことなく續けられ、今日のごとき決戰的世界戰の段階に到達したのである。「平和」とは、より大規模な戰ひへの準備期か、あるひは思想戰、經濟戰の期間を名づけたものであつて、それはたゞ、武力を交へる全體的總力戰と異るだけである。

戰ひの目標は異り、戰ひの規模は變化しても、戰ひの結果は冷徹な判斷を下される。まことに戰ひの勝敗は國家生存圏の運命を決するものである。戰ひに敗れた國家は、體内にうごめく多くのいのちの慟哭と、無限のうらみとともに滅亡し、戰ひに勝利した國家は、多くの民族の高らかな歡喜とともにその生命を躍進せしめることができる。それは千古を貫く鐵則であつたしたがつて、ひとは生存を維持するには、何よりもまづ、戰ひに勝利しなければならぬ。

それにつけても現實の戰ひは、戰力と戰力の決戰である。それがいかに動物的・個人主義的世界觀に立つ國家の戰力であらうとも、その戰力を擊摧しつくすことなしには、いかに聖なる國家といへども晏如たりえないばかりでなく、つひには道義を世界に顯現せしめることができないであらう。

動物的・個人主義的勢力を地上から抹殺しなければならぬ。それがためには道義的國家の戰力を壓倒的優勢にまで昂めねばならぬ。

しからば戰力とは何であるか。戰力の源泉はいかなるものであるか。戰力の壓倒的優勢への形成がいかにして可能であらうか。

いふまでもなく、戰力とは人間の戰鬪力であり、人間が戰鬪に使用する優秀なる兵器等の總力であるが、兵器はまた人間によつて生產され、使用されるものである。したがつて戰力の源泉は人間であり、人間の鬪ひへの鐵火の心である。

かくて戰力の壓倒的優勢への形成は、戰ひへのひとの心を、敵に比して壓倒的優勢に動員することである。しかもそれは、動物的・個人主義的國際勢力が殲滅され、その後といへども生起するであろう野望を制壓しつつ、全き姿において道義的世界體制が建設される日まで、長期持久性の戰力たらねばならぬ。

まことに今日のごとき世界戰にあつては、もはや一國の總力戰體制のみに依存するだけでは、必勝の戰力とはいはれない。すなはち過去における戰ひのやうに、一國と一國とが地球の局地で戰はれる規模のものならば、一國の總力戰體制を速かに形成した國家が、戰ひを勝利に導くことができたであらうが、全世界の國々が相對峙する二つの陣營に分れて戰ひつゝある今日、自國の戰力を最大限に動員するとともに、他民族の戰力をも動員するところの、壓倒的に優勢な國際的總力戰體制を形成してこそ、はじめて必勝の戰力を樹立したといへるのである。

戰力の源泉はひとの心である。したがつて戰力の昂揚は、ひとの心を、戰ひへの灼熱的性格にまで昂めることであり、壓倒的に優勢なる戰力の形成は、多くのひとの心を動員するところの思想戰における勝利によつてもたらされる。

動物的・個人主義的世界觀に立つならば內には國民相互が嫉視反目し、外には他民族の憎惡と反擊に際會する。それに反して、家族的道義の世界觀を顯現せんとして戰ひ、かゝる道義を自らの國內において實踐するならば、自國民の心からなる戰ひへの情熱を湧出せしめるとゝもに、永き年月にわたつて、動物的・個人主義的勢力から虐げられきたつた多くの民族をして、心の底から感激の涙をもつて協力せしめることができるであらう。——聖なる理念も、理念の範疇にとじ込められてゐるかぎりは、ひとの心を全き姿において動員することが不可能である。

かくのごとく戰ひの目標の道義性と、優勢なる戰力形成の原理とは一すじのものである。——ひとの心の戰ひへの動員は、道義に對する深き理解の上に釀成される。「萬邦をして各々其の所を得しめ、兆民をして悉く其の堵に安んぜしむる。」といふ、わが國　すめらみことの

おほみこゝろの實踐こそは、人類社會の道義的原理であり、また戰力昂揚の核心である。

戰爭經濟力の昂揚化も、戰力昂揚の原理と同じく、人類生存社會の道義の顯現によつてもたらされる。經濟といふも、それは人間の活動によつて營まれるものである。したがつて、ひとの心の昂揚が經濟力昂揚の源泉である。

四

國家の戰ひは、戰ひに必要なる經濟力の昂揚化を要請する。國家戰力の昂揚に背反する經濟活動は、國家を敗戰に導く行動であつて、國家內におけるすべての人々の生存を否定せんとするものである。まことに國家經濟は、國家の戰爭目的達成の戰略に從屬しなければならない。

戰ひに必要なる物資は、戰ひの目的、規模、作戰、活動人員等を想定しえられる國家のみが計畫されうるものであつて、個々の國民が、自らの見解に基いて、戰ひの自的、規模、作戰等を計畫しうるものではない。このことは國家の經濟を、國家が計畫し、國家が決定することを前提とし、個々の國民が自由主義的に、無計畫的に運營せんとすることが、すでにして不可能なることを意味する。

かくて戰爭經濟とは、國家が全經濟を計畫するを前提とし、その運營は家族的道義の精神とその顯現形態において行ふことである。いかに經濟力を增大したにしても、國家の要請する經濟力でなければ、戰ひの經濟とは背反する。またいかに國家が全經濟を計畫したにしても、その運營は、家族的道義に反する精神と構造であるならば、經濟力の昂揚化を圖りえない。國家計畫の遂行と、家族的運營とが歸一せられたる一元的構造に再編成することによつて、はじめて眞の國家總力戰經濟が成就されるものといへよう。

ひとが活動してこそ、經濟が成立する。ひとが情熱を最大限に傾注して活動してこそ、經濟力を最大限に昂めることができる。ひとの情熱の昂揚は、國家の道義的な戰爭目的を理解し、國家の經濟體制は家族的性格を開顯せるときにおいてのみ、最大限に昂揚せしめうる。

しかるに動物的・個人主義的な思想に基く經濟は、營利の追求を目的とせる構造である。したがつて國家が要請する經濟行動でも、營利に合致しないならば生產しないといふ、戰爭經濟の目的に背反する最大の缺點を有し、經濟行動に對する情熱發揚の度合も、營利を追求しうる一部國民の情熱を發揚せしむるにとゞまり、決して全國民の情熱をたぎらせ得るものでないことは、「勞資の紛爭」が起伏しつゝある米英等の事實がこれを說明してゐる。

また社會主義經濟は、經濟を計畫しえたにしても、國家內部を分裂せしめ、「勞働者階級」

なる職能層を抽出して經濟的價値造出の主體とし、國民の總力形態を破壞してゐることは、これまた一部國民の情熱を動員しえても、他の國民層の怠業を阻止することができない構造といはねばならぬ。

かくのごとく、國家戰力の昂揚化を圖るよりも、營利の追求を目的とする營利經濟や、一部職能層の利害のみに專念する社會主義經濟等は、ともに動物的・個人主義的思想の所產であつて、國家戰力を最大限に昂めるところの國家總力戰經濟體制とはいはれえない。

五

國家總力戰體制は、國家の戰爭戰略に從つて全國民がその戰列に動員されるものでなければならぬ。前線において戰ふ將兵も、國家的所要の物資を生產する人々も、國家政治の部面で活動する人々も、すべて戰ふ「戰士」たるべきを要請する。

前線の戰士は作戰に應じて勇奮するように、經濟部面の戰士も國家の經濟「作戰」に從屬して戰ふことである。國家の經濟は、一切の戰力昂揚の源泉たる國民の最低生存を確保する物資を供給すること、軍隊生活のごとき制度とし、國家的に功勞ある人々には、それに應ずる報酬を支拂ひ、戰ひの緩急に應じてゆとりある生活を營みうる家族的體制を樹立することである。

いふまでもなく、集團性經濟企業と個性的經濟活動との運營形態は同一であつてはならない。集團性企業は、營利性を拂拭して國家の計畫と指導に基いて運營され、資本力に拘泥することなく、才能ある國民をして運營の責任者とし、個性經濟は、個人の獨創的努力にゆだねる等、國家の要請と國民の創造力とが統一されうる形態たるを必要とする。

國家が經濟を運營するに際して、價値を表現し、價値交換を媒介するに必要な通貨は、國家が、國家內における通貨動員の限度に照應して發行し、かつ使用しえられるのであつて、通貨の社會內への累積から釀成される「價値と通貨の不均衡」――價値の相對的下落觀を防止するためには、自己が國家的に活動することなくして、國家の價値を收得せんとする財產移轉に對して重點的に課稅し、もつてその調整を圖るべきであらう。

しかるに動物的・個人主義的世界觀に基く在來の經濟學は、國家內の通貨にも、孤立的社會間の通貨たる現物通貨制に基く運營を强要して、國家財政の擴大とその圓滑化を阻害するとともに、國家經濟の運營行程に「資本」なる反國家的、非生產的要素を導入して、滑かなるべき國家の經濟運營を澁滯せしめ、かつ國家が要請する經濟力の擴充をして、一部國民の個人的目的に合致する營利採算の限界線に拘束せんとしたり、あるひは價値造出の主體を「勞働者階級」

なる職能層に限定せんとする。

かくのごとき經經學は、自己のみが地上の富を占有せんとする動物的・個人主義的國際勢力の目的とする生存體制の原理であり、その思想戰の根柢を形成する理論的武器である。かれらはかゝる經濟學を否定して、家族的道義に基く國家總力戰的經濟體制を樹立しえないのは、それは自らの邪まな生存體制を、自らが拒否するの自己撞着に陷るからであり、またいかに激甚なる戰爭中といへども、經濟學として提唱し、國民の理解にまで浸透せしめるならば、「戰後」といへどもついに解體しえないといふ恐怖に惱まされてゐるからであらう。――理解しがたい經濟とは、かくのごとき動物的世界觀に立つ國際勢力の武器であつたのだ――。

家族的道義を世界に顯現せんとして聖戰を遂行しつつある國家は、個人主義的國際勢力の思想的武器たる「經濟學」を清算するにあらざれば、自らの經濟戰力を最大限に昂めることが不可能であらう。

戰爭經濟――國家總力戰經濟體制の樹立は、かくて動物的・個人主義的な心と、家族的道義の世界觀に立つ心との戰から、たゆみなき思想戰から發足されねばならぬ。

六

すめらみくにに生れた我々は、いまや一切の努力を、わが國の勝利への一點に集中しなければならない。そこにあるものゝすべてを、造出するすべてのものを、わが國の勝利といふ主觀的立場から拾ひあげるべきであつて、ものを客觀的にのみ眺めたり、あるひは「普遍妥當性」のみを追求する閑かさに陷つてはならないであらう。

しかるに現實に動きつゝある經濟は、國際的一般的傾向として、個人主義的世界觀から割り出された經濟學に基礎づけられた體制を踏襲してゐる。國家總力戰經濟の樹立といふも、それは現實の戰ひのさ中において改編し、再編成されんとするものである。したがつて新たなる經濟の樹立は、新たなる原理の樹立を必要とし、新たなる理論體系を基點として、現實に散布されつゝある個人主義的經濟力の毒素を摘出し、その濁れる血液を、ひとの心の底から拂拭するにあらざれば、それが現實的な樹立は不可能といへよう。

それがため本書は、現在展開されつゝある世界戰の中から、戰ひの要因を探究し、邪惡なる目的をもつ個人主義的國際的勢力と、家族的道義世界を顯現せんとする目的を有して、人類解放のために戰ひつゝある國家の聖なる姿を見い出すとともに、家族的道義の生存理念、並に戰ひに勝利するための壓倒的優勢への戰力形成の原理、またそれに從屬すべき經濟體制の原理を

求めたのである。

もとより、すめらみたみとしての我々は、日本世界觀――人類生存の社會的諸體制の原理を論究するに際し、今上のすめらみことの、みことのりを基點として發足すべきであつて、時代的思想や個々の人々の見解に基いて出發すべきでないことといふまでもない。それがいかにわが國體に歸一する原理といへども、自らの見解を基點として構成せられる世界觀は、思想面における民主々義的理論構成であつて、決してすめらみたみとしての正しき態度とはいへないであらう。

それにも拘らず、私は、あるがまゝの世界の中から、人類の永き歷史の經驗の中から、まづわが國に妥當し、かつは世界的にも妥當する、いはゆる普遍妥當性の原理を求めたのである。――そこに發見されたもの、結論された人類生存の根本理念は、「萬邦をして各々其の所を得しめ、兆民をして悉く其の堵に安んぜしむる。」といふ家族的情愛の精神たる　すめらみことの、みことのりであつた。――かくて　すめらみことの、みことのりこそは、わが國の理念であるばかりでなく、全人類が歸一すべき生存理念であり、普遍妥當性の原理であつた

このような方法論は、すめらみたみの思考の方法論として、まことにふさはしからぬ道程ではあるが、それは前述のごとく、現實的に動きつゝある經濟の多くは、個人主義的經濟學を、普遍妥當性の經濟學に立つものとして、多くの人々の心の底に根强く執着してゐる事實と、ものを客觀的にのみ批判し究明して、自己の生存原理を求めんとする他民族の存在を無視することなく、むしろ積極的に理解せしめ、わが國聖戰遂行の戰略的態勢たる壓倒的優勢の戰力を形成したいといふ、やみがたき心から發した「戰術的」な方法論であつた。

かくのごとき方法論に基いて本書を組みたてたがため、具體的な「日本戰爭經濟の構造」として形造ることができず、一般的な原則論に終始した。そこになほ解きがたい心殘りがする。

昭和十八年六月

著者識

戰爭經濟　目次

はしがき……一

第一編　現世界の樣相……三

第一章　現世界戰の性格と道義的體制の萌芽……三

第一節　縱橫連帶の世界戰とその規模……三

第二節　生存資源獲得を目標とする世界戰……六

第三節　自由主義經濟を否定する世界戰……一三

第四節　國家統制經濟の成立……一九

第五節　道義的總力體制の萌芽……二五

第二編　國家經濟の變革史……三五

第一章　原始經濟とその崩壞……三七

第一節　原始社會と經濟……三七
第二節　農業の勃興と交易の開始……四三
第三節　資源の活用と人類鬪爭の開始……四九
第四節　國家の形成と職業の分化……五五
第二章　封建社會の經濟……六三
第一節　原始社會の崩壞と階級の發生……六三
第二節　商業の勃興と通貨の發生……六八
第三節　奴隷制の崩壞と封建國家の形成……七五
第四節　封建制度と商品經濟の矛盾……八二
第五節　封建制度の瓦壞……九一
第三章　自由主義經濟とその矛盾……九八
第一節　自由主義經濟の成立と金融資本の制覇……九八
第二節　自由主義經濟の國際性……一〇三
第三節　資本の對外進出と生存物資の獲得戰……一〇八

第四節　自由主義經濟の諸矛盾と崩壞の危機……一一八
第四章　相剋經濟としての社會主義……一二〇
第一節　社會主義思想の發生……一三〇
第二節　社會主義國家の成立と經濟機構……一三五
第三節　社會主義の沒落……一四一
第五章　全體主義經濟の登場……一四九
第一節　全體主義運動の發生……一四九
第二節　全體主義の經濟機構……一五八
第三節　全體主義の理念と其の矛盾……一六六
第三編　道義的生存體制の原理……一七五
第一章　道義的世界體制……一七七
第一節　人類生存の道義的理念……一七七
第二節　道義的世界の構造……一八四

第三節　國際總力戰體制の樹立……一九〇
第二章　國家と經濟……一〇〇
第一節　逆流した政治と經濟……一〇〇
第二節　國家的經濟の性格……一〇六
第三節　國體と經濟……一一三
第四編　經濟の原理と國家經濟……一三一
第一章　經濟の原理……一三三
第一節　經濟　經濟研究の方法……一三三
第二節　經濟の原動力……一三七
第三節　自給自足の科學的生產……一三六
第四節　價値の國家性……一四四
一、價値設定の意義……一四四
二、價値實體——總力的價値說……一四九

三、マルクス主義價値論の偏見……一五八
第五節　國家と通貨……一六五
一、通貨の成立と二つの通貨制度……一六六
二、國內通貨の性格と國際通貨の性格……一七七
三、國家通貨と國家財政……一八四
四、國家經濟と利子問題……二〇〇
第六節　物價調整……二〇九
第七節　國家と貿易……二一七
第二章　國家總力戰經濟の構造……二二一
第一節　國家總力戰經濟の基礎概念……二二二
第二節　歷史的經驗と家族的經濟……二三九
第三節　國家總力戰經濟の要綱……二四四

第一編　現世界の樣相

第一章　現世界戰の性格と道義的體制の萌芽

第一節　縱横連帶の世界戰とその規模

世界はいまや動亂のさ中にある。人類間における戰ひは現在ばかりではなく、永い歷史はこ
とごとく動亂に彩られてきたのであるが、現下のごとく世界の最强國がそれぞれ弱少國を自己
の勢力圏下に率ひて國家民族の運命を賭して戰鬪し、戰場が世界的に擴大されてゐるといふ點
においては有史以來未曾有のものであろう。

自國の勝利はたゞに自國のみの勝利ではなく、自國と同盟せる諸國および自國と共同の敵國
をもつ民族の勝利を促し、他國の敗北は、また敗北した國家と同じ陣營に立つ國家の敗北を招
く運命におかれてゐる。したがつて一國の勝敗は直ちに他國の勝敗に關聯し波及するがゆえに
自國の勝利のみを目標とする戰爭ではなくなつた。一國の勝利によつて戰爭を終結せしめんと
する希望は遠き昔の戰史にのみ名殘りを止めるものとなつた。敵國の軍隊を地球の一角で壞滅
しても、他の地域で存在せしめるならば、ふたゝび戰備を增强し餘勢をかつて襲擊してくる可

能性があり、同盟國が敗れても自國が決定的に勝利するならば、また救援しうる連鎖性をもつてゐる。かくて現下の世界戰はまことに戰域の世界性と勝敗の世界性をもつ長期深大な規模の戰爭である。

勝敗の世界的連帶性と戰域の世界性を可能ならしむるものとして、兵器の發達を擧げることができる。航續距離の延長された飛行機、戰艦、航空母艦、潛水艦、輸送船あり、汽車、自動車等の外に電波による思想戰も可能となつた。

戰爭の勝敗は世界的に關聯してゐるがゆえに長期戰の性格を帶び、一國の兵器が世界全域に使用されるがゆえに戰ひは世界的規模へと擴大されずにはゐなかつた。

中世期のころから戰爭がすでに武力戰ばかりではなく、謀略的思想戰、經濟封鎖戰へと發展してきてゐたが、第一次世界戰以來、これらの中世期の戰鬪手段を受けついだ上に、長期戰に堪へうる國內經濟體制——國家所要の生產力の最大限擴充と、長期の消耗に對應しうる國家經濟の再編成が痛感されてきた。

したがつて今次の世界戰においては、在來の敎訓をあますところなく攝取してゐることはいふまでもない。すなはち國家戰力の消長は、單に兵器の優劣性にのみあるのではなく、また兵員動員量の大小にのみあるのでもない。それは國民の戰爭に對する熱意の昂揚を基礎としたところの、國家總力の動員體制の完遂といふことが、國家戰力の消長を決するものとなつた。それゆえ戰ひは單に世界的規模にまで擴大されたばかりでなく、國內における戰鬪體制の樹立——國家總力戰體制への再編成といふ內部的なたゝかひにまで浸潤され深化されてきた。

試みに交戰諸國の國內體制を觀るならば、戰前すでに自由主義的諸體制を一掃して、ひたすら政治的指導の一元化と、國內經濟の國家計畫化へと再編成したドイツ、イタリー等はいふまでもなく、自由主義の元祖たるアメリカ、イギリス等々の諸國家さへも、戰爭の深化と共に國家統制を强化し、あるひは政府に對する絕大な政治的權能を賦與し、國內經濟の自由主義的要素を拂拭することにつとめ、國家計畫經濟への道をひたむきに前進しつゝある。

翻つて、わが皇國もかの滿洲事變を契機として國家革新の波が昂まり、天皇機關說の如き邪說を克服するところの、政治的指導の一元化のためのたゝかひがあり、國內經濟も著しく計畫性と統制を强化してきた。

國家民族の運命を賭しての世界戰は、かくして戰域の世界性と、勝敗の世界性の規模の上に國內の總力戰體制の樹立といふ內面的な深さにまで波及されてゐる。

第二節　生存資源獲得を目標とする世界戰

今次世界戰の目標は何んであつたか、國家民族がそれぞれ自國の運命をかけて戰端を開くには、戰爭を開始しなければならない理由が存在してゐたのである。交戰國のいづれかゞ現狀のまゝ推移するならば、自滅を餘儀なくされるといふ民族の興亡に關する運命にまで追ひつめられてゐたがゆえに、やむなく開始されたのであろう。戰ひを求めて戰ふといふ戰爭などはありえない。戰はなければ戰ひ以上の責苦に民族が突き落されるか、今にして戰はなければ、將來みじめな敗北を喫する戰ひに追ひつめられるといふ立場に置かれつゝあつたがゆえに、戰端を開始したものといはなければならぬ。そこで今次世界戰開始前の國際情勢を概觀してみる必要がある。

イギリスは「ユニオン・ジャックの飜る處日沒なし」と誇稱して世界の隅々に亘つて弱少民族の多くを支配し、植民地を領有して尨大な資源を占有してゐた。アメリカは自國の豐富な資源と尨大な艦隊を擁して南北アメリカを勢力圏内に置き、その上巨大なる資本力をもつて世界の重要資源を掌握し、フランスもまた植民地と弱少民族の支配の上に自國の繁榮を夢見てゐた。ソ聯は地球の六分の一を領土とし、生存資源の自給自足の基礎の上に、國際共產黨の本部を自國領内に置き、世界をして自己を祖國と仰がしめんとする活動——自己の姿に世界民族を形造らんとする鬪爭を寧日なく續けてゐた。

これに反してドイツ、イタリー、日本等は民族の生活力が旺盛で、近代的な生產力が發達してゐるにもかゝはらず、生存資源の自給自足が不可能であつた。ドイツのごときは第一次世界戰に敗れた結果、尨大な賠償金を强要された。また軍備が制限されて發展の餘地を奪はれてゐる上に、石油、鐵鑛、棉花、羊毛、ゴム、錫、ボーキサイト等の經濟資源の悉くを國外に仰がなければならない狀態にあつた。イタリーは農民が四〇%に達してゐたにかゝはらず、食糧の生產は三分の一の自給狀態の貧弱さであり、石炭、鐵鑛、棉花、石油等々資源の多くを國外に依存する狀態であつた。わが皇國もそれと同じ狀態であつて、生存資源の多くを米・英に求めなければならない實狀に置かれてゐたのである。

近代人類の生活は米と麥だけでは生活することが困難なほどに昂められてきてゐた。風雨、地震等の自然の脅威に堪へるためには鐵、セメント等を使用する家屋を必要とし、綿布、羊毛等の衣服を求め、造船には鐵鋼、銅等を必要とし、飛行機の器材にはボーキサイトの精錬によ

るアルミニユームを不可缺の要素としてゐた。其の他衞生、醫藥には稀金屬の利用やラジユーム、キニーネ、等々人類の生存資源を地球の全域に求めなければならない狀態にまで昂められてきた。いひかへるならば、人類の近代生活は全世界の資源を利用するまでに發達してきたのであつた。

さらに國防力の强大な國家の民族は繁榮し、その反對に國防力の脆弱な國家民族は滅亡してゆくことを、第一次世界戰の經驗ばかりでなく、歷史が幾多の事實をつきつけて敎へてゐる。それゆえいかなる國家民族も國防力を昂めることに專念してゐたのはいふまでもない。しかも近代國防兵器は逐年發達し、飛行機、軍艦、戰車、裝甲自動車、大砲、機關銃、火焰放射機、彈丸、爆彈等の性能は驚くべき威力を發揮するやうになり、而していづれの國もこれら優秀な兵器の生產を怠ることは、十字砲火の前に丸腰のまゝ抵抗せんとするみじめさを自覺してきたのである。國防力なくしては、いかなる正義も人道も踏みにじられてきたことは歷史の敎へるところとなつたがために、これら優秀な兵器を多量に生產し、兵員を日常訓練して國家戰力の昂揚を圖らんとする國民的熱意が醸成されてきたことは當然とされやう。

國防兵器の生產には幾多の資材を必要とする。各國は自國の山野にこれを求めたのはいふまでもないが、地球を數十ケ國の政治的區劃に引き裂いて打ち樹てた國家の領土內に、これらの資源の悉くが埋藏されてゐたり、生產しえたりするものではなく、自然は國境を無視して地球の彼方、此方に資源を散在せしめてゐる。

國境はいかやうにあろうとも、生きんとする民族、國家はこれらの資源を獲得しなければならない。

日本、ドイツ、イタリー等の民族は、第一次世界戰以來國防强化の必要を痛感してきた。すなはちわが日本は、かの滿洲事變を契機としてかゝる志向へとひたむきな前進を續けてゐたし、ナチス政權が樹立されたドイツは、夜に日を繼ぐ國防强化の雄叫びとその實現化に息つく暇もなかつた。イタリーもムソリーニ首相指導のもとに片時も忘れたことがないまでに國防の充實に努力してきたのである。

しかしながら資源に惠まれない國は、いかに資源の獲得を欲しても、持てる國々たるイギリス、アメリカ、フランス、オランダ、ソ聯等から仰がなければならない實情にあつた。しかも持てる國々から生存資源を得る平和的手段は、營利主義的貿易といふ營利を通じての道のみが開けてゐた。

イギリス、アメリカ、フランス、オランダ等々の國々はともに廣大な植民地と、弱少民族の支配の上に、全世界の欲する資源を擁してゐた。かれらは植民地と弱少民族を武力で支配し、資源の生産と開發は營利主義的な方法によつて資本を蓄積し、蓄積された資本を世界に再投資して重要資源の生産を自國の手に獲得してゐた。たとへば石油についてみても、今次大戰前、ソ聯を除く世界石油の三分の二以上は英米の資本によつて生産されてゐた。

持たない國々は生存上の不可缺な資源を入手するために物資の輸出と、國際通貨としての金を生産することに努力し、自國の山野を掘り返したのである。

輸出物資は廉價なことを條件とされた。持てる國々は保護關稅制度によつて高率の稅金を輸入物資に賦課したので、輸出向商品を可能な限り低廉にしなければならない。その上、營利的な企業家の利益も加算しなければならぬといふ營利的經濟なのだ。それゆえ資源に惠まれず、かつ營利主義經濟機構の國々は、自國の大多數を占める勤勞者の賃銀を極度に低下してこそ、安價な商品が生産されるといふ悲慘な狀態であつたのである。貿易はかくして持たない國の貴重な資源と大多數國民の犧牲において行はれた。

他方、イギリス、アメリカ、フランス、オランダ等のごとく資源と資本とを擁する國家は、持たない國家の國民の血潮を吸つて太々と肥え「繁榮」を誇つた。

生活と國防の充實を圖らんとする持たない國の國民は、その希望に反して哀れにも體位の低下はいふまでもなく、長期消耗戰に堪へがたい生活苦に追ひやられる自己憧着に陷つたのである。

かくて營利主義的貿易に依存するかぎり、自滅の悲運に泣かねばならなかつたのは持たない國家の共通するところであつた。

資源平等の叫びはわが國の一部にもあげられ、ドイツにも叫ばれ、イタリーにも唱へられた。

しからば資源の獲得はいかにして達せられるか。それは武力に愬へて獲得する以外に殘された道はないのであつた。

今次大戰前の國際情勢は概要右のありさまだつたのである。

世界の空に戰雲が立ち昇つた。大西洋も太平洋もにはかに波が高まりはじめた。大陸の天地に時ならぬ砂塵が捲き起された。一發の銃聲は生存資源獲得戰の合圖となつたのである。

ドイツはポーランドに進軍して農耕地を併合し、ルーマニヤに入つては油田を抑へ、ギリシ

ヤに突進してはボーキサイトを手に入れ、突如、三百萬の大軍をソ聯に進めては沃土と油田を求めた。わが國は、米・英が資本力によつて支那民衆を抗日へ驅り立てつゝあることに反對し大東亞諸民族自らの共存共榮を强調して、果敢にも全太平洋水域の波を蹴散らした。他國民の犧牲において自らの繁榮のみを求める米英に鐵鎚を下したのである。それは自らの生存のためばかりではなく、實に悲運に泣く弱少民族の解放戰である。

かくして今次世界戰の幕は切られたのである。戰爭の動機はやむにやまれぬ民族生存意慾の發動であり、その目標はわが國を除く他は悉く生存資源の獲得であり、あるひはその維持にあつた。

第三節　自由主義經濟を否定する世界戰

全洋上の波浪を蹴り、大陸の天地を砂塵と硝烟で包んだ世界戰は、各國のもつ國防力の發動となつて自由貿易の網の目を寸斷した。敵國の物資輸送を阻止することは重大な戰鬪手段の一つである。戰爭の規模が一國と一國の戰ひ、あるひは一國と二・三の國家との戰ひのごとく、局地的戰爭に限られてゐる場合は、他の國々との貿易もまた可能であつた。たとへば日清、日露の兩戰爭のごときは交戰國家間こそ貿易が斷絶したが、交戰國外との貿易を續けることができた。また、すでに世界的性格にまで擴大されつゝあつた支那事變の當初や、イタリーのエチオピヤ遠征等の場合でも貿易は續けられた。したがつて交戰國は自由主義的貿易の世界の中で呼吸しえられたのである。

しかるに戰爭が世界戰にまで擴大されると國際的貿易は一瞬にして斷絶せられ、各國は好むと好まざるとに拘らず、自國に必要な物資を自國の領域内で生產しなければならなくなつた。他國の人力によつて生產された物資を現物通貨で購入したり、自國に不要な物資を輸出して所要の物資を輸入するといふ物資の交流が不可能になつたのである。

ドイツ、イタリー、ソ聯のやうに戰前すでにして計畫經濟體制に再編成を完了してゐた國家は、世界戰が開始されてもさして痛痒を感じなかつたが、アメリカ、イギリス、フランス等々のごとく、自由主義的營利主義經濟體制を續けてゐた國家は世界戰開始とゝもに鍛から棒の大打擊をうけたのはいふまでもない。その打擊の甚大な國家は、資源を自國の領土に有せずしてうかつにもなほ自由主義的營利主義經濟を續けてゐた國家であつた。

自國の國防上、また國民の生活上不可缺の物資を國外の生產に依存してゐた國家、自國に不

必要な物資生産に尨大な生産設備と多數の勤勞人員を吸收してゐた國家――自由主義的營利主義經濟の國家は、立ちどころに經濟上の再編成を餘儀なくされた。輸出物資の生産に努力してゐた企業は停止し、企業家も就業勤勞者も轉職しなければならない運命に迫られた。國外の生産に依存してゐた重要物資は是が非でも國内で生産しなければならない。國民生活になくてはならない食糧品を、國外の生産に求めてゐた國家は計畫的農業と食糧品の國家管理に狂奔した。

しかるに近代的生産――機械的生産は、易々として方向轉換を行ひえない性質のものである。生産設備はすべて機械の連鎖であり、轉換する産業の主たるものは兵器生産の重工業である。これらの就業人員はすべて技術家としての性格にまで昂められてゐる。したがつて昨日までの染物屋は、今日は旋盤工に轉業しうるといふことが不可能である。轉業を餘儀なくされた國民は、轉業といふ運命の宣告をうけた瞬間から熟練工に飛躍しえられない。

また自由主義的營利主義經濟の國家は高度に富める階層と、貧困にあへぐ階層との差が甚しい。したがつて生産設備と勤勞者の職業は奢侈品生産のものが比較的に多い。さらに營利を目的とする生産機構のために、部分品製造等の下請工場がマッチ箱のやうに亂立されてゐる。

かくのごとき小規模生産設備とその樣式のもとに就業してゐた勤勞者が、重工業生産部面への轉業を迫られたのであるが、その轉業の速度たるや遲々、迂回、容易には方向轉換を行ひえないのも無理がない。だが、國家民族の興亡を決する戰爭は一日も早く國内經濟の再編成を要請してやまない。前線において奮鬪する將兵は血しぶきを浴びながら兵器の補給を求める。戰線が擴大され、兵員の大量動員が續き、兵器の消耗は增大する。戰ふ前線將兵は勝敗の責を一身に背負つて勇奮力鬪するときに、國内における兵器生産の速度を計算する餘裕などがありえないのだ。かれは前方に展開する敵陣を蹂躙しつくすことを任務としてゐる。――物資の消耗は、戰鬪の激化と、戰線の擴大と、長期化とに對應して增大する。國内經濟の計畫性への再編成は押し進められねばならぬ。

世界戰の開始とゝもに、もはや國内の自由主義經濟に依存してゐられなくなつた。現實に展開する世界戰は物資の世界的交流を斷ち切り、國内經濟の自給自足を要請し、生産をして戰爭勝利の方向への轉換を命ずる。

兵器の大量生産、輸送機關の增强、國民の最底生活確保の物資生産等々のためには、すべての資材と勤勞人員をかゝる方向へ集中しなければならない。その上、前線への動員と豫備軍編

成の訓練が續く。もはや戰時下にあつては不急不用の機關の方面へ勤勞力を流出させることができない事態に直面する。それがため遲々として進行しない生產設備の轉換や、勤勞者の轉業を急速ならしめるべく企業合同や人事徵用令が發せられ、國家所要の企業を促進するために必要な通貨――いはゆる資本を集中しなければならない。かくて資金調整令や强制貸付命令が出る。

國家所要の生產力を增大するためには、國家の物動計畫と關聯性のない不急不用の機關への資材や人員の吸收を防ぎ、國家所要の方向へ移行せしめなければならぬ。かくして資材の國家管理が行はれるにいたるのは當然であろう。

かくて國民生活の上に重大な變化が起る。國民の最低生活を確保する以外の不急品の生產は停止されると共に、國民生活の消費物資が急速に減少しはじめる。

國民の消費物資が減少すると、買溜めや賣惜みの現象が起きて物價は上昇し、富める者が豐富に買溜める傾向が起り、一般國民は上昇しゆく物價を眺めては戰慄をおぼへ、ひいては國民生活の惡化を招來することになる。かくて物價の公定、切符制、配給制等が實施されたのである。

自由主義的營利主義經濟體制の國々はいづれもかゝる事態に當面した。

國內で國防兵器を生產する設備を增强せず、また資源開發にも努力せず、かつ國民の生活必需品すら國外に依存してゐる反面、その生活に不必要な物資の過剩生產を行つては國外の需要に應じてゐた經濟は、世界戰となるや、そのとたんに頭上へ鐵鎚を加へられたのである。

自由主義的經濟は國家性なき世界性の經濟であり、資本力をもつ者に有利な經濟であつた。富める國家民族の需要を滿たすべく、貧しき國家民族の犧牲の上に打ち樹てた經濟であつた。商品が富める者を中心に世界的に循環する經濟であつて、そこには何等の國家目的もなく、ただ營利獲得のみを主眼とするものであつた。

しかるに世界戰の勃發はまづ第一に、世界的に游泳する商品の道を遮斷し、第二に、交戰國は戰爭に勝利しうる國防經濟の生產力を增大しなければならなかつた。第三に、物資は自國の領域內において自給自足的に生產しなければならなくなつた。かくて經濟は國家目的の下に統制されたのである。

戰前すでにドイツ、イタリー等は經濟を國家の意志に從はしめてきてゐた。それゆえ世界戰が勃發しても經濟の再編成に狼狽することなく、一路、戰爭經濟力の增强を促進し、餘力を他

の部面に動員することができたのである。イギリス、アメリカ、フランス等々の自由主義的經濟の國家は、前線と國内を睨み合はしながら再編成に狂奔せざるを得なかつた。そこでは國外の敵と、國内の敵との二重の戰ひをたゝかひ拔かねばならぬ。いひかへるならば、國境に戰爭が勃發すると同時に、直ちに自國内に「第二戰線」が形成されたのである。

世界戰において敗北を喫するならば、富める者、貧しき者の差別なく奴隷的狀態に呻吟せねばならぬ。その反對に、勝利した民族は一般的に光明ある前途が約束される。それがため一部階層の個人主義的な繁榮の夢をいつまでも貪らせる餘裕がない。國内の第二戰線に對しても、國外の敵に對すると同樣、鐵鎚を下さなければならない狀態となつた。

かくて生産品種の自由選擇による生産が抑制されて、國家所要の生産に方向轉換され、その生産數量が豫約され、商品價格も公定された。資本の自由貸附は停止されて國家の命令がとつて代つた。人事徵用令が發せられ、主要物資に對する國家管理制が登場した。自由主義經濟の自由性の多くは國家が掌握するところとなつた。

かゝる政策は今日のいづれの交戰國にも採用された。すなはち國家統制の經濟體制に改裝されたのである。

第四節　國家統制經濟の成立

世界戰は、戰ひに勝利せんとする國家民族に對し、まづ二つの重大な任務の遂行を要請してゐる。一は、國家の戰力を最大限に昂めることであり、他は、他民族との心からなる協力關係を成就することである。すなはち一國と一國の戰ひは、戰ふ國家の戰力の旺盛な方が勝利し、世界戰には、一國の戰力のみならず、世界的な綜合戰力の强大な陣營が勝利するのが原則である。

いづれの國々も今次の世界戰に際會するやかゝる原則を實踐せんとしてゐるものゝごとくである。まづ國内經濟體制を國家統制の强化をもつてし、國際的にはそれぞれ可能なかぎりの同盟戰線の結成に努力してゐる。

しかるに國内總力戰體制の重大な地位を占める經濟體制は、自由主義的諸要素の多くを排除したとはいへ、依然として營利的經濟が主として存在し、生産力の擴充を阻止してゐる。しかも國内通貨制は一般に現物通貨制から國家の信用通貨制に發展してきてゐるにもかゝはらず、なほかつ國家財政の基礎を國民所得の限界線に置き、積極的な生産を行ひえない惱みを内包し

てゐる。

(一)通貨は金銀等の現物制から脱して國家の權威と信用を基礎に發行されてゐるが、現物通貨制時代の「保有量」の制限を受けてゐるものゝごとき運營である。國家の財政は國民の意志に基く租稅納入、公債消化力等に依存する民主主義的財政體制下に置かれ、國家が全經濟の指導者としての地位にまで昂められてゐない。

(二)國家は國民の生存を確保する全體的な指導的地位にありながら、その財源は國民の意志により、國民の所得の限度に制肘され、經濟的企業もまた國民の「資本力」に依存するといふ狀態である。

(三)國家は國家財源を租稅と國債とに求めてゐるが、租稅納入や國債の消化力を昂めるには一般國民の所得が增大しなければならぬ。一般國民のかゝる國家への奉仕は、低物價による生活費の縮小と收入の增大化を前提とする。しかるに低物價政策は生產者の利潤を減少して企業家並に企業體の稅租納入、公債消化能力を縮小し、再生產資金を抑制して生產設備の增大化を困難にする。又低物價政策は農民の收入を減じて租稅、公債等を通じての國家財政への奉仕を僅少ならしめる。

その反對に營利企業の利潤の增大化をもたらすために高物價を許容し、租稅納入力と消化能力を昂めるならば、一般國民の生活を困難にするばかりでなく、高物價による國家支出が增大するためさらに高物價を促し、營利的企業家の增收を計らねばならぬといふ**鵺ごつこ**の矛盾に陷りつゝある。かゝる國家財政の惱みは營利主義經濟體制の國々ばかりでなく、社會主義ソ聯も同じ惱に陷つてゐる。

(四)經濟的行爲は國民の努力に俟たねばならないが、「資本力」がなければ起業しがたい立場におかれる。資本力のある者も前記のごとく利潤を租稅、公債等で吸收され、かつ配當の制限を受け、生產物資も高物價ながら公定され、全般的に利潤の制限があるために國家の欲する生產資金を捻出しがたき狀態となる。他方には轉業を餘儀なくされた國民勤勞力が豐富に存在するに拘らず、勤勞力の發揮が十分に行はれえない。かくのごとく國家財政の國民依存の體制と、營利經濟の矛盾に惱まされてゐるのは、營利經濟を基盤とする國家の姿であろう。

(五)生產が營利を目的とする經營組織にゆだねられるために、いかに國家や國民が要求する生產であつても、營利採算に合致しない場合は生產に着手しえられない。よしんば國家

が補助金を支給して生産を奬勵すべく努力したところで、國家の財源は國民所得、公債消化力の限界といふ鎖で縛られて、積極的に當該生産の增進を計りがたい。

(六)各國が競つて樹立しつゝあるところの産業團體の統制會なるものは、個々の民間企業の亂立を統一するものではなく、企業はあくまでも自己の利潤增大を欲してやまない。したがつて指導の如何によつては企業體間における增設資材の爭奪を誘發する傾向がある。さりとて限られた資材を各企業に配給すると、纒つた設備は一つも出來ないことになる。原料の配分も複雜にして、一企業にのみ配給すれば他の操業が停止され、平等に配給すれば一時活動、一時休眠といふ現象が起る。しかも經營者は使用人員に報酬を支給しなければならぬ。したがつて商品の高價格を認めて增收を許容するか、あるひはその反對に低價格政策を强行すれば、かれらは生産品の粗惡化と、勤勞者に對しては强度の勤勞を要請し、國民體位の持續性を磨滅せしめる惧れがある。かくて統制會も營利經濟の矛盾の解決、並に生産力の最大限の擴充を期しがたいものといはねばならぬ。したがつて戰爭經濟體制として最良の手段たりがたい。

(七)國民生活必需品等の配給機關を依然として營利を目的とする商業者に委ねることは、闇相場と情實賣を根絶しがたいうらみがある。

(八)國家の運命をかけての戰ひは、國民に對してあらゆる苦難にうち勝つことを要請する。いかに生活苦に迫られても國家戰力を昂揚せしめねばならぬ。そこには國民の偉大な道義的情熱の發揮を必要とする。それにもかゝはらず、國内において一部企業家が巨額の收入を得て自己のみが生活を享樂しうるといふ經濟體制は、國民の情熱を國家的に沸らす道義心を阻害する惧れがある。

世界戰に突入して以來、一般的傾向として各國は國家總力戰體制の樹立に努力しつゝあるとはいへ、その内容は右のごとく營利に基礎を置く經濟體制である。したがつてそれは眞に國家總力を最大限に昂揚しうる體制といふべきではなく、國家總力戰經濟體制樹立への過渡的形態とみるべきであつて、やがては戰ひの長期化とゝもにこれらの諸缺陷を克服せざるをえない實狀に迫られるであろう。

ドイツ、イタリー等の國々が、戰前すでに自由主義的營利主義經濟から國家統制經濟に改變したのは、武力戰期に突入してゐなかつたとはいへ、經濟戰においてすでに米英に壓迫されつゝあつたからであろう。經濟戰に際して自國を防衞するためには、自由主義經濟の反國家性を

容認することができなかつに。さりとて當時、自由主義的營利主義經濟にとつて代る經濟體制はかの社會主義的經濟の理論體系以外にその方式を發見することができなかつた。しかるに社會主義經濟は、國民の歷史的な努力を認めず、かつまた國民の總力を理解せず、徒らに血で血を洗ふ同胞の相剋を惹起する體制であることを、現實にソ聯國家の樹立で見せつけられてゐた。しかもドイツ、イタリー等は、すでに深刻なる經濟戰に苦しんでゐたのである。自由主義經濟を排除しなければならないとは認識してゐたが、營利主義の反國家的性格の根柢にメスを入れて、新たな國家的總力體制たりうる經濟機構の理論體系を創造する遑なく、ついに中間的な國家統制經濟を樹立したのであろう。したがつて在來の營利主義的な「經濟學」から完全に離脱しえず、その原理に禍されたものとみるべきである。だが、それにもかゝはらず、營利主義經濟の中から自由主義的諸要素を排除し、國家の統制が强化された經濟體系を組み立てたことは、一段と國力を昂めることゝはなつた。

今次の世界大戰の開始とゝもに、各國が急遽改變した經濟機構の多くはドイツ、イタリーに學ぶところが多かつた。しかもその改裝は、總力的戰爭——武力戰期の段階に突入して以來、戰爭の必要に迫られてやむなく改裝したものであつて、多くの國民の理解の上に築かれたものではない。それがため改裝の必要さを理解してゐる者は、概ね戰爭指導の任に當りつゝある當局者であつて、いまだ一般國民の理解にまで浸透してゐるとはいひがたい。そこに國家統制の困難さが伏在するし、また理解しうる道義性が缺如してゐる。

米英のごとく自國民のみならず、他民族に對する搾取と支配の上に自らの樂園を築かんとするものは、道義的經濟の必要さを國民に理解させようとはしない。何故ならば、國民の理解の上に築かれた體制は、戰後といへどもついに解體しえないであろうから。したがつてまた、總力戰のさ中にあつて自國の戰力を最大限に昂揚せしめる體制を樹立しえないのである。こゝに個人主義思想に立つものゝ弱點がある。

自らの國內體制の基礎を道義に求めることなく、國家國民の努力をして個人の利得に歸せしめんとする營利主義經濟を形造るかぎり、自國民のみならず、他民族をも理解の上に協力せしめることが困難であらう。

第五節　道義的總力體制の萌芽

今次の世界戰開始の目的は、前大戰と同じく一般的には各民族國家が生存資源の獲得をめざ

しての戰ひであつた。人類の生存資源活用の範圍は前大戰時代以上廣汎に亘り、兵器の性能が飛躍的に增大してゐるために、戰爭の規模は前大戰をはるかに凌ぐ世界性と、深刻性とをもつものである。

いづれの交戰國も前後の差、意識的計畫と無意識的計畫の相違こそあれ、一應は自由主義を排除して國家統制を强化し、深刻なる矛盾に陷りつゝも、國內戰力の高度化を計りつゝある。しかしながら一國と一國とのたゝかひならば、いづれかゞ早く總力戰體制を樹立することによつて勝敗を決することも可能であろうが、現時のごとき世界戰においては一國の總力戰體制の形成のみで勝敗を決することが不可能であろう。それは一國の戰力の最大限の發動に加ふるに、より大なる同盟軍を世界的に形成すること、いひかへるならば國際的總力戰體制を形成することが戰爭の勝敗を決する重大な關鍵である。これをより正確にいふならば、國內の總力戰體制をして魂なき形態たらしめず、國民擧つて理解と情熱とを湧き沸らすところの總力戰體制を樹立することであり、他民族の總力をも自己陣營に協力せしめる橫の總力——國際的總力戰體制を形成することである。

現世界戰においてはすでに軍事同盟が結ばれてゐるが、それはわが皇國と協力する東亞諸民族の間における結合のごとく心からの同盟ではなく、その基調の多くは實に同盟諸國がいづれも同じ運命に置かれ、かつまた共同の敵を持つにいたつたといふことが、同盟締結の原因をなしてゐるかに見える。それは相互利用の精神によつて形づくられた形態といはれても否みえないであろう。たとへば米英がソ聯を援助するのは、ソ聯を救濟せんとする意志からではなく、ソ聯をして獨伊と抗爭せしめることによつて獨伊を弱化せしめ、それに反比例して自らの戰力を昂め、自國を有利に展開せんとするに外ならない。また米英が支那抗日勢力を援助するのは、かれらがいふやうに支那民族の解放のためではなく、それは日本と戰はしめることによつて、日本の戰力を低下させ、自己の東亞支配を維持せんがためである。さらに米英間の軍事同盟をみるに、かれらは世界人類を資本力によつて支配し、搾取し續ける世界秩序を維持存續させんとするところに共通の利害があるのであつて、それはまことに正義人道のためでも、また自由のための戰ひでもない。かれらの同盟は、例へば人間を襲ふ二つの狼の中、その一匹が殺されたときに、また他の一匹も危險になるといふ危機を豫知してゐるが故の同盟である。したがつて狼同志は決して固く結合してゐるものではない。かの珊瑚海の海戰において、わが海軍の威力に遭遇するや、一隊形をなしてゐた米英聯合艦隊中よりいち早く英艦が遁走し、米艦を

「見殺し」にした行動はかゝる事情を如實に物語つてゐる。

世界戰に勝利するためには、世界的規模において總力を集中しなければならないのであるが、總力形成としての現時の同盟形態の中には、かくのごとく相互利用の精神を基調としたものが多い。それ故、情勢の變化によつては急轉向する總力形態である。それは疑ふことを知らない人士をして啞然たらしめる。

國內における總力戰體制をたゞ形態のみに止め、國際的總力體制もまた相互利用の體制に形造らんとすることは、深刻激甚な現世界戰における最良の總力形態とはいへない。戰ひが世界的性格となり、戰域が世界的に擴大されてゐる今日、前大戰の遺訓たる一國內の總力戰體制だけでは必勝の態勢とはいはれえない。今日の段階では國際的總力戰體制の樹立まで昂めなければならないし、總力戰體制の內容は道義を基礎とするものにまで深めなければならぬ。が、それにもかゝはらず、多くの國々は國內總力戰體制を假裝的體制とし、橫の體制——國際的總力戰體制も「利用體制」とするかのごときは何故か。「あらゆる存在は合理的なり」といふヘーゲルの哲學觀から見るまでもなく、それは戰爭の目標そのものが自國本位のものだからである。戰爭の目的そのものが功利主義そのものだからである。

前項で述べたやうに戰ひの原因は人類の生存資源を獨占する國家と、生存資源の枯渴にあえぐ國家との存在にあり、しかも生存資源を世界的に求める段階に人類が進步したがゆえに、戰ひもまた世界戰となつたのである。

英米等は武力によつて資源を獨占し、資本力によつて世界資源を支配してきたことに對し、獨伊はまたかゝる資源を奪還せんとした。それは國家生存圈の生命を維持するために絕對必須の行動であつて、武力による獨占、資本による支配に對し、戰ひによつて獨占された生存資源を奪還せんとするのは當然であろう。

しかしながら戰ひの動機はいかやうであろうとも、戰ひの性格は終始かくのごとくであるならば、守る者も攻むる者もそれはあくまでも自國民族の繁榮を基調とするものであつて、永久に解決されることなき戰ひである。鬪爭の理念は自國本位の『個』の主張であつては全體と融和しえない運命におかれる。それは資源の獨占者に對する憎惡の感情を、やがてはまた自らが受け繼がんとするものである。

戰ひの目的は自己發展を基調とするかぎり、はてしのない性格の戰ひとなる。それは生きとし生けるかぎり爭鬪から解放されえない宿命の鎖につながれる。

從來の人類鬪爭史を貫く一般的原理は、自己の國家生存圏を擁護せんとするものであり、『優勝劣敗』『弱肉强食』といふ動物的世界の原則を、人類世界がそのまゝに踏襲してきたのであつた。

かゝる理念に立つならば、國內總力戰體制も理念の反映として個人本位の思想に立つ機構を殘存せしめるにいたるであろう。資本による利得と資本による企業に、國家もまた國民も縛られるところの營利的經濟を『總力戰經濟』として形成せんとするであろう。それで眞に國民の理解と熱血を沸ぎらせうるであろうか。弱肉强食の理念はまた國際戰線にも反映して相互利用による「同盟」を形成することゝなる。これで眞に心からの同盟のごとき總力を發揮しうるであろうか。

思想謀略、謀略的思想戰はいまはじまつたことではなく、中世期時代から行はれてゐた。人類進步の現代においての謀略的思想戰は、個々の局部的戰術の中にありえても、戰略の中には生きられえないであろう。それとゝもに一國の總力戰形成の根柢を道義的精神とその顯現に求めずして、當面を僞裝する『總力戰體制』を形づくることは、國民の疑惑を誘發しえても決して情熱をさゝげしめる體制にまで昂められえないであろう。また國際的にも利害中心に提携せんとするかぎり、自國の發展のみを念願する戰爭であるかぎりは、同じ目的の民族との鬪爭の再發は必然である。

現世界戰において、かくのごとき自己本位に立脚せんとする思想と體制の殘存する中に、こゝに道義的世界の樹立、共存共榮を理念たらしめんとする國家民族がある。

それは英米のやうに資源の獨占を强行せんとするものでなく、資源を有無交流せしめ、共榮體制を形成せんとするものである。戰爭の動機はいかやうであろうとも、戰爭の目的は自國の繁榮のみを目的とするものではない。

自國の繁榮を目的とする戰ひを繼續するならば、他民族もまた自己民族の生存を防衛するために戰ふであろう。今日の米英に對する鬪爭のごとく、世界の人類は共同の敵として戰ひを開始するは必然の勢ひである。が、その反對に人類の生存資源を『有無交流』せんとする共存體制の樹立を目的とする戰ひならば、虐げられ來つた弱少民族をはじめ、全世界の多くの人々を理解の上に協力せしめうるし、また戰ひの過程において眞に心からなる道義的な國際的總力戰體制を形成しうるであろう。したがつて世界的規模の鬪爭にも勝利が約束されることゝなり、その勝利は、ついに人類間の鬪爭を終焉に導くことができる。

支那事變の勃發以來、現世界戰のあはたゞしい中にあつても、かゝる道義的な共存共榮の理念をいさゝかも歪げることなく、世界を家族體的な一宇たらしめんとする國家は、わが皇國であることはいふまでもない。

まことにかゝる理念に基く體制を世界に打ち樹てる戰ひは眞の聖戰といふべく、そのために所要の物資・人力を集中することは人類相互の鬪爭を根絶し、眞の平和をもたらしうる道義的行爲である。

人類は、かつては原始的生活ながらも相剋なき平和な家族的生活を營んだこともあつた。しかるに資源の活用を知るとゝもに他動物を征服してその脅威から免れうることができたが、また悲しくも生存資源の獲得のために人類相互が鬪はねばならなかつた。鬪爭の規模は資源活用の規模の擴大するにつれてまた擴大した。今日の世界戰にも原始時代からの動物的理念――『弱肉强食』の理念を忠實にも繼承し再現せんとしてゐる國家が多い。その間、叫ばれるべくして叫ばれることなく、實踐すべくして實踐しえられなかつた道義的理念――共存共榮の理念を、今日の世界に顯現せんとする萌芽をみるにいたつたことは、最大の惱みの中から最大の光明を發見したものといはねばならぬ。

かくのごとき道義的理念の現世界における顯現の萌芽は、わが皇國の奮起によつて釀成されはじめたのであるが、あたかもこれと呼應するがごとく、資源獲得方法の質的變化が起りつつある。それは各國家生存圏内でのみ滿たされることなき多くの生存資源が、科學の進歩によつて自國の領土内で生產されはじめたことである。たとへばいづれの國家生存圏も近時鐵鋼資源を世界の隅々まで求めてゐるが、この鐵鋼使用面の一部を補ふべくホクトプレスが現はれた。これはいづれの土地においても栽培が可能といはれる高粱の實の外皮、内皮から再生されるのである。石油の代用品としては周知のごとく、木炭瓦斯や、あるひは材木から製出し、さらに高性能を發揮するものとして、空氣と水の中から石油代用品を製造すべく研究されてゐるといはれる。

石炭、鐵鋼、石油等の限られたる資源が戰爭によつて大量に消耗されてゐる現狀は、それが獲得と開發に人類をして異常の努力を傾注させた結果、これに代る物資が登場したのである。無限に存在する空氣や水、準無限とも見られるべき植物よりの再製によつて、世界に偏在する資源の代用品が發明されるならば、人類をして資源獲得の爭鬪意慾を弱化せしめるであろう。

いづれの國家にも存在する普遍的資源としての空氣、水、土、栽培容易な植物等から人類生

存の物資が再製される時代が目前に迫つてきてゐる。人類が地球の此處、彼處に偏在する資源への依存から、自國の領土内で必要な物資を製造するやうになれば、資源獲得としての爭鬪から解放されることができる。かゝる事態の實現は夢のやうな遠い將來のことゝして一笑に附するにはあまりに多くの代用品が登場した。それゆえ道義的世界體制の建設はかゝる科學的發明への努力と共に進められねばならぬ。

しからばかゝる道義的理念の顯現と、科學的飛躍への世界體制はいかなる內容をもつものであろうか。

かくのごとき世界的課題に對し、獨善的な對策――自らの頭腦の中でのみ悅樂するがごとき性質の解答では課題解決とはいはれえない。それは『兆民』をして理解せしめうるものでなければ、地上に顯現し現實を變革する理論とはならないであろう。

新たなる世界觀「萬邦をして各々其の所を得しめ兆民をして悉く其の堵に安んぜしむる」理念は、わが國肇國以來の理念である。かゝる道義的理念を現世界に顯現するための方策は、永い歷史の經驗の中から、現實の世界の中から具さに汲み取らねばならぬ。いかに聖なる理念であつても、理念の範疇に閉じ込められてゐる限りは、現實を解決する力とはならないであろう。

第二編　國家經濟の變革史

第一章　原始經濟とその崩壞

第一節　原始社會と經濟

原始時代における經濟の樣相を觀察しうるものは、歷史的な諸種の遺跡と、現在いまだ幼稚な生活を續けてゐるところの原人の生活を觀て判斷することであろう。遺跡による類推はあくまでも類推であるが、原人等の原始的生活からは多くの示唆をうけるものがあらう。

近世における經濟活動とその組織網が甚だ複雜多樣な姿であるために、經濟の根源を極めるには一見難解なものであるが、人間が經濟活動を開始した當時の狀態から現代にいたるまでの足跡を觀るならば、複雜難解な經濟の原理を把握するに重要な資料をえられることが尠くない。

原始經濟はまことに單純なものであつた。人類は生きるためには何よりも先づ勤勞によつて衣食住を滿たさねばならなかつた。その勤勞は純然たる肉體勞働であつて、今日のごとく機械を操作して勞働を補助せしめることを知らなかつたのである。

原始時代の人類は自らの手や足を働かして食糧を漁り、草や木の葉をまとふて寒さを防ぎ、洞穴や大木の枝に寢床を造っては衣食住を滿たしてゐたのである。それは獸類の生活と大差のないみじめなものであつたであろう。

すべての生きとし生けるものに共通することであるが、人類が生活するには、生活するに好適な自然の諸條件が具備されてゐる地帶を選んだであろう。すなはち簡單な衣服で生活しえられる温度の地帶であり、植物が生ひ繁つて果實が色とり〴〵に實り、絶へずきれいな水の河川がある地帶を最も好ましい安住の地として選んだであろう。いふまでもなく、人間は自然に適應する性格をもち、自然を克服する知識を備へてゐる素質があるとはいへ、その日その日の衣食住が心配であつたかれらには、簡單に働きさへすれば生活しえられるところの自然的條件が具備されてゐる土地を探し求めたことであらう。何等の飲食物もない渺々たる沙漠の上では生活することができなかつた。現代人類にも共通するものであるが、原始時代の人類も亞熱帶や温帶地方にして、河川の流域や海岸沿線の豐穣な土地が、かれらの生活地域として選ばれたであろう。

原始時代の初期における人類は農業を營んだり、また機械器具を使用して物資を生産することを知らなかつた。自然が生活資材をそのまゝ提供してくれなければ、かれらは生きて行くことが不可能であつた。果實を採集したり、沿岸の漁貝類を捕獲したり、抵抗力の弱い動物を狩獵して生活する以外に、生活の方法を知らなかつたのである。『海の幸』『山の幸』はかれらの生活のすべての物資であつて、「神」としてあがめ奉るところの「物」であつたにちがひない。

自然に育つところのもので、そのまゝ食物となり、衣服となり、住居となりうる物資のみによつて生活してゐたかれらは、多數の人口を擁して一定地域に定住することが困難であつた。それは自然に育つ食物には一定の限度があるから、大人口でそれらの物資を採りつくしてしまへば、その後の生活ができないからである。したがつて原始人は、少人數で分散しつゝ最も捕獲し採取し易き物を食料とした。

わが國原始時代の遺跡にもその名殘りがある。太平洋岸、瀨戸内海等に見られる貝塚の遺跡は、原始住民の主食物が何であつたかを明らかに物語るものである。

したがつて當時の社會とは一家一門の間における生活形態であつて、拾集捕獲した物資を、一家一門で分配し合ひながら生活するといふ家族的生活を營んでゐたのである。それ以外にかれらの生活には餘裕がなかつた。

原始社會の研究において世界的權威といはれてゐるモルガンの説に依れば「當時の社會は共同體的形態であつて、狩獵と漁撈とを主要なる食料獲得方法とし、その生産と配給、消費等は共同に行はれた。要するに種々の行事が共同に行はれ、家族間並に一門一族の共同體的社會であつた。」――といはれてゐるやうに、當時の社會は自然の食料の量に一應の限度があるために、一定地域において大都市を形成することが不可能であつたばかりでなく、生産と消費の經濟關係も個人主義的な方法では成り立たなかつたのである。かゝる例證として伊豆の初島を觀ることができる。この島では現在住民の戸數を四十一戸と定め、それ以外は增加させないといはれる。加剩人員は出鄕して生活しなければならないことになつてゐる。それも元祿時代前までの戸數は二十戸位であつたが、同時代の末期に漁場の島民への解放と、漁網の使用が許されて以來、急激に四十一戸に增加したまゝ今日にいたつてゐる。この島では漁業が共同に行はれることが多く、したがつて分配も同じやうに行はれてゐるといふことである。――すなはち漁網の使用により生産が增大したゝめに住民を增加せしめることができたのである。

原始時代における初期の社會は家族體社會であり、生産と分配も家族的に行はれたことは當時の生産――果實の拾集・漁撈・狩獵等の幼稚なる方法をもつてしては、個人的に放恣的な消費を可能ならしめる物資の獲得が困難なる狀態にあつたことに重大な原因がある。

さらに、かゝる原始住民の家族體的生活の形成は、貧弱な生産手段による原因以外に、天變地變による自然の脅威や猛獸の襲擊に對する防衛の方法として必須的に形成されねばならなかつたであろう。

かれらは自然の脅威たる暴風雨・地震・火災等の突發する度毎に戰慄した。向ふところ敵なしの概ある獰猛な百獸の襲擊に惱まされ續けたことであろう。水害防衛の土木工事、暴風雨を避ける地下――洞穴等の作業は集團的な共同工作が必要であつた。かれらは果實の拾集や漁撈や狩獵には獨りで出掛けることができなかつたのである。それは咆哮して襲ひかゝる猛獸とたたかふには獨りでは危險なことであつた。かれらは常に集團的に勤勞しつゝ獸類とたゝかひ、集團的に移住して居住したのであろう。

かくのごとく原始人類の生産は幼稚であつて、人口增大の生活的條件が貧弱であり、たへず獸類とたゝかはねばならないために、人間と人間の鬪爭を惹起する邉も餘裕もなく、人間自らが最底の生活を維持するにやつとのことであつたにちがひない。そして貧しい生活の中にあつても人と人との交りは親密そのものであつたであろう。家族同士が、友人同士が、部落全員が

親睦を續けて團結する以外に、自らの生存を維持しえられなかつたのである。共に働き、共に食料を分配し、共に洞穴を掘り合つては住居を造り、團結しては猛獸に抵抗した。そのさまは難破した船員が猛獸の荒れ狂ふ絶海の孤島に泳ぎついたときのやうな生活であつたであらう。人を信じ、人と手を組んで生活することは、かれら原始人類の生き拔く最良の手段であつたとみるべきである。

したがつて家庭にあつては、生みの母を中心にして生活した。母が家長であり、愛の女神であつた。隣り近所はすべて血のつながる一族であつて、權謀術數を弄して反目する由もない。いざ何事かがあるときには、一門一族が集合して變に對したことであらう。社會は一家のごときものであつた。

文字などもない時代であるから經驗の記錄もない。親から子へ孫へと口碑による傳達によつて經驗を集積しては漸次知識が發達したであろう。かれらの社會における中心は「家」であつて、家族が增加して分家した後といへども元の家を本家として畏敬してゐた。本家の長や物知りの老人が社會の指導者であつたのであろう。その例は今日でも農村で見られる家族的風習である。

原始時代の初期においては農業を知らなかつたのであるから、分家をする場合には必ずしも土着するとは限らず、わが國で今日にも見られるやうな、かの山窩の生活と似たもので、一團を成しては山野や沿岸に住み、あるひは放浪生活を續けることが多かつたのであろう。

いふまでもなく、かれらには土地の所有觀念もなく、また所有する必要もなかつたのである。原始人類の目の前にある自然の物資は『山の幸』であり、『海の幸』であつて、『天の惠み』を採つて生活してゐたのであつた。

かゝる時代には通貨もなく、またその必要もなかつた。それは現在のニューギニヤのパプア族並にコタバルの住民にその例を見る。たま〳〵他部落との間に交換が行はれても、それは物物交換であつて商業的に營まれたものではなかつた。かれらは、その日その日の糧のために働き、身の保全を圖るに精一つぱいの努力であつたに違ひない。

第二節　農業の勃興と交易の開始

原始時代の初期における人類の生活は、自らの力で動かすことのできない大自然の中で、自然のあたへてくれる物資を獲つて生活してゐたのであつて、かれらの生產活動は山野で兎や猪

を追ひまはして捕獲したり、樹によじのぼつては果實を採つたり、河や海岸では魚を追ひ込んで捕へたり、貝類を採取したりして食料を漁つてゐたのである。自然に實つた食料を採るのが唯一の食料生產事業であつたのだ。

かれらのかゝる永年にわたる經驗はその生產技術を進歩せしめずにはおかなかつた。狩獵の手段として陷穽に動物を追ひ込んだり、石を投げ、棒で殺したりする手段であつたのが、ついに弓矢といふ武器を發明するにいたつた。矢の先に石の尖つたのを附して鳥獸類をしとめるといふ方法を覺えたのである。漁撈には追ひ込みや先の尖つた竹竿で突いては捕獲してゐたのが、魚の骨や樹の枝を利用して釣ることも覺えたり、また麻やカヅラで網を作つては捕へるやうになつたであろう。

原始時代は石器時代ともいはれる位に、石で斧や槍や刄のやうなものまで製造され、丸木舟を製造することも知つた。かれらは漸次生產部面に對して積極的に活躍するやうになつた。

生產手段としての機具が發明されるにおよんで生產の飛躍的な增大をみた。また岩鹽を發見してその利用を知り、食料の貯藏をも學んだことであろう。戰慄のうちに闘はねばならなかつた猛獸に對しても、武器の發達によつて攻勢に轉ずることができるやうになつた。生產が擴充され人口が增大する。自然の災害を防衞するに適した家屋の建設も發明されるやうになつた。丸木舟に乘つては冒險的な航海も試みられ、交易もはじまつた。石器に次いで鐵器が發明されるにおよんで一層生產の發達をもたらしたのである。

製鐵の方法をも覺えた人間は刀・槍・斧等の武器を製造して、他の動物との闘爭には決定的な優位に立つにいたつた。漁撈には舟を使用したり、鐵の釣や「金突」が發明されて頓に生產が增大するにいたつた。

かくのごとく生產器具や武器が發達して、社會の生產が飛躍的に擴大し、猛獸の襲擊に對しても對抗する武器が生れたといふ二つのことは、當時の經濟機構や社會生活を變化せしめずにはおかなかつた。もはやかれら原始住民の山野沿岸等における生產的勞働は、集團的行動にまつまでもなく、家族間の範圍において活動ができるやうになつたのである。ありし日に恐れ戰いた猛獸にも、いまや弓矢があり、槍を手にすることができ、劍を握つてゐるのだ。少數の人員でも野外での活動が可能となり、生產が充分行はれるやうになつたのである。

かれらにはもはや生產部面における集團的行動はさして必須的な條件ではなくなつた。生活資料の獲得は家族單位の少數人員によつても行はれうるやうになつた。特に强大なる獲物に向

ふ以外は獨立的な生産が可能となり、したがつてまた消費部面においても、共同消費による節約を强ひて續ける必要がないまでに生産が增大されたのである。

石器の製造に次いで鐵器製造を覺えはじめた時代にかけて、人類の經濟狀態並に社會形態にかくのごとき一大變革が起りはじめたのである。

生産機具の發達と武器の進步は當時の經濟形態並に社會體制に重大な變化をもたらす條件となつたのであるが、これらの條件の他に、より決定的な變革をもたらしたものは農業の發明であり、その勃興である。

農業とは植物を植えて生活資料を生産することであるが、原始住民が幼稚であつた時代は、前述のやうに自然に實る果實や野菜を採ることより知らなかつたのであるが、それが漸次稻を作り、果實を植培し、野菜を栽培するやうになつた。

農業を知りはじめた當初は自信をもてなかつたかも知れない。したがつてその初期にあつては家族のうちでも老人や婦女子等の仕事であつたかも知れない。しかるにそれが年を經るにおよんで部落全員の主要生産物となり、全部落が一致して田畑を開墾するにいたつた。荒れ果てた山野の開墾を少人數の手で行ふにはあまりにも難事業であつたであろう。が、機具の發達によりこれらの開墾も容易になつたのである。鐵製の斧や鋸の發明、鍬の製造等は人間の勞働を助成したのである。かくて農業は家族單位に行はれうる條件が成熟するとともに、食料物資生産の一大飛躍をみるにいたつた。いまや農耕は家族全員こぞつて從事するといふ主要生産にまで發達したのである。

また機具としての石器には石庖丁・石槌・石斧・石劍・石臼等種々の磨き上げたものがわが國の各所から發見されてゐるし、この石器時代にも紡績が相當に行はれてゐたと見えて、石製紡錘車と稱する遺物などもある。鐵器にいたつては、わが國では神代時代すでに發達してゐたものと見られ、この時代の中國人の書いた「倭人傳」にも、日本の鐵器製作は大陸地方から普及され、鐵鑛石を支那方面にまで買ひ取りに來たと書かれてゐる。

いづれにせよ原始時代の人智の發達は、機具の發達と農業の勃興によつて一段と昂められた。かくのごとく生産機具の發達と農業の勃興は、人口の增大を逐年助成するとゝもに、人類をして一定地域に定着せしめたのであつた。それは漁撈にしても狩獵にしても、毎年續けてゐると、それらの魚類や鳥獸が減少するし、人口の增大に比して捕獲量が減退すれば生活が出來なくなり、やむなく住居が轉々移動し、『山の幸』『海の幸』を求めて放浪することが多かつた

であろうが、生産機具の發達ははかなき放浪生活の不可避性を除去するにいたつた。それは一定地域に土着しても、生活の需要量を充足せしめうる物資の生産が可能となつたからである。なかんずく農業の勃興は一定の地域に土着しなければならない絶對的な條件となつた。

かれらが一定の地域に土着して生活するやうになつたことは、必然に他の地域の特殊的産物と交換しなければならなくなつた。山國の産物と海岸地帶の特産物との交換が必要となり、温い地方の産物と寒い地方の特産物との交換を要望するにいたつた。かくて交換經濟とそれに伴ふ交通が頻繁になつたのはまた自然の勢ひである。

交通が發達し交換が行はれるとゝもに更に人智の進歩を促した。人類の經驗と知識が廣汎な範圍において攝取されるがゆえに、他國の發明を模倣することが早められたであろう。文化は加速度的に發展して豐富多趣味な生活が開始されるやうになつた。

生産機具の發達と農業の勃興、交換經濟と交通の發展等の經濟關係の變化進展は、原始人類の經濟機構並に社會制度を變化せしめずにはおかない。原始住民はかゝる歴史的變化を意識すると否とにかゝはらず、事態は革命的展開を餘儀なくされつゝあるのだ。家族體的集團的な狩獵や漁撈等の生産的體制は先づ打破せられて、家族單位の生産形體をとるにいたつた。農耕地の共同的開墾とその耕作とが土地の家族的分割に——家族單位の土地耕作が開始せられた。土地開墾も相當行はれ、また開墾に必要なる機具が發達したゝめに、家族單位においても容易に開墾されうるやうになつたのである。

したがつて彼等の社會生活もいまや共同的消費の必要がなくなつた。家族單位における私的消費生活がはじまつたのである。

かくて原始經濟——原始的家族的體制が、おのづから崩壞する條件が成熟してきたのである。

第三節　資源の活用と人類鬪爭の開始

原始人類の永年にわたる苦鬪は酬ひられて、ついに幼稚とはいへ武器を發明し、生産機具を製作利用し、農作を知るにおよんで、その生活水準は一段と向上したのである。

殊に農耕が主要生産となつたことは、かれらの食料を充分に滿たし得ることゝなつたのである。いまやかれらはその食料を獲得するに、季節毎にめぐり來る果實を待つこともなく、捕へがたき動物を追ひかけてのみ食料を得るの切なさもなく、すき腹をかゝへては魚貝類を漁り歩

くせち辛さもなくなつた。農作に勵みさへすれば確實に作物が成長するのだ。土地こそはかれらの生命の「母」であり、「神」となつた。

耕作土地が家族單位に割り當てられて以來は、家族全員が擧げて農作に從事し、明け暮れ孜々營々として働いたことであろう。

しかしながら、耕作土地は家族的に割り當てられたとはいへ、それは土地の完全なる所有を意味するものではなく、『働き手』の多少によつて道義的に割り當てられたものと想はれる。當時の社會は未だ血族的な一家のごときものであつて、自己のみ繁榮せんとする觀念もなく、またその必要もなかつたのである。人口が增大して分家する際には、お互ひに手傳つては新たなる土地を開墾したのであろうし、また開墾する土地の餘裕もあつたのである。それ故、土地は使用する者の所屬でもあるし、人間全體の「勝手たるべき」ものであつたであろう。だが、關心を要することは、生產機具が發達したり、獸類の襲擊を少人數で防衞しうるやうになつてから、かゝる耕作地の割り當てが開始されたことは、後年における土地の私有性への萠芽をなせるものであり、土地に對する農民の愛着を惹起せしめた端緒であろう。

農作が住民の主要な生產手段となつてからは、人類がはじめて放浪性から土着性へと轉移した。けだし、一定の土地に土着することによつてのみ農作は可能となるからである。

人類のかゝる一定地域への土着は、その居住地を基點とした物資の交易を計るべく餘儀なくされる。このことは前にも觸れたやうに、他地方の特產物との交換を欲するからである。鐵鑛石のある國もあればない國もあるのだ。しかも彼等は、かゝる資材によつて武器や生產機具を製造しなければならない。

物資の交易は交通路の開設を先行とする。かれらは水路を調査し發達させた。交通路の發達した居住地にある民族の生產は向上し、道路もなく、水路もない民族は生產機具も武器も製造しえずして、相も變らず昔日のまゝの原始生活を續けなければならない。彼等は生活の向上を求めてひたむきに造船と道路の建設に努力したことであろう。陸路は人力を單位として物資を輸送してゐたであろうが、それが漸次牛馬や犬を使用するやうになつた。犬や牛馬での輸送が、また發展して牛馬車の利用にまで昂められたのである。

生活文化は向上せしめなければならぬ。だが、その向上は各種の資材を利用することによつて達成せられ、その利用はまた輸送力に依存せざるをえない。血族間の社會の範圍は小地域に止まるであろうが、小地域にすべての必要物資が生產されるといふことがなかつた。

太陽の光りはあまねく地上に何の差別もなくふりそゝいだ。しかるに地上には、高山があり溪谷があつて終日光のない所もある。温帶あり、寒帶あり、ゆたかに實る豐穰な土地がある反面、涯しない沙漠の土地もある。漁類が紺碧の海を茶褐色に染め變へるほど棲息してゐる海岸もあれば、波浪岸壁を嚙み、人も舟も近寄ることすら不可能な、魚棲まずして濁れる海もある。

地上の富は太陽のごとく一樣に全人類の上にふり注がなかつた。農耕を知り、鐵鑛の利用を學び、鹽の製法を覺えた人類は、土地が生命の糧であり、喜びの母であることを知るとゝもに、いづこの土地は生活資源が豐富であるかといふことをも知つたのである。が、このことは後年、全人類に生きる喜びをあたへるとゝもに、また悲哀と殺戮の煉獄の苦しみをもあたへたのであつた。

血のつながる一門一族をもつて形成せる當時の社會は、各地域の豐穰なる土地を選んで點々散在してゐたのであるが、種々の資源の利用を知るや、交易によつて有無相通、需要供給の生活を圖つた。また增大する自己民族をして豐穰なる地域への移住をも積極的に試みられた。

しかるに、生活必需品としての物資の有無相通を望んでも、それは一門一族の間にあつては何のこだはりもなく圓滿に行はれたであろうが、血族外における社會との交易はとかく圓滿に行はれえなかつた。かれらは何よりも自己を愛し、自己と血のつながる周邊の者を愛したのであつて、血のつながりのない社會に對しては、自己の生活を犧牲にしてまで物資を供給しようとはしなかつたのである。自己の一門一族に必要なものと自己の社會にあり餘る物資との交換を行つたが、當時の幼稚なる生產力の範圍で、やつと滿されるところの必需物資を、他の血族社會へも供給するといふ考へにはなれなかつたのである。それは近代社會の自由貿易のごとく、個人のみが繁榮せんとするならば營利採算の上に立つて交易をするが、かれらの當時の社會は一家のごとき血族的な家族的社會であつたがゆえに、自らの社會の繁榮を念願したのである。獸類を克服する武器を生產し、食糧・衣服・住居の建設等すべての生存資材を自足しなければ、かれら自らの生活が維持しえられなかつたのであるから、他の血族社會の生活などを考へてゐる餘裕をもてなかつた。それゆえに交易も自己社會の生存を中心にして行はれたのも無理のないことである。

何と悲しむべき發見であろうか。生活に必要な物資は、すべての血族社會の範圍内において充足されえず、あちらこちらに偏在し分布されてゐるのだ。しかも血族的に何等のゆかりのな

い家族的生存圏が各所に割據してゐるのである。

こゝにおいてかれらは一家一門一族の生存のために、かつては獸類にのみ使用してゐたところの武器を、他の血族社會に向つて使用し、武力に憑へて資源や土地の領有のために悽慘苛烈なる戰ひを開始するにいたつたのである。

攻める者も、守る者も、それ〳〵自己血族の生存を擁護するといふ合理性をもつてゐる。それはかのマルクス主義の說くやうに、階級鬪爭として出發したものではない。血族を愛するがゆえの戰ひとして開始されたのである。

生產機具を發明して生產力を擴充し、武器を製作して猛獸を擊退し、やうやくにして人間生活の安定を計りえたかと思つたのも、いまやうたかたのごとく消え去り、人間相互が相對峙して、愛と憎しみの葛藤せる、陰險にして慘忍なる殺戮戰を演じなければならない悲運に當面した。それは人間の意志によるたゝかひであるが、かれらは、たゝかひを憎みながらたゝかつたのである。攻める者にも、また守る者にも、血族愛といふ正義觀があつた。こゝに人間相互の鬪爭の主たる原因を要約すれば次の如くであろう。

(一)人類生存の必需品があまねく地球上に充滿せず、諸所に偏在してゐる。

(二)しかるに人類が生活の向上のために、廣大なる領域からの資源を求めはじめた反面、日々農耕を中心とする土着生活を開始した。

(三)人間社會が血族的に形成され、自然の資源を領有せる社會と、領有せざる社會が存在してゐることを知りはじめた。

原始時代のかれらは、自らの社會形成が大自然の條件と相矛盾せるものであることを知ろうとはせず、ひたむきに他民族の領有せる資源をめがけて突進した。そこには猛獸との鬪爭以上の悽慘酷烈なるたゝかひが待つてゐた。

この時代においても哲人があつた。かゝる人間相互の慘忍なるたゝかひを見て慟哭し、哀惜やるかたなく、血を吐く想ひで人類愛を强調したことであろう。しかしながらそれらの哀調をおびた敎義も、峰の木々の梢を渡る秋風の音にも似た哀歌であつて、世は依然として川の水のごとく末太りに鬪爭が强化した。それはけだし、彼等哲人も鬪爭の原因を何等現實的に解決しえなかつたからである。

第四節　國家の形成と職業の分化

獸類との鬪爭から人類間の鬪爭へ、舊きたゝかひから新しきたゝかひへ――原始人類は息つく暇もなく戰線に起たなければならなかつた。

戰ひは、戰ひとして同じであつても、戰ひの目標が異なつた。鬪爭目標の變化は必然に鬪爭の戰略轉換を餘儀なくする。

血族擁護の鬪爭――民族防衛の鬪爭は、兩者共に愛と正義の信念で凝り固つてゐる。したがつてその鬪爭は執拗であり果敢である。

鬪爭に敗れた血族は滅された上、一切の領土も財產も收奪される。敗れることは死をもつてしても尙ほ補ひえざる悲しみをあたへられた。たゝかひに勝つことは百年間の生產にも勝る財寶を奪ひ取る効果をもたらした。

人類間の執拗悽慘なる鬪爭が開始されてから、まづ當時の血族社會に次のごとき政治・經濟上の變化が起りはじめた。

それは血族社會に鬪爭の指導者が出現したことであつて、その指導者を中心とする强力なる國家が形成されはじめたことゝ、鬪爭を常に有利に導くために、常備兵、武器製造等の職業の分化がはじまつたことである。

人類間の戰鬪がいまだ開始されなかつた血族社會においては、同一血族の本家の長老に當る者が一族の首長として世襲してきたり、家族內にあつても家長が女子であつたりしたのであるが、永年に亘る人類間の鬪爭の經驗は、一族間の中で勝れたる指導者を必要とするにいたり、一族の間でも、武勇に富み、戰略に長じ、信望ある者がその一族の長として登場するやうになつた。勝れたる指導者を得られなかつた血族は滅亡の悲運を餘儀なくされたのである。家長も亦漸次鬪爭的な男性中心に移行した。

一族の指導者はもはや往年の首長のごとく、自分もともに生產に從事する邊がなくなつた。指導者は常に鬪爭の戰略戰術の研究に沒頭しなければならなかつた。また戰爭には內部の相剋が禁物である。血族內における土地の割り當てや、男女問題の葛藤などの紛爭を裁決し、常に社會をして安定せしめねばならないのだ。――指導者の任務は、かくして同一血族內の政治的指導者の地位にまで昂められたのである。

またかれらは他族の不意の襲擊を防ぐために物見の兵や、常備兵を有してゐなければならないし、武器の製造には技術的に勝れたる者をして專心製作せしめなければならなくなつた。その他に軍衣をも必要としたであろうし、築城に際して大工等の專門家も生れたであろう。

かくのごとくにして、人類間の鬪爭が開始されてから、鬪爭の指導者を中心とする國家が形成されて政治的活動が强化され、その軍事・行政の分野には專門的に活動するところの職業家ができたのである。それは近代の國家にみられる軍人・官吏と同じ役割であつて、戰爭に勝つための體制として生れたる職業の分化である。いふまでもなく、當時においてもいざ戰爭となれば篝火を擧げ、貝を吹き鳴して一族の若者を總動員したことであろうし、道路の開設、築城等の工事には全部落員は當然の義務として勤勞を奉仕したことであろうが、戰ひなき平時にあつては、分化された職業によつて、當該血族の防衛力を昂めることに努力せずにはおられなかつた。

指導者を中心とする國家的行政や軍政等が開始され、兵器軍衣等の生產の專門家が出現するには、それらの人々の日常生活を安定せしめることが先行しなければならない。これらの國家的業務に携さはる人々は、自らの生活物資を、自らが生產してゐる餘裕がない。だから當然の義務として農業・漁業に從事する者が生活資材を補給した。それはわが國においても封建時代とそれ以前に見られた「年貢米」のはじまりであり、近代國家における租稅の濫腸であつた。當時の住民はかゝる物納を、自らの社會防衛のために進んで行つたものと想像される。それは封建時代の物稅のやうに、農民が泣きの涙で納めたものとはその性格を異にするものである。

一族社會の指導者は常に戰略戰術を練り、社會內部に生起する紛議も裁斷し、軍事・行政の部面に活動する人々を統制し、物納した物資をそれ〴〵配分し、進んで生產技術を普及する等國家的・社會的活動を開始したのである。想へばかゝる國家の强化とその活動は、人類間の鬪爭のなかつた時代には考へられないことであつた。そこでは各家族が自己の生活資材を自己が生產し、一族內の重大問題の突發に際してのみ寄合を開き、相談して問題を解決することに努めたであろうが、その後はまたもや自各が生產に從事するといふ狀態であつて、本家の長で、首長であつてもまた同じやうに働いたであろう。人類間の鬪爭なき社會は職業の分化も政治的活動の强化の必要もなかつた。

人類間の鬪爭なき社會でも首長を中心として活動した點においては國家があつたが、國家の機關が强化され、國家の政治的活動が增大されたのは、人類との鬪爭が開始されてからであろう。

マルクス主義の所說によれば、國家とは權力であり支配であるといふ。またひところ流行した無政府共產主義に從へば、國家は不要なものであるといふ。が、かゝる所說は國家の起源に

溯つて考へるとき、いかに空虛な所說であるかといふことが分明する。國家の樹立とその政治的活動は人類生存の前提であつて、家庭なくして人は育生されないやうに、國家なくして生存も不可能である。

國家が戰爭とともに强化し政治的活動の重要性を增大したのであるが、嚴密な意味でいふならば、原始社會においてすでにして家長が國家の統治者としての存在であつた。また自由主義のいふがごとく國家をして寄合會議のごとき性格に形造らんとすることは、當該生存圈をして、强力なる國家を有する生存圈からの侵略を許容するものであり、死滅を待つところの愚かさである。

血族と血族との鬪爭——人類と人類の鬪爭が惹起されてから、國家機關が强化され、その政治的活動が增大するにいたつたとはいへ、それらは段階的に現はれるとは限らない。獸類と鬪爭しつゝ、また他の民族との鬪爭をも續けなければならない社會もあつたであろう。だが、理論的には、すくなくとも指導者を中心とする國家活動の强化は、人類との酷烈なる鬪爭の經驗から生れた必須的な條件であつたであろう。

血族的生存圈が自己の生存確保のために國家を强化したとはいつても、それはいまだ原始社會の崩壞を意味するものではなく、かへつてます〳〵一族內の家族化を助長したのである。生產機具が發達して、生產と消費が家族單位に行はれ、家族的社會の崩壞の經濟的條件が成熟しても、その政治的條件が家族體的性格を强力に要請してゐたのである。

原始生活の初期における家族體的社會は、生產が幼稚であり、かつ自然との鬪爭に勝利しなければならないといふ條件が、必然に社會を家族的な協同體の結成へと導いたものである。その後、漸次生產機具と武器が發達して、生產が豐かになり、獸類を慴伏せしめる狀態に發展しても、いまだ家族的社會の解體を意味しなかつた。同一血族の團欒の生活がしばし續いたといふ狀態であろう。しかるに人類と人類の鬪爭が開始されるや、急激に社會形態を戰鬪體形に編成しはじめたのである。それはますます社會の家族的體制を結束せしめ、指導者を中心とする國家の强力化と職業の分化による計畫的經濟體制へ移行したのである。いふまでもなく、さきに述べたやうに、現實の歷史は、かくのごとき論理的段階を經て發展したものではないであろうが、その轉換と變革の條件は、かくのごとくにして形成されたのであつた。

しかしながら、人類にまつはる悲劇は、いつまでも家族的社會の形成をゆるさなかつた。深刻執拗なる人類鬪爭が繰り返へされ、亡びゆく民族の歎きと、征服しゆく民族の凱歌とが交錯

すること幾星霜のうちに、完全に血族社會が崩壞し、したがつて家族的な原始社會も、またうたかたのごとく解體し去つたのである。

原始社會の終焉と、新たなる社會の出現とは、以下展開される歷史の樣相である。

第二章　封建社會の經濟

第一節　原始社會の崩壞と階級の發生

豐穰なる土地と貴重なる資源を求めて、人類と人類の鬪爭が展開されて以來、社會の諸體制を急速に鬪爭體制に再組織しはじめた。まづ血族社會にあつては、戰爭を指導し社會を統率する指導者が出現し、分業がはじまつた。

戰鬪が開始されるや强大にしてすぐれたる血族は、備へなき弱少血族を次から次へと征服した。それは恰も野獸を追ひはらつて田畠を開墾するやうに、領土は飛躍的に增大した。だが、人間社會の征服は野獸を驅逐した後のやうに簡單ではない。戰ひに敗れた一族は殺されたり、降伏したり、あるひは捕虜となつたりしたが、また逃亡した者が再び反擊して來たり、他の强大なる民族の援軍を得て復讐戰を開始する等、世相はまさに百鬼夜行・悽慘なる阿修羅場となり、人類間の鬪爭は盡くることなく反覆された。いづれの民族も愛と正義で固められたるたゝかひである。したがつてそのたゝかひは容赦なき殺戮戰とならざるをえない。

かくのごとく血族社會と血族社會との死鬪が繰り返されてゐるうちに、次のごとき新事態が發生した。

それは先づ第一に、奴隷の出現と階級差別の形成であり、第二は、血族社會の純血性が失はれて混血社會となつたことであり、第三は、指導者は君主・帝王・領主等の地位にまで高められたこと等であろう。その他都市が發生したり、逃亡者による商業が勃興したり、通貨が發生したこともまた新たな現象であつた。

強力なる一族が次から次へと他族を征服してゆくうちに、降伏者や捕虜をどのやうに始末するかゞ問題であつた。おそらく最初のうちはこれらの被征服者を殺したり、追放したりしてゐたであろうが、そのうちに征服者の命ずるまゝに勞働するところの奴隷として使用することを知つた。

戰ひに敗れて捕虜となつたり、降伏したりした一族のうちで壯健な者は奴隷にされ、美しい婦人は征服民族中の男子の意に從ふべく餘儀なくされた。荒野の開墾と農耕、橋梁の架設、築城、道路の開設等々の工事は概ね奴隷の骨肉によつて造られたものである。古代エジプトの奴隷はかの巨大なスフインクスを造り、支那における萬里の長城は、秦の始皇帝の制壓下にあつた多くの農民が、半奴隷的境遇の地位に置かれながら勞役して造られた。

人間が人間を支配する社會の出現は、人類と人類の鬪爭の副產物として生れたものである。一家一族の結合體であつた原始社會は、人類間の鬪爭が惹起されるやたちまちにして崩壞し去り、優れたる指導者は社會の王となり、君主となり、領主となつた反面、親と子が離別し、夫は奴隷にされ、妻は下婢として酷使される哀憐限りなき社會相が現出した。

奴隷は必ずしも戰ひに敗れた民族の兵士達とは限らない。階級社會が發生して以來、多くの奴隷は貧困故に身を賣買することゝなつたが、奴隷の發生は、戰鬪に敗れた一族、力なき血族が權力の前に徵用されたことにはじまる。

人類間の鬪ひが開始されて以來、強力な一族と弱少な血族とが一つの社會において混合して生活するにいたつたことは、同時に社會を混血化し、原始社會における純血性を失はしめた。すなはち如何に階級的社會とはいへ、男女關係まで峻別し遮斷することが不可能である。ましてや征服民族の男子が被征服民族の婦女を自由にする關係が生じたのであるから、必然に混血社會が現出するにいたつたのである。かゝる例は、フイリツピン、マライ等における白色人種と有色人種の混血の例を引くまでもなく、民族戰の後には必ず征服民族と被征服民族の混血—

—同化が行はれた。

他族を制壓して階級的政治體制を樹立し、社會がまた混血社會となつたことは、かつて原始社會に見られた道義的政治を失はしめた。指導する者も指導される者も、すべて血のつながる一族の間で行つたところの道義的政治關係が消滅した。人類鬪爭の後に樹立され、あるひは成立した國家の政治は、物と物との經濟關係、支配と被支配との政治關係が生じたのである。混血社會の雜多な生存圏に偉大な指導者がなく、いはゆる民主的政治を行つてゐた國家は、內部における紛爭と嫉視の相剋のうちに自壞の悲運を辿つたものが多い。キリスト敎の傳說にあるやうに、ユダヤ族の祖ヘブライ人は、パレスチナに移つて十二の政治集團に分裂し、つねに內亂を繰り返してゐるとき、西曆紀元前一〇〇〇年頃ダビデ現はれ、民族を統一して王となるや國勢揚つたが、其の後イスラエル國とユダヤ國とに分れて對立してゐたゝめ、遂に他國から亡ぼされてしまひ、今日のごとく祖國なき民族となつた。またギリシヤ人の祖、アーリヤ族の一派たるヘレネス民族は、ギリシヤに移住して以來大いに榮えたが、スパルタとアテネに分れ雙方嫉視反目を續けてゐるうちに、他民族から制壓されて弱少民族となり、今次世界戰にはついにドイツに呑まれてしまつた。

かくのごとく人類の鬪爭が開始されて以來、社會は鬪爭に順應すべく再組織されるとゝもに、領主・君主・王等の指導者を中心とする國家が樹立され、國內統制が日增しに强化された中には古代ローマのやうな民主々義的な國家も存在したが、いづれにせよ國家の支配力は强大化し、その命令を民衆が絕對的に服從しなければならないことを要請する條件が發生したのである。征服者と被征服者の二大社會層の混成であるから、かつての原始社會のやうに道義を中心とする政治體制では統治されえなかつたのである　征服民族の中でも指導者は領主となり君主と名づけられ、帝王として尊ばれ、他は貴族としての地位におかれた。被征服民族の中でも從順なる者、財產を獻納せる者、あるひは征服民族の事業に功勞のあつた者等は士分に取り立てられたり、庶民として遇されたりした。貧困なる者、反抗せる者等は奴隸として虐待せられる等、階級的差別下に置かれたのである。

かくのごとき混成社會を統治するには、國家が國民の階級層を利用することを得策とした。君主が貴族を、貴族は國家の役人となつて一般庶民を、庶民は己れより地位の低い奴隸を監督する等の方法により國家內部の統一化を圖つたのである。

しかしながら、かゝる段階はいまだ地方分權的な國家形成であつた。强大なる民族の征服の

大業といへども、それは該民族の周邊に對する統治であつて、遙かな遠方にまで勢力を及ぼすには道路、水運等の交通が不便であつたがために、やむをえず地方分權的國家形成の狀態たらざるをえなかつたのである。

階級社會の出現によつて、いつとはなしに家族的な原始社會が崩壞してしまつた。人類の間に階級が發生し、通貨によつて物が取引されるやうになり、かつての道義的社會が泡沫のやうに消え去つたのである。とはいへ、それはなんぴとの罪惡でもなく、生きんとする人類の歩む必然の道であつた。それは舊き制度が崩壞して新しき制度ができたのではなく。新しき制度の樹立とゝもに舊き制度が瓦壞し去つたのである。人類間の戰禍に見舞はれたことのない山間僻地には、今日でも僅かに原始社會の名殘りを見ることができるが、世の大勢は鬪爭の世界に捲き込まれてしまつた。

鬪爭に固められた社會は、更に喰ふか喰はれるかの次のたゝかひの世界に突入した。そこでは外患と內患との相剋の世界が展開された。

第二節　商業の勃興と通貨の發生

強力なる戰鬪的政治體制の樹立、並に被征服民族を包含せる階級社會の成立は、當時の經濟をして急速に發達せしめた。

事態はもはや原始社會のやうに一門一族が和やかな勤勞によつて生活するのではない。被征服者は領主の命ずるまゝに道路の開設、築城等の國家的工事には否應なしに强制徵用される。それは血しぶきを浴びながらの奴隸としての勞働者である。道路も發達し、また水運の便も開けた。夥しい奴隸は山野を開墾し、農作に從事した。

戰鬪に敗れて祖國を失ひ、住むに土地なく、農耕するに田畠なき身となつて逃亡せる民は、地方の特產物を賣買する商人となつた。

地方的資源を利用して手工業も發達した。麻・綿布・絹布等の織物工業をはじめとして、鐵鑛を產する地方では武器の製造が盛んになり、鹽の產地ではその製造と他國との取引も行つた。造船技術も進步し、陸上輸送では牛車・馬車等の利用による運輸手段も非常な發達を遂げたのである。

奴隸の出現や庶民からの納稅等によつて當時の貴族階級の生活が豐かになり、思考する閑や勉學する餘裕もできた。かくて生產手段、航海技術等々の躍進を遂げた。ギリシヤ古代の哲人

アリストテレスに向つて、東洋方面の文化が非常に發達してゐるがその理由如何、と時の人が質問したに對し、それは閑のある人が多いからだろう、と答へたといふことであるが、文化の發達は、まさに思考する餘裕のある階級が發生したことに大なる原因があつたのであろう。

とはいへ農業の發達も商工業の發展も國防力の强大化なしには不可能である。かれらは常により大なる敵と對峙してゐる。したがつて自己を防衞するためには、分散生活を營むことができなかつた。かれらは一定の地域に集團することを最も必要とした。守るにしても、攻めるにしても、命令一下、動員に應ずる人員が密集してゐなければならない。――かくて自然のうちに都市が形成された。都市は今日の支那等でも見られるやうに、城壁を設けた所もあつたであろう。かゝる都市に、君主とその兵馬、物資補給としての運輸機關、商人等が雲集することになつた。それは當時の社會の政治經濟上の中心となつたのである。

農耕・狩獵等の生產に各自が勤勞して、各自の生活資料を充足してゐた原始社會の生活と異なり、道路・水運の便が開かれ、かつまた生產手段の發達により生產が增大したことは、都市形成の經濟的基礎的諸條件が成熟したものといへやう。かれらは、かくして特定の地に密集して居住し、政治・軍事の中心地とするとともに、また物資の集散地としたのである。

國家機關の所在地は自然のうちに都市を形成するにいたつたが、他方、占領土地の農村・漁村の指導をもしなければならない。都市には手工業が發達したが、農山漁村は食糧物資、衣服等の生活資材生產の源泉地であり、弓・刀・軍船等の資材生產の據點である。したがつて當時の政治も、かゝる經濟資源地に對する行政に大なる力を注いだのである。

被征服民族の多くは、かゝる經濟資源地に配置されて生產の增大化を要請せられた。奴隸は領主の命に服さねばならない。領主の武力の前には、かれら人民は如何とも抗し得ない被征服民族である。かれらは領主の監督下にあつて明け暮れ勞働しなければならない弱者なのだ。奴隸の報酬はやうやく生命を維持しえられる食料と衣服、雨露をやつと凌ぎうる陋屋をあてがはれてゐるだけである。領主は土地と人民を支配して、生產の增大化と戰鬪に勝利するための責任者である。

被征服民族の祖先もかつて味はつたところの道義の社會、和やかなる生活はいまや失はれて、鞭と骨身を削る生活とがとつて代つた。

これらの生產地點の支配から成る物資の集散は都市を中心として營まれた。その間にあつて先祖代々墳墓の土地を追はれた旅商人や、領主に隸屬せる商人によつて商業が行はれはじめ

た。

征服民族は指導的地位に立ち、生產部面においては多くの被征服民族が從事した。國家は武器並にその資材の輸入やその他の物資の輸出入に力を注ぎ、流浪の民からなる商人階級は至るところに發生した。かくして國と國との物資の交流、國家內部における生產者と政治的指導者との間の物資交換が頻繁となつた。それは各家族每に自給自足の經濟を營んでゐた原始社會における物資交換の域を、はるかに越へた交換經濟がはじまつたのである。直接生產に從事する者と、國家的業務に從事する者との存在、職業分化の發展等の諸事情は、好むと好まざるとにかゝはらず、物資の交換を頻繁ならしめたのである。物の交換の頻繁化した社會に、交換を媒介し簡易化するところの手段が發生した。それは通貨の創造である。

原始社會においての物資の交換は、多くの場合相互に融通したり、あるひは社會的に共同配給する等の經濟生活であつた。それゆえ物の交換度數が尠く、したがつてまた交換を媒介するところの貨幣等は不必要であつた。かゝる社會は今日でも未開人種の社會に見られる現象である。しかるに人類間の鬪爭の結果、階級的社會が發生するにおよんで、道義的經濟に代るに力と力との社會、勤勞を强制する者と强制される者との間の經濟の發達となり、物の交換は道義を中心として行はれえなくなつた。物の交換は、十の價値ある物と十の價値ある他の物との物々交換となり、道義や信用に基く交換は影を潛めたのである。道義的交換の經濟關係が失はれた個人主義的な生活の社會においては、物の交換は直接に物をもつて行はなければならなくなつたのである。

だが、交換が頻繁となるにつれて物と物との直接の交換に非常な不便を感ずるやうになつたとへば甲の國は魚類と穀類が豐富であるが、織物類と鐵が不足してゐる場合、乙の國に鐵と穀類は豐富であるが魚類が不足してゐるとする。この場合甲の魚類と乙の鐵との交換が成立する。ところが丙の國には穀類・魚類・織物等共に豐富であつて鐵が不足してゐる狀態にあるときには、甲と丙の國の交換が出來ないことになる。甲の國はやむをえず乙の國の鐵を魚類と交換して得られた鐵の幾分かを、丙の國に運搬して織物と交換するといふ繁雜な交換を行はねばならないのだ。かゝる手數を要する交換經濟から、簡單に物資が交換される方法を當時の人類が考へた結果、いづれの國にも通用し得られる價値ある物——しかもそれは磨滅や燒失し難きもの、かつ量的に僅少なものを交換の媒介物として選んだのである。こゝに登場した物は、金銀・銅等の物であつた。いづれの國でもその價値を認めてゐる物、少量で高價な物としての金

銀・銅が物の交換の媒介物として採用されたのである。

いづれの國にも、いづれの人にも通用しえられる金銀銅が通貨として誕生するにいたつてからは、交換經濟は頓に簡易化することになつた。通貨さへ支拂へば自己の求める物と交換しえられる狀態になつたのである。物たる通貨は、戰亂に見舞はれて國家が沒落しても、物である限りその通貨が通用された。國家の內部では、かつて竹片や木片で通貨を造り、國家機關で發行したこともあつたであろう。今日支那の僻村にはなほ竹片の通貨を見ることがあるといはれるが、それらの物としての價値無き通貨は、ひとたび戰亂が起り、通貨を發行せる國家が瓦壞するや、たちまちにしてその價値を失ひ、竹片は竹片として、木片は木片として屑物扱ひにされたのである。だが、物としての價値ある金銀を通貨に採用するに及んでからは、竹木を通貨とした時代の不安もなく、不變の價値ある通貨として通用されるにいたつた。

通貨の出現によつて商業が一層發達したが、奴隸制の社會內ではその發展性を拘束されてゐた。各地から移住した民や逃亡した人々によつて形づくられた自由都市——古代ローマの社會のやうな都市では商業が大いに發展したが、領主と貴族の下に多くの奴隸が生活してゐた國家內では、領主と貴族が旅商人を通じて、あるひは自家の者に命じて取引する經濟であつて、國內において全面的に通貨が使用されたものではない。それがために旅商人や自由都市の人民等は、通貨の使用によつて商業が發展して豐かな生活を送る反面、奴隸制國家內の人民は骨肉を削る勞苦の外に何等報いられることがなかつた。

奴隸制社會を尻目にかけて、商工業の發達で向上せる生活を送る非奴隸制社會の存在は、奴隸的人民の渴望するところのものとなつた。かれら奴隸は、何等かの手段によつて奴隸制の桎梏を破壞せずにはゐられなかつた。

第三節　奴隸制の崩壞と封建國家の形成

人民を支配する者と支配される者とが、一つの社會に包含されるにいたつたが、これは何人も豫期したことでもなかつたし、また望んだことでもなかつたであろう。たえず向上せんとする人類の本能的要求が遂に地球上の資源を求めて爭奪し合ひ、人類と人類とが爭鬪するにいたつた結果醸成されたものである。指導する者と指導される者との生じたことが不可避的な事態であつたし、また勝れたる指導者が同一血族の間に生れたことは、その血族全體の生命を守り、かつ生活を豐富にしたのである。血族的生存圈の相互が鬪爭の結果、强者が勝ち弱者が負

けて、征服者と被征服者の生じたことは歴史的には必然の道であり、また不可避的な現象であつた。

かくして戰鬪に勝利せる血族が支配者層を形成して、多くの被支配者層を奴隷としたり、あるひは職人とし、農民とし、商人とし、運送者として使用し、一つの國家經濟を運營してきたのである。

翻つて社會内部を觀るに、それは壓制と悲涙の地獄相であつた。奴隷は苛烈な勞働に骨肉を碎き、農民は領主や貴族の苛斂誅求に哭き、職人や商人は支配者を横暴として憎惡の目を向けてゐた。

當時の政治の指導者としては、他國に勝利するために内部における統制を保持しなければならないし、また食糧、兵器、衣服等の物資の生産を增大しなければならなかつた。しかるに、社會内部はかつての血族社會のやうな道義的に一致せる社會ではなく、種々雜多な民族を包含してゐる上に、隙あらば反擊せんとする被征服者を内部に抱いてゐるのである。したがつて生存圈を維持するには温情のみでは指導しえられない。勢ひ强力なる政治的支配の手段をとらざるをえなかつたのである。またその生産狀態も被支配者の放恣なる勞働に委ねてゐるならば、各自得手勝手な生産にのみ從事することになるから、これまた政治的指導者の立場としては、必要な物資の生産擴充のために、國家的な勞働を要請しなければならなかつた。その結果、生産技術の進步改良をもたらし、當時の經濟を飛躍的に發展せしめたのである。

かくて一つの社會内に强力なる統制を要求する指導者層と、强制される生産者層の併立といふ矛盾せる相剋の狀態を呈することゝなつたが、しかも外敵との戰鬪は逐年大規模化されるばかりである。强國は弱國の人民と土地を併呑して增大するし、それに應じて被征服者もまた增大して社會の内的矛盾を一層激化するばかりであつた。

征服者の人員數は固定化してゐるに反し、被征服人民の數が年々增加することは、國家内部の政治勢力を不安定な狀態に陷れることゝなつた。何故ならば、被支配者は自らの數的優勢を背景として支配者層に反抗するからである。奴隷は逃亡したり、徒黨を組んで反抗したりして征服者の桎梏から離脱せんとする反面、征服者としては、人民の階級差を幾段階にも分けて被征服者層内の階級的葛藤を惹起させ、その結果、被征服者を全體的に無力化せんとする方法や强力なる彈壓手段をもつて内部統一を維持する等の手段を講ずるにいたつた。かゝる例證を英國の對印政策が明瞭に示してゐる。かくして社會内部は統制と反抗の氣運に分裂しはじめたの

である。

平和な生活、安居樂業は人類の本能的要求である。あまりにも悲慘な社會相の現出によつて、かつての血族間の生活としての原始社會を追想しては、現實の悲境を嘆き、人類相互の愛と平和を追慕する思想もまた發生した。佛敎、キリスト敎等々の宗敎は、かゝる時代相の下に釀成された敎義であり、いづれも人類愛を强調したものである。

人道を說き、愛を唱へ、正義を强調した當時の宗敎は、被征服人民の間を燎原の火の如く席捲した。當時の宗敎家は多くの被支配者から救ひの神として崇められ、人民は血潮を湧かせて信仰するにいたつた。その結果は社會內部の紛爭の火焰に油をかけた如き狀態となつたのである。王や領主に隸屬して束縛せられてゐた人民は、此處彼處に反旗を飜へしたり、遠い地方に一團となつては逃亡したり、その救ひを愛情と理解ある國家に求めたりした。

民族の大移動、奴隸の大逃亡等は多くこの時代に行はれた現象である。

領內に相剋を孕む國は脆弱である。もはや人民をして奴隸狀態に拘束することは不可能となつた。奴隸狀態から多くの人民を解放せる國は繁榮する情勢となつた。古代ローマは、先住民族の特權を解除して一般庶民を國政に參加させることによつて强大なものとなつた。わが國上代において、かの偉大なる聖賢、聖德太子によつて大化の改新が行はれ、各地に一國を形成して人民を奴隸の如くに扱つてゐた氏族制度を破壞した。それは土地と人民の私有——地方の權勢家の所有を禁じたのである。

奴隸を使用することによつて當初は生產の飛躍的增大をもたらしたが、奴隸制が幾世代に亘つて存續されてゐるうちに、社會內部の相剋の禍根となり、かへつてそれは國家政治を混亂せしめる原因となつたのであるが、さらに奴隸が解放された原因の一としては、それは當時の生產力の發達によることが多かつた。土地は開墾され、生產機具が發達したゝめに、農奴や職人を個々に奴隸として强制勞働下に置く生產制を持續する必要がすでに消滅したのである。人民を各自に勞働させて、その生產物の幾割かを獻納せしめる方法によつても、當時の社會經濟が維持せられるまでに發達した。奴隸狀態から人民を解放したが、その生產物の多くを物納せしめたのはいふまでもなく、宗敎家の說法の如き愛と正義等の徹底化を許容することが出來なかつた。何故ならば、世は依然として生存物資を求めての戰鬪が擴大されるばかりであつて、戰ひに勝利することによつて當該社會の人民の生命と生活が保障されたのであり、戰ひに勝利することをもつて最善の生活手段としてゐたことに何等の變りもなかつた。戰ひに勝利するため

には、指導者の命令に絶對的な服從を要請する情勢には何等の變化もなかつたのである。したがつて時代の本流に棹さすことなき一般的な人類愛の强調は、當時の政治指導者としても、かつまた戰ひに勝利することを要望する多數の人民としても、受け入れることができなかつたのである。

奴隷が解放されたのは宗教的な博愛主義の力によるものではない。煩雜な奴隷の監督の要もなく、かつまた人民をして創造的な熱意を發揮せしめるに可能な狀態に解放して勞働せしめる制度が、當時の經濟をして發達せしめる情勢となつたのであり、國内の政治を安定せしめることに役立つがゆえに、一般的に奴隷を解放したのである。したがつて當初の宗教家の說くがごときひたむきなる人類愛の說法に對しては彈壓せざるを得なかつた。キリスト教をはじめ、すべての宗教が發生當初、時の國家權力によつて壓迫されたのは、かゝる理由によるものでもあつた。人類愛に拘泥せる政治體制を續けることに專念してゐる狀態にあつては、命令一下行動を起すことの可能な戰鬪態勢下の國家に敗北せねばならなかつたのである。

發生的には人類の悲慘なる生活の救濟を叫んで生れた宗教も、その教義が後世に傳へられることのできたものは、多くはその傳道の途中において壓迫せられ、刀折れ、矢つきて變質したものが多い。樂園は現世にあるのではなく天國にあると說くことによつて、現世における憎惡と憤激、爭鬪と反抗に水をかけ、當時の國家の政治指導を助成することに役立つたものが「國教」として許容せられ、かつ奬勵さへされたのである。

被征服者を奴隷制下に置いて各地に割據してゐた小國家は、必然に内部的崩壞を餘儀なくされたり、人民の信賴を受けた强大な勢力を有する國家の威力の前に脆くも潰え去る運命を辿り、こゝに奴隷制社會が全面的に崩壞するにいたつたのである。

奴隷制經濟の崩壞とゝもに新たな政治・經濟制度が樹立された。それはさきにも述べたやうに、農奴は解放されて農民となり、職人、商人等は領主や貴族の隷屬から一應離脱して各自の業務に專心すると同時に、領主とは臣下・主從の關係に結ばれ、物稅や貨幣をもつて納稅する經濟關係におかれた。耕作土地は耕作者の所有となつて賣買を行ふこともできるやうになつたが、それにもかゝはらず、根本的には土地も人民も領主の支配下に左右される封建制度となつた。それは奴隷制ではないが、當該國家の戰鬪態勢の必要から領主の意志で土地の割當てや人民の生命すらも自由に左右しうる體制を維持したのである。

それにつけても、前時代の奴隷的經濟關係の生活に比して人民ははるかに生活力をあたへら

れた。農民、職人、商業者等の人民は自らの生活を豐富に營みうる關係に置かれたのであるから、その生産力はまた大なる躍進を遂げた。それは被征服者としての立場を忘れ去つて、自らの生活を、自らの力によつて向上せしめる光明があたへられたことである。

かくのごとくにして農民はその生産物を各地方に賣り出すこともでき、職人はその手工業品を販賣して生活し、商人は領内だけではなく領外との取引をも頻繁に行つた。すなはち經濟關係は廣域經濟關係へと發展しはじめたのである。かくて交通運輸の便も大いに發達した。

經濟關係のかゝる躍進は、必然に政治的關係をも地方制から全國制へと展開せしめる。地方分權的な封建國家から、中央集權的な封建的大國家への發展を促さずにはおかなかつた。

わが國における德川幕府による封建的中央集權制の樹立等は、かゝる時代を反映したものであり、西歐におけるフランス、イギリス、ロシヤ、イタリー、プロシヤ等々の王制國家の樹立と軌を一にするものであつた。

第四節　封建制度と商品經濟の矛盾

封建制度は各國の事情によつて種々異なるところがあるが、それにもかゝはらず、根本的な點では共通性を有してゐる。それは行政・經濟・軍事等一切の政治は王や領主の命令で決せられ、土地と人民も隸屬した固い主從關係に結ばれる。

わが國の封建制度としての戰國時代は、獨立した各地領主が土地制度の制定や商人からの徵稅等を決したが、それ以後における德川幕府の時代になると、各地領主を幕府が支配する中央集權的封建政治であつた。西歐においては王侯貴族が土地を有して農民に小作せしめ、商人からは徵稅する方法であつて、わが國の地方領主と西歐の貴族と類似するものがあつた。

かくのごとく封建制度は世界的に共通してゐるのであるが、それは當然のことで、さきに述べたやうに人類生存のための必然の歷史的過程だからである。人類鬪爭の結果、弱者は强者の奴隸とされ、したがつて奴隸の增大化と生産力の發達は、奴隸を解放して小作農民としたゞけである。集團的な鬪爭には勝れたる指導者を必要とする。指導者は人民の信賴と畏敬のもとに領主となり王となる。領主や王は他國との戰鬪に勝利して自國の生活を豐富にするためには、徹底的な統制を必要とする。

封建制度の下では一應奴隸が解放されて、領主と人民は主從關係に立つたといふものゝ、奴隸が完全に消滅したのではない。その後も貧困な者、あるひは罪人等は奴隸にされたことが多

いのであるが、一般的にはかゝる制度が解かれたのである。

中央集權的封建國家が成立して以來、領内の社會秩序が保たれて領民が生産に熱中することができた。小國家の亂立時代は戰亂常なく、その度毎に田畠は荒され、人家は類燒の厄にあつた。かゝる被害は、狹隘な領土の國家間の戰鬪にあつては領内人民の悉くが受けねばならなかつた。それがため領民の生産活動は阻害されたのであるが、中央集權的封建國家が確立するや領主間の個々の爭鬪が終熄し、戰ひの規模は廣大な國家領域の一地方で行はれることが多く、大多數の農民、職人、商業者等の生産活動が活潑に行はれるやうになつたのである。わが國においても中央集權的な封建國家としての豐臣秀吉時代の朝鮮征伐、あるひは關ヶ原の戰ひ等が起されたが、戰ひによる被害は少數の人民のみであつた。

封建國家の任務は何よりもまづ、大規模に戰はれる外敵との戰ひに備へることであり、國内における叛亂の危險を防止することであつた。そのために中央政府も、各地の貴族・領主もそれぞれ武士をより多く養成して武力を擴充した。

封建國家はその支配的體制を維持し存續するためには兵力の增大化とその訓練とが必要であつた。多數の武士階級は直接の生産部面から乖離して武藝を練り、ひとたび戰ひが開始されるや尨大な物資と人員の徵用を農民階級に求めた。農民は土地と共に封建國家に從屬せる要素なのだ。その反面、戰亂が終熄すると領主を中心とする武士階級は日常の怠屈さに乘じて奢侈豪遊を行ふやうになつた。いふまでもなく、かゝる遊興費は農民からの徵稅によつて補はれるのである。かくて農民の生活苦は生産力の增大化にもかゝはらず、日毎に深まるばかりである。

他方において、都市を中心とする商工業は急速に發展した。戰亂なき平時における領主や武士階級の文化生活を滿足せしめるべく織物、工藝品等の生産が發達し、戰ひに備へるための武器の製造等が盛んに行はれる。從つてこれらの物資は貨幣を媒介として商人から供給された。商人は物資交流の鍵を握り、都市經濟を支配するやうになつたのである。すべての職能人員は支配者に隷屬してゐた氏族的封建制社會と異り、かれらはいまや一應獨自的な身分關係にある。したがつて領主や武士階級等の支配者層も、貨幣なしには物納以外の物資を入手することができない狀態になつた。

封建國家は多數の傭兵によつてその制度を維持してゐるのだ。それがために國家財政は巨額に達した。しかもかゝる財政收入は農民からの徵稅に依存しなければならぬ。――國家財政の尨大化につれて農民の生活苦は深刻化した。

農民階級の生活苦はたゞに封建國家からの徵稅の增大化ばかりではなかつた。それは貨幣を媒介とする都市商品の農村への浸潤による搾取に大なる原因がある。農民は農業生產力を增大化するために、都市の手工業品たる農具を購入しなければならないし、農作物以外の衣服其の他の日常使用物資は殆んど商人の手を通じて購入せざるをえない實狀に當面したのである。貨幣を獲得して商人から諸物資を買入れるためには、汗と脂の結實であるところの農作物を賣らなければならぬ。商人は職業組合を組織して販賣物資の釣り上げを行ひ、農作物の買入れは低廉な價格で購入する手段を用ひるやうになつた。かくて農民は、都市商業者に日每に搾取された。かれらの生活は苦難の奈落へ向つて一步一步と引きづり込まれるばかりである。

農民階級の生活惡化とは反對に、都市商業者の繁榮振りは何と皮肉にも日每に上昇する。武士階級の生活物資を生產しつゝ、他面においては、商業者に吸收される農民とは對蹠的に、都市商業者は武士階級や農民や職人等のありとあらゆる階級層から搾取を擅にした。わが國德川幕府の時代にも江戸、大阪等において商人が物凄い勢ひで發展したことは歷史の敎へるところである。

いまや社會の均衡が破られはじめた。社會經濟の中心は商人によつて制せられるやうになり、商人と農民の生活の差異は甚だしく大きな開きをもつて現はれた。また領主より報酬を受けてゐる武士階級の中でも、下層武士の生活苦は漸次的に深まるのみで、かくては不平と不滿が、農民と下層武士の間から湧き出でるのが必然の趨勢であろう。しかしながら、かゝる不平と不滿とが、それが直ちに政治的に發展したのではない。

農民の中には先祖代々住み馴れた農村を後に、都市に移住して商人を志ざし、あるひは職人をめざし、また海外に移住する者等が多くなり、逐年農村は荒廢に傾く情勢に當面したのである。

封建政府はかゝる農村の荒廢化につれて失ふところの物資の多きに驚き、農民の移住を制限したり、商人に對する課稅を加重したりしたが、各地に領主と王侯の存在する國家體制下にあつては、中央政府の意圖が徹底しえず、逐年商人階級の人的勢力と經濟的地位とが增大するばかりである。下層武士の間には自ら町人となる者が續出し、上層の武士は商人と結托して自己の利益を計らんとする傾向さへ現はれた。すなはち商人の勢力は支配者層の心臟部へも漸次鰯手を延ばし始めたのである。

封建政府や領主はかくのごとき經濟的危機を打開するために、貨幣の鑄造權を握り、盛ん

に產金を奬勵して財政難を救はんとした。德川家康が大久保長安に命じて伊豆、佐渡の金山を開發せしめたのも、時の幕府の財政を健全にせんとしたがためである。だが、產金奬勵の努力にもかゝはらず、貨幣が市場に流出するや、それは濕地帶にめり込む小石のやうに、商人階級の懷へと吸收されてゆく、商人階級は物資交流を媒介する度毎に利益を得て貨幣を吸收するのである。さりとて領主等は貨幣が無ければ物資を購入することが不可能なのだ。そこで考へ出したものは、貨幣價値の實體を切り下げることであつた。すなはち貨幣の內容を改惡して、數的增大を計らんとした。だが、かゝる術策も徒勞に終つた。それは貨幣價値の切り下げと同時に、切り下げた程度の價値に評價されて物價が騰貴した。物價の騰貴は消費者としての領主や武士階級を立ちどころに反擊し、一般庶民の生活を惡化せしめた。封建政府はあはてふためいて貨幣を改正するのであつた。しかしながら物資交流の媒介物としての貨幣が全般的に少量であつて、しかもその貨幣が都市商人の土藏深く堆積され勝ちであるために、物資の流通が沈滯して、都市經濟を逼迫せしめたのである。わが國における德川幕府の財政々策は貨幣の改惡と改正を繰り返す歷史であつたといつても過言ではない程に反覆された。すなはち田沼意次の貨幣切り下げ政策と、松平定信の改正政策が繰り返へされたのである。それより先、幕府は財政の逼迫は外國との貿易の結果、金貨が流出してゆくからであると考へ、幕府の御用船以外に貿易を禁止し、貨幣の國外流出を阻止する鎖國政策を採用してきたのである。

封建國家は發展し來つた貨幣の浸潤に惱まされた。產金を奬勵して貨幣の流通額の增大を計つたり、國外流出を阻止したり、あるひは貨幣を切り下げたりしたが、全體として當時增大した物資の交流量と貨幣の流通量とは調和がとれなかつたのである。これはわが國ばかりではなく、かのフランスの十八世紀におけるブルボン王朝時代の革命の原因も、貨幣經濟の矛盾が重大な要素となつてゐる。物資の交流量に比して貨幣の流通額が不足する結果、物資の社會的配給が圓滑を缺くことゝなつた。德川時代に各藩において藩札を發行したり、また引つ込めたりしたのもかゝる事情を物語るものである。

封建制度の行政主體が各地に一應獨立してをり、しかも經濟的には相互に依存しあつて交流してゐる狀態であり、物價を全國的に規制しえられず、かつまた政權の變動常なき有樣であるから、通貨は物としての價値がなければ通用せしめることが出來なかつたのである。それはすなはち根本的には、封建的政治體制そのものが、一般的に流通性を有する貨幣經濟と兩立し得ない事情にあつたのだ。しかるに當時の政府は、自己の政治體制を維持することを基本的な條

件として、貨幣そのものゝ流通を調整しようとしてゐたのである。それは哀れにも愚かな勞作であつた。

封建政府並にその從屬下にある多くの武士階級と、農民全般の苦境をよそにして、商人を中心とする町人勢力は決河の勢をもつて發展した。封建政府は自己の財政的危機を打開し、かつまた町人勢力の擡頭を抑壓する行政的、經濟的手段を次から次へと採用した。すなはち農民に對しては抑壓と重稅をもつて誅求し、かつ農民の都市への移轉を禁止したり、商人に對しては運上金の徵收――營業稅を賦課したり、同業者組合の解散したりしたが、それらのすべての政策は、封建政府に對する反抗を激成するばかりであつた。人民に自由をあたへよ、と叫ぶ自由主義的思想が澎湃として發生したのである。

商品としての物はいづれの領域内へも流れてゆく流通性をもつてをり、貨幣もまた物としての價値ある金銀であるために、これまた全社會に通用しえられる性質を有してゐる。すなはち商品や貨幣は社會的性格をもつたものである。それに反して封建的政治體制は、各地に主權者が存在してゐて、これらの經濟的動向を部分的に調整せんとしたのである。しかるに經濟の流れに棹さして擡頭し來つた町人勢力は、かゝる經濟の流通性に適應するところの政治的體制の樹立を要望するやうになつた。商業の自由と統一國家の樹立こそは、かれら町人階級の熱烈なる要望となつた。

かくして封建制度の指導者と、町人や農民等の多數の國民層が思想的・政治的に反目して相對峙した。

第五節　封建制度の瓦壞

貨幣を媒介とする商品の流通は漸次發達して商業者を中心とする庶民勢力が擡頭し、農民の窮迫から發する不滿と相俟つて、封建制度打破の思想が醸成されたのであるが、庶民勢力の勝利を決定的に押しすゝめるものが相次いで現はれた。それは生產の非常なる發達をもたらすところの機械、動力等の發明である。

西曆一七六七年、英國のハーグリーヴスは紡績機を發明し、次いでクロンプトンが一人で同時に一萬五千錘を操縱する紡績機械を完成した。これらの機械ははじめ水力により運轉してゐたが、同一七六九年、ジエムス・ワットは蒸汽機關を發明し、紡績機械の運轉に利用され、次いで汽車、汽船等も蒸汽機關を利用して運轉するやうになつた。

紡績機械の發明により衣服其の他の織物品は大量に生産された。動力の進歩によつて、手工業的製品を追ひ越して機械製品がとつて代つたのである。しかもこれらの商品は汽車、汽船の發達で迅速に世界の隅々まで行き渡るやうになつた。すなはち大量的生産としての機械生産品は、廉價なる商品として普及されることになつたのである。

機械生産品――廉價なる商品の普及は、當時の國民經濟の大變動であるばかりでなく、國民組織に決定的な變革をもたらすにいたつた。

農民の生活は主として農作物を生産するとともに、手織物其の他の日用品を生産して收入を計り、都市商人から諸物資を購入して生計を續けて來たのであるが、廉價なる機械生産品の普及によつて、これらの手工業的生産品は壓倒されてしまつた。かくて家内手工業品の沒落は、それに依存して生活してゐた農民の沒落でもあつた。

機械生産品の市場への進出に伴ひ、家内手工業品の市場よりの退場は、さなきだに窮迫してゐた農民生活を決定的に破局へと導いた。かぎりなき愛着をもつ農村を捨てゝ、都市に移住する農民の數は倍加し、田園は無慘にも荒廢しはじめた。

國民の大多數を占める農民の窮狀は、農民を財政收入の主要なる源泉としてゐた封建國家をして經濟的に窮乏の淵へと投げ込んだ。領主はその傭兵への支給を減じたり、あるひは追放して浪人せしめたりした。わが國德川幕府時代における各藩の闕所改易の連續、並に浪人者の續出等の現象は、幕府や各地領主の財政難によるものが多かつた。

農民と領主や武士階級の貧窮化は、商品購買力の減退となり、商人階級の生活をも脅やかすにいたつた。領主は獨裁的權力をふりかざして財的收入を計らんとし、農民といはず、商人といはず、全般的に庶民階級を誅求せざるをえなかつた。いまや封建政府――領主や貴族と、一般庶民階級の利害は全く對立した。

世は騷然となつた。封建政府の内部においても下層役人――下層武士階級も生活の惡化から領主に反抗するやうになつた。

浪人、商人、農民等は、獨裁的封建政治に反抗し、地方分權の封土制度に對し不滿の意を表明した。一揆徒黨の暴動が全面的に、あるひは斷續的に行はれた。人民に自由をあたへよ、統一國家を樹立せよ、土地移住の自由を許せ、商業の自由をあたへよ、と叫ぶ人民の反逆思想は鐵火のごとく熱し來つた。

封建制度に對する革命の火の手は擧つたのである。フランス、イギリスにおける自由主義革

命をはじめとして、文明諸國はいたるところ革命の嵐に吹き荒された。民主々義的政治制度の創設と商工業の自由を叫ぶ民衆運動は新時代の怒濤となり、嵐となり、いはゆる文化人の思想となつて現はれた。かの有名なルソーの民約論は、近代の自由主義、個人主義、民主々義の原理となり、アダム・スミスの富國論は、自由主義經濟の根幹を形成する原理的思想となつた。

かくのごとく封建制度の下における商品經濟の發展は、當時の生産者層たる農民の貧困化を促進し、土地生産から遊離せしめ、したがつて國民生活必需品としての食糧品の減産を誘致するとゝもに、また社會内部の政治的相剋を惹起せしめるにいたつたのである。

封建國家の内部における物資の貧困化は勢ひ物資獲得の戰爭行爲をより一層刺戟せしめずにはおかなかつた。かつてない大規模な戰鬪が相次いで行はれた。

對外危機の切迫化と、自由主義的な内的革命の火の手は、燎原の火のごとく全歐を席捲し、やがてまた、わが東洋にまで延燒しはじめた。

わが國における封建制度も、世界の例外としてその類燒からまぬがれることなく、やうやくにして德川幕府の末期を多難ならしめずにはおかなかつた。

周知のごとく、德川幕府の末期においては都市商人階級の發展が目ざましく、商品經濟は全國津々浦々、僻村にいたるまで浸透し、當時の我が國生産者層の主要部分を構成してゐた農民層を搾取し、文化的生活に馴れた武士階級の血を吸ひその生活を惡化させた。

哀れな者は農民であつた。商品經濟の浸潤によつて商業者に搾取され、また政治的權力を握つてゐる武士階級の貧困を救ふために重稅を負擔することになつた。さらに機械生産による廉價なる商品の流入により、農民の主要な通貨收入の手段であつたところの家内手工業が沒落させられたのである。かくて土地を捨てる農民が續出し、重稅に堪へかねての一揆反亂等が各處に企てられた。

武士階級の中でも下層に屬する者は農民と同じく日々の生活に追ひやられた。武士としての體面上、日傭人夫等にまで成り下る決意もなく、さりとて土地を買つて耕作する資金もなかつた。かれらは内職として傘張り、玩具の手細工、はては富商の用心棒等を求めて生活し、現實否定の思想を抱かずにはゐられなかつた。

他方において、商人階級は商品の全國的取引を行つてはゐたが、各地に蟠踞する大名の制肘を受けねばならなかつたし、口實を捉へられては財産沒收の憂目をなめることすらあつた。それは加賀の錢屋五兵衞、大阪の淀屋辰五郎等が闕所處分によつて財産を沒收された例のごと

く、商人が財寶を得ても不安な存在であつたのである。人民の生命と財產を保障する統一的國家の樹立を、かれら商人階級も要望してやまなかつた。

かくのごとく德川幕府の末期における國民各層が、現實の生活苦と不安を嘆き、いふところの『世直り』――變革を要望してゐたとき、突如、有史以來未曾有の對外的危局に當面した。それは英米佛等先進諸國の『黑船渡來』であつた。

鎖國と封建制度の壔內にあつて、內的苦悶を續けてゐた日本に、英米佛等による日本侵略の魔手は、全國民の頭上へ百雷の落下のごとく轟き、亂打する警鐘となつた。いまや國民の祖國防衞の熱血は、國內が各藩に分裂して相剋するの醜狀をゆるされえなくなつた。降りかゝる火の粉を消し止めねばならない。歐米人による侵略から國家民族を防衞しなければならない。

封建制度の破壞と、統一國家樹立の中心勢力となつた者は、當時の知識階級であり、鬪爭力を有し、かつ自らの置かれたる地位が現實を否定せざるを得ないところの、武士階級の下層部分であつた。

我が國の封建制度崩壞の必然性としては、右に述べたやうに當時の國內需要物資の唯一の生產者としての農民が、生產的勤勞部面から遊離してゐるところの武士階級から誅求され、また配給部面の商人階級から搾取されて極度の貧困に陷り、土地を捨てる者が續出した結果、國家的經濟の生產力を減退せしめたために、全體としての社會生活が維持し得られなくなつたことが經濟的な原因であつて、それは國際的に共通するところのものである。しかしながら、德川末期においては、かゝる經濟的原因が全面的に成熟して、農民と商人等の庶民勢力が、封建制度を顚覆する變革の主體となつたものではなく、かゝる勢力が成熟への進行途上において、歐米勢力の侵略の危機に當面し、急遽、軍事力の分散せる封建制組織を破壞し、統一的國家體制を樹立しなければならない情勢に當面したことゝ、我が國には肇國の昔より道義的政治を行つて、人民の尊崇かぎりなき皇室が嚴存してゐたことによつて、歐米における自由主義的革命とはその形態に異るところがあつた。古代より道義的政治を指標とせる　天皇政治の顯現を要望する尊皇運動が、國內統一運動として展開されたのである。

先覺者を中心とする尊皇討幕運動が展開されつゝあるとき、はからずも歐米勢力の脅威に直面して、封建制度の破壞運動が火に油を注いだごとく燃えだしたといふのが、わが國幕末の情勢である。幕府もこれらの運動に對しては言語に絕する彈壓の十字砲火を浴せたが、遂に支へるに由もなく崩壞してしまつた。

第三章　自由主義經濟とその矛盾

第一節　自由主義經濟の成立と金融資本の制覇

封建制度の鐵門を打破して生れた自由主義的社會は、自由主義經濟の發展をもたらすところの內容によつて構成せられた。封建制度の特徵とした土地と人民の領主への隸屬關係が廢止せられて、人民の土地私有制と賣買、人民の移住並に職業選擇の自由が約束され、商工業の自由も保障された。あらゆる人民は平等の身分を立前とし、特定の罪を犯さないかぎりは生命、財產が國家權力によつて保障されたのである。いふまでもなく、封建制度を打破した自由主義的革命にも、その時期や國情によつて政治形態の上に種々異る樣相を呈したが、それにもかゝはらず、經濟の原則とその機構とは自由主義の一色に塗り潰された。すなはち社會は個人主義的行動の自由といふ原理によつて分解されたのである。

封建制度は思想・經濟・社會・政治等の諸體系を、領主や王の指導の鐵環內に包んできてゐたのであるが、自由主義革命はこれらの體系を解體して人民の自由を保障することによつて、國家內部の社會生活をバラバラな個人主義的な諸關係に立たしめて、その基礎の上に結合するところの民主々義的政治體制を確立したのである。

商工業はかゝる溫床の下に育成された。それはいかなる僻村にも貨幣と商品の經濟を持ち込んだのである。

國民勤勞は商品視されて貨幣に換算され、租稅も貨幣によつて納入することになり、人力を加へた凡ての物資は商品として賣買された。かくして社會生活は商品經濟の環境內で行はれることになつた。

國家の活動も、また國民の生活も、いまや貨幣なしには活動することが不可能になつた。農民は農作物を販賣して、その代償としての貨幣を獲得し、肥料、農具、衣服、家具類を購入して生活を維持することゝなり、國家機關の勤勞者は政府から報酬を得て生活し、工場において勤勞する者は雇主から賃銀を得て生活するやうになつた。しかしながら、商工業の經營者は生產と配給の役割を受け持つ勤勞者であつても、その收入は前記のごとき直接の勤勞者とは異り、自己の活動に對する報酬以上の價値を利潤として收得することになつたのである。

後段で述べるやうに、商品の價値は國家的・社會的な總力、及び生產に加へられたる總力に

よつて形成されるのであるが、經營者は商品を販賣するに際して原價以上の價格で販賣し、その餘剩利益を收得することになつた。商工業者は年々餘剩利潤を蓄積して大資本を集大成した。

自己の勤勞力のみで收入を計つてゐた農民や國家機關で活動する人員等は、收入の增大化を求めて商工業の經營を志ざす者が年々增加する傾向になつたのも、また自然の勢ひといはねばならぬ。かくて商工業は非常な勢ひで躍進を遂げたのである。商工業經營の能力と資本を有たない多くの者は經營者の傘下に賃銀勤勞者となつて生活するし、資本と能力を有する者は誰憚からず商工業者となつて國家的・國民的收益の部分を、自己のみの懷に收得することを心がけたのである。

生產機械の進步と、交通機關の發達とに乘じて商工業は發展した。とはいへ商工業の發展にも一つの原則があつた。それは商品の生產費を可能な限り切り下げ、他方、販賣市場では他の商品に勝利することである。商品の價格を他の商品より低廉にするために、經營者は可能なかぎり機械の利用によるところの大規模生產樣式をとつたのである。機械的な大規模生產樣式は商品の販賣競爭において勝利する絕對必須の條件となつた。機械的大規模生產樣式へ！　これがすべての經營者の指向であり、利益を追究する最高の方式となつて、またゝく間に大工場大經營が設立された。

自己の勤勞にのみ依存してゐる農民や、家內手工業者や小經營者は、利得戰線から日每に沒落して大經營者の膝下において勤勞すべく餘儀なくされた。何故ならば、かれらの生產樣式は機械の助力がなく多くの勤勞力を要し、したがつて生產品は高價格となり、販賣市場において敗北するからである。

資本を大量に有する者のみが勤勞者を雇傭し得、生產機關を設置することができ、商品を買ひ占めては、價格を釣り上げて販賣することができた。いまや貨幣は經濟生活の生死を握る鍵となつたのである。國家的社會的な收益を集積して資本を蓄積した者が經濟を左右する王者となることができた。かゝる資本萬能の情勢は遊休資本を動員して貸附を業務とする銀行業——金融資本の成立となつて現はれ、遂に金融資本が全經濟を指導する地位に立つことゝなつた。しかも貨幣は、現物貨幣であり、金・銀を主としたものであつて、社會的にその生產に限度がある。したがつて貨幣を集積してゐる大資本の前には、いかなる國家的目的の行動を續けんとする者も、その諒解なしには活動が不可能な狀態となつたのである。資本萬能時代が出現した。

國家も、これら大資本の意志を無視しては國家的任務の遂行が困難となつた。

商品は販賣市場において勝利しなければならぬ。そのためには何よりも商品が廉價たることを必要とする。商品價格を低廉なものにすることは、生産行程における原價を可能なるかぎり切り下げることである。原價を切り下げるには生産に要する勤勞賃銀を最低限度にまで引き下げることであり、機械的大生産樣式によつて、少數の人員で大量の物資を生産することであつた。かくて機械、動力の進歩發達は驚くべき躍進を遂げた。動力としては蒸氣から電力に發展し、製鐵、造船、印刷、機械工作、紡績等もすべて大規模化するとゝもに、非常な生産能力を有する設備が生れた。その結果、生産的勤勞力を節減することゝなり失業者群は續出した。すなはち夥しい失業者が機械的生産品の發展とゝもに「製造」されたのである。

失業者群の續出はまた自由主義經濟の發展に貢献した。職を失つたかれらは、生活を續けるためにはいかなる勤勞條件にも甘んじなければならない。長時間勤務と低賃銀がその條件となつた。企業經營者はこれらの失業者を低賃銀で勤勞させることによつて、商品生産の原價を低廉にし、他の商品と市場における販賣競爭に勝利したり、商機を捉へては收益の增大化を圖るのであつた。

しかしながら、かゝる低物價の販賣競爭は、經營者の本來の目的たる利益獲得に反するものである。されば企業家は價格協定を結び物價を釣り上げて營利の獲得を計つた。だが、眞に價格の協定を實踐するには、經營主體の合同統一を促進することである。かくして資本は集大成された。

生産機械が發達し、商品が國内の全面に行き渡り、貨幣が經濟の主流となつた。資本と能力のある者はどこまでも巨萬の財寶を得て發展し、能力があつても資本力のない者は地獄の谷底へ轉落する社會が出現した。それは國家的・民族的自己防衛の必要から出發したものではなく、國家生存圏内における個人主義的行動としての歸結であつた。

第二節　自由主義經濟の國際性

個人主義的・自由主義的經濟體制下における商品經濟の發展は、機械的大規模生産樣式を形づくると共に、大資本の獨占的支配へと進展した。いまや自由主義經濟は、あまねく人々に降り注ぐ自由なる生活ではなく、少數の大資本が制覇するところの自由であり、大經營家のみが惠まれるところの經濟機構となつた。

營利主義經濟が、かくのごとく自動的に進んできたのであるが、それは同時に營利主義經濟自體を死地へと追ひ込むところのものであつた。しばしば述べたやうに、營利主義經濟の目的は營利の獲得であり、營利の獲得は、生産した商品が販賣された結果もたらされるのである。しかるに、いまや商品を購買するところの多數の國民は、低賃銀と高物價政策のために購買力が減退するにいたつた。

多數國民の購買力の減退は、營利主義經濟を窮地に陷れるところの不景氣狀態を現出することになつて、膨脹せる企業經營が崩壞の危機に瀕したのである。かゝる經濟恐慌裡にあつて沒落する企業家は、資本力の弱い部分であつて、沒落者の機械設備と商品市場を併合して集大成化されるものは、巨大な資本力をもつものであつた。

しかしながら、何といつても解き難き矛盾は國内市場における購買力の減退である。購買力の僅少な市場を前にして生産を續けるの不安は、營利主義的經營にとつては正に惡夢でなければならぬ。商品が大量に販賣されなければ利潤が獲得できないのだ。商品の販賣を速かに行ふためには、國民の購買力を增加せしめなければならぬ。購買力を增加させるには多數國民の收入を增大せしめることであつて、それは多額の賃銀を支拂ふことゝ、商品を廉價な價格に引き下げることの道以外にありえない。だが、かゝる方策は、商品生産と販賣行程において利潤を生み出すことではない。何といふ矛盾であろうか、營利主義經濟に下されたる第一の鐵鎚は、かくのごとき和解し難い慘忍なる自己矛盾であつた。夢想だにしなかつた危機を、いまや全力的に打開しなければならない。

營利主義經濟は右のごとき難關に際會したが、運命はつきたのではなかつた。營利經濟の發展の餘地はまだ存在してゐたのである。それは國内市場から國外市場への道であり、豐富な購買力を有する國外市場の存在であつた。

低賃銀政策によつて生産しうる國家體制の下における經營者は、國際市場において勝利することができた。貿易の振興とはおよそ國家的利益に相反するところの、資源の枯渇化と國民體位の磨滅とが生産行程において内在してゐるのである。自國において保存すべき資源を掘りつくし、國民の體位を向上せしむべきを磨滅して、その結果、廉價なる商品が生産されたと雀躍しつゝ國外に流出してしまふことを貿易の「秘策」とし、輝やかしき發展とし、國力の伸張と讃へたのである。果して國力が伸張したであろうか、と反問し考察することすらできず、たゞたゞ、儲かりさへすれば輸出する方策をひたすらに推進した。さらに輸入の場面においても、

國民の教育上、衞生上使用してはならない物であつても、國内に販賣して營利採算に合致しうるならば、それは阿片であろうが、毒々しい映畫であろうが、贅澤品であろうが、そんなことは問題ではなかつた。利益獲得の行爲であるならば、直ちに行動を開始することをもつて商賣上手として彼我共に讃へたのである。しかも國内市場においては、依然として可能なかぎり價格を釣り上げることを決して忘れはしなかつた。國内は高物價政策の堅持を立前とし、國際的には市場競爭における勝利をめざして、物資を投げ賣りすることすら行はれたのである。自國資源の枯渇化をよそにして、貴重なる物資を國外に投げ賣りして平然たる態度を、また平然として續けたのである。

げに悽愴をきはめたのは國際貿易であつた。かゝる競爭場裡における勝利の法則は、優秀なる機械設備と低賃銀政策とである。したがつて産業は生活水準の低い國々に建設されるを得策とする。遲れたる民族領内における産業が、かゝる政策遂行の足場として選ばれたのは當然であつた。資本の國外投資が增大した。植民地政策の强行が强調された。遲れた民族領内においては低賃銀といふ好條件がある。各國の資本家はかゝる餌物を見逃してゐる筈がない。先を競つて未開民族の領内に殺到し　資源の開發、生産企業、商品販賣等ありとあらゆる營利的事業に投資したのである。

資本の國際的競爭が無慈悲的に展開されたが、競爭に勝利した者は大資本を有する者であつた。それは國内における自由主義的競爭に勝利した條件と同一の原則である。大資本は國内にあつても勝利したやうに、國際的にもまた勝利したのである。第二次世界大戰まで、ソ聯領内を除く世界石油の大部分は米英の資本で獨占されてゐたやうに、大資本をもつ資本家が、國際的經濟鬪爭において勝利を誇ることができたのである。大資本は資源を獨占し、その上、大部分の運輸機關にいたるまで掌中に收めたのである。

いふまでもなく、國際的な資本とは金銀等の物質で表現される財力である。國内の鬪爭に勝利して大資本を集中しえてゐた者、國内の商品を國際市場に輸出して、外貨を獲得してゐる資本家等が國際的にも勝利者として登場したのである。

世界はいまや先進國といはず、後進國といはず　未開國の如何を問はず、商品經濟の一色で塗りつぶされ、資本力を有する者が經濟運營權を掌握することができる機構となり、いかに勝れたる民族でも資本がなければ國際的經濟爭鬪に勝利しえない實狀におかれた。黄金萬能は國内ばかりでなく、國際的にも共通するところの世界的風潮となつてきた。資本力なき民族は、

自ら育ち、現に自ら踏みしめてゐる土地の開發も、毛色の變つた他國の資本家にゆだねなければならない變質せる經濟が現はれたのである。すなはち營利經濟は國家生存圏の生存狀態に無關心であり、國家的性格なく、常に國境を無視して己が利益の收得のためにのみ活躍したのである。

しかしながら、大資本が利益を追求して國際的舞臺に登場し、他國の資本と激烈なる鬪爭を展開しはじめたが、かゝる段階にまで達するや、資本家自體が意識すると否とにかゝはらず、それはもはや單に資本家のみの利害の鬪爭ではなく、國家生存圏全體の利害に關する問題となつてゐた。自國資本の國際場裡における敗退は、資本家自體の沒落であるのみではなく、當該生存圏全體の社會問題であり、國家的問題にまで重大なる影響を及ぼすことになつた。社會主義的理論に從へば、資本家の利害のために國家が戰爭行爲を惹起するといふが、それは偏見であつて、かゝる自由主義經濟機構に立つ國家體制の段階においても、資本の國際鬪爭の勝敗は國家的・民族的利害に關する狀態にまで、その經濟關係が織り込まれてきてゐたのである。

第三節　資本の對外進出と生存物資の獲得戰

自由主義經濟は人類が原始的生活を開始して以來、生存のための必須的機構として發生した國防的經濟體制ではなかつた。いひ換へるならば、指導者的國家によつて計畫的に組み立てられたものではない。從來の奴隸制經濟、および封建制經濟はことの善惡は別として、指導者や領主によつて國土防衛の見地から組み立てられたものであつた。然るに自由主義經濟は、かゝる計畫的全體的經濟と異なり、その發生の原因は、指導者的國家の內部において歷史的に擡頭しつゝあつたところの、個人主義的行爲の內的現象の爆發として現出してきた經濟である。すなはち人類の社會內部における生產器具の發展に促進されて、生產の增大化をもたらし、人口の增加、價値交換の頻發化等に伴ひ遂に價値交換を媒介するところの通貨の創造となり、商品經濟社會となるに及んで、國家內部の革命を經て自由主義經濟體制が生れたのである。

したがつて自由主義經濟は、發生の當初から國家的・全體的・計畫的要請に應じて編成されたるものではなく、それは國家的・全體的・計畫的要求に反抗する個々の、分裂したる人間社會の放恣的な經濟として誕生したのである。されればその本質は、如何に粉飾しても利己的な經濟であつて、徹頭徹尾個人主義的經濟の城廓から一歩も出られない宿命を背負つてゐる。

いまや自由主義經濟は、自由主義の基礎の上に資本的獨占的體制にまで昂められたのである

が、そこでもまた個人主義の本質から蟬脫することができなかつた。國家內部においては多數の同胞を犧牲とする獨占的制覇を示し、國際的舞臺に登場するや弱國を犧牲にして繁榮する非道義的姿態を暴露し、國際的紛爭の火焰に油を注ぐところの役割を演じたのである。しかもそれはあくまでも個人の利害、資本の利害、の見地の下においてなされたものである。

しかしながら、自由主義經濟の全面的發展段階においては、經營者の意志如何にかゝはらず、その役割はもはや單なる國內的利害の問題に止まらず、すでにして國家生存圈全體の問題にまで昂められてゐたのである。すなはち國家內部における資本の地位は、自らの意慾とは別に、國家的社會的な經濟運營の使命を有し、國際的には資本の活動そのものが、直ちに自國經濟の物資需給に關する重大問題でもあつた。營利主義經濟の國際的發展段階において、資本は國家生存圈擁護の目的をもつてゐるのではないが、國家民族の生存に重大なる影響をあたへる規模と役割にまで織り込まれてきてゐたのである。したがつて國家も國際舞臺における自國資本の生死の鬪ひを、個人的利害の問題として傍觀することができなかつた。

封建制度を破壞して自由主義經濟が登場して以來、あらゆる人々はかつて見ない創造性を發揮して、機械の發明に、資源の發見に、生產と配給に絕大な努力を續けたのであつた。人間生活を豐富にするところの物資が生產されて、如何なる山間僻地にまでも商品が持ち込まれた。いふまでもなく、それらの行動は個人的利益の追求を目的としてゐるのであるが、――いづれにせよ貨幣さへあれば常に欲するところの物資を手にすることが可能となつたのである。その結果、國家の經濟は、商品經濟にとつて代はられてしまつた。封建經濟とそれ以前の經濟のやうに、自給自足經濟ではなく、利益のために生產する經濟となつたのである。生產者は、生產を開始するに先だつて購買者と豫約してゐるのではなく、何人かが購入するであろう見込のもとに生產されるのである。生產物の種類も分化されて、多くの生產物を合してこそ始めて生活しうる經濟關係に織り込まれてきてゐたのである。例へば綿布の製造企業家はその生產物を自分の衣服のために生產してゐるのではない。また該企業內で働く勤勞者自體の必要な物としてのみ生產してゐるのでもない。それは社會の人々が生活必需品として購入するであろうといふ見込のもとに生產してゐる。それがため生產の目的は營利の獲得であつても、生產の結果は、國家社會に必要な物資の生產者である。すなはち生產は社會性を有し、生產物は社會的任務を帶びてゐるのである。

かくのごとく社會化された商品が、社會の全面的部面に進出してきた。したがつてその商品

生産者が何人であろうとも、また如何に邪悪な意圖をもつものであろうとも、その生産の停滯は直ちに國家全般の生存の停滯を意味する。營利主義的獨占經濟の樣相を形どつて、個人的利得のために多くの國民生活を悪化させるとはいへ、それが生産の急激な停止は、國家的の生活を決定的に脅威する狀態になつてゐた。それゆえ國家としてもかゝる經濟體制を變革することなく、その經濟機構の上に立脚してゐるかぎりは、現狀を是認して經濟運營を可能なかぎり圓滑化する以外に道がなかつた。

このことは國際的に進出した資本に關しても當て嵌められる。國際的に進出した資本自體の意圖は、資本自體の利得のためではある。しかしながら、その資本を通じて物資を輸入しなければ、當該國家生存圈の生活を直ちに脅やかすことになつた。また資本を通じて物資を輸出しなければ、輸出物資の生産に就業する多くの勤勞者は立ちどころに失業の憂目を見ることになつた。資本が國際的に活動して利益を確保しなければ、國家と國家の輸出入の清算が不可能なのである。したがつて自國資本の國際的敗退は、自國の物資需給の變調を招來することともなつた。自由主義的貿易は、さきに述べたやうに、國家民族にとつて蓄積すべき物資であつても輸出したり、不必要なものでも營利に合致するものならば輸入するところの無計畫的貿易ではあるが、それと同時に、國家民族にとつて絶對必須の物資をも輸入し、また自國に過剩せる物資の輸出をも行つた。それは實に無軌道的な貿易であり、盲の國家經濟ではあるが、かゝるものとして、國家がかゝる經濟に依存してゐたのである。

特に近代社會においては人間生活が高度化し、活用物資の種類が增大して、その資源は世界的に求めなければ獲得できなかつた。しかるに現實の世界は數十ヶ國の國家に分立されてゐて、物資の獲得は物質的通貨と引換へしなければ購入することが不可能なのである。例へば、錫、鉛、鐵、石炭、亞鉛、石油、タングステン、モリブデン、ニッケル、コバルト、アルミニユーム等々の鑛物資源をはじめ、生絲、棉花、小麥、米、大豆、茶、コーヒー、砂糖、牛肉、羊毛、皮革等々の農産物資は、近代的社會を維持するに缺くべからざる物資であるが、これらの物資は數十ヶ國に區分された狹隘な一國境内で、すべて生産されるものではなく、國境を無視して存在するものである。

國家生存圈を維持するために、國内で不足する物資の獲得を欲するのは當然である。それはそもそも人類が自然に對する鬪爭から、人類間の鬪爭に轉化した根本的動因であつた。しかもかゝる物資獲得の要望は有史以來、幾星霜をへた今日といへども少しも衰へないばかりでな

く、文化的生活が向上するにつれてますますその要望が切實になるばかりであつた。

貿易は、實に資本主義的貿易であり、その手段たるやまことに惡辣なものであつても、その結果は、國家民族の生存に不可缺な需要物資の調節を行ふ役割を演じてゐたのである。したがつて貿易の方法や道程がどのやうに醜惡なものであつても、國家はかゝるものとして、それに依存せざるを得ない現實に當面してゐたのである。

それがため自國資本の國際的敗退は、直ちに自國の經濟全體をゆすぶるところの脅威でもあつた。自由主義貿易は國境を無視して取引しつゝある反面において、自國の要望に應じつゝ國內物資の需給を計つてゐたのである。國家の物資需給は、無計畫的な營利主義的貿易であつても、かゝるものとして自國の資本に依存するところの體制に移行してゐた。

國際的に進出してきた資本は好むと好まざるとにかゝはらず、自國の經濟の調節を計るところの役割を背負されてきてゐた。したがつて自國資本の國際的競爭における勝敗は、國家經濟の勝敗でもあつた。それ故に國家は自國の資本が敗退した結果、國內必需物資の輸入が杜絕するならば、武器をとつて起つ戰爭行爲にも突入せねばならなかつた。

現實の世界は、すでに先進諸國が尨大なる植民地を有し、弱少民族を資本の威力によつて、あるひは武力によつて自國の營利主義經濟下に制壓してきてゐた。資源に惠まれざる國家生存圈における經營者は、低賃銀と機械的大規模生產樣式によつて廉價な商品を生產して輸出しても、各國は自國資本の利益を擁護するために關稅を設けて重稅を課し、廉價な商品をも直ちに高價格とする政策を他國商品に强ひることゝなつた。

さきに述べたやうに、國內市場の購買力が減退したゝめに、商品の販路を國外市場に求めたのであるが、こゝでもまた新たなる障害――關稅障壁に妨げられたのである。一國が關稅障壁制を採用するや、報復手段としてまた他國が採用する等、自國資本の保護關稅が設けられ、輸入品にはすべて高率の稅金を課することゝなつた。その結果、これらの障壁を突破して商品を輸出するためには、國內においての生產原價を切り下げなければならない。

今次世界大戰前までは、イギリス、オランダ、アメリカ、フランス等の國家が尨大なる植民地と、他民族の領土を武力的に占有してゐた。したがつてこれらの國の本國はいふまでもなく、世界全域に跨る領土において後進諸國の商品並に資本投資を妨げたのである。

事態はもはや平和的外交手段や、低價格の商品によつては、物資の需給が困難となつた。先進的諸國は大資本を擁して後進諸國の資本を壓迫するに止まらず、關稅障壁と政治的手段によ

つて抑壓したのである。國内においては小資本を併合したやうに、國際場裡においても大資本が小資本を壓迫し、商品市場の門戸は關税と武力で固められ、自國資本を保護したのである。

自由主義的國際經濟――自由なる貿易も、國際的大資本の制覇に續いて國家的獨占の段階に達した。だが、いづこの民族も所要物資を獲得しなければならない。しかしながら、これら物資の獲得は武力によつて獲得する以外に手段がない。かくて持てる國と持たざる國との戰鬪が開始された。

かくのごとき性格の戰爭が、かの第一次世界戰の姿となつて現はれたのである。しかもそれは、物資の活用を廣範圍に求めてゐる國々――先進諸國家間においてたゝかはれた。生活文化の發達してゐる民族が、切實に世界的物資を求めてゐるのであるから、戰爭はこれらの國家が端緒を開き、やがては未開民族の領域にまで展開された。それは未開民族の領土内こそは、未開の資源が埋沒されてゐるからである。

世界的戰爭は、世界的物資の活用の段階にまで人類が進歩したとき、その姿に形どつてたゝかはれた。まことに戰爭の規模は、人類が活用物資を世界的に求めてゐる現實の姿を、そのまゝ反映したにすぎない。

近代の戰爭は、かゝる意味において國家生存圏の要求に基く不可避的なものであつて、有史以來の人類鬪爭の根本的原因が、今日においても傳統的に再現されたのである。それはかの社會主義的觀察に基くところの「戰爭は一部資本家の貪慾を滿足させる目的」で戰はれたものではない。だが物資の獲得といつても、その手段は營利主義的經濟體制によつて行はれたことは一部資本家をして巨大な利益を收得させる結果をも生ぜしめたがゆえに、第一次世界戰においては、各國家生存圏の民族が戰爭に對する決死的熱情を傾けたとはいはれなかつた。さらに營利主義經濟そのものが戰爭經濟を構成するところのものでもなかつた。國家と國家の鬪爭、民族と民族の戰ひは、いかなる手段で行はれようとも、いかなる階級が多くの利得を收めようとも勝利せる民族は生命と土地の安定を保障され、敗北せる民族は天日暗き地獄の谷底で泣かねばならないことは古今を通じての鐵則であるが、多くの國民は戰ひの結果を豫見することなく、戰爭に勝利せんとする欲求と、戰爭の結果に對する不滿の豫見とが交錯して、優柔不斷な世界戰に終らしめたのは第一次世界戰であつた。だが、このことは後年、眞に國家民族を防衛せんと願望する人々によつて深刻に批判され、したがつて營利主義經濟、自由主義體制が全面的に再檢討されはじめた。

第四節　自由主義經濟の諸矛盾と崩壞の危機

風雲急を告げる國際的激鬪のさ中にあつて、國家民族の生き拔く道は、自己の國內態勢を國家總力戰體制へと昂めなければならないのであるが、營利主義經濟のもたらしたものは、國家興亡の危機をよそにして國內を階級對立に分裂せしめ、民族の統一を阻害することが多かつた。營利主義經濟の反國家的性格はそればかりでなく、經濟運營自體の上に收拾しがたき缺陷を現はしたのである。そのうち主要なる點を列擧すれば次のごとくであろう。

(一)資本の個人的獨占と、國家的國民的生產意慾との矛盾

(二)無計畫生產による自給自足經濟の破壞

(三)國家的需要物資生產力の縮小化

(四)營利を目的とする物資集配體制の缺陷

これらは自由主義的營利經濟のもたらす反國家的現象として決定的に刻印されるとゝもに、國際的戰鬪に勝利するための見地から、あるひは國家生存圈全體の向上化への見地から、全面的に改變を要望する思想が擡頭してきたのである。

近代社會の生活は多種類の物資交換、文化的・社會的諸施設の攝取と利用等によつて營まれるのであるが、これらの生活を營むに際して價値の交換を媒介する通貨は、營利を目的とする少數の人々に集中されてゐるために、多くの國民はその欲する生產活動が不可能にされた。特に商品經濟の下においての生產は、大規模生產の設備によつて商品の原價を低率に下げなければならないのであり、かつ商品の多くは進步せる機械により生產され、また從來開發が不可能と思はれた鑛物資源でも、科學的設備を施しさへすれば採掘されるやうになつたのである。それゆえ、國民が何等かの生產を行はんとすれば多額の資本金が前提的に必要であつた。しかるに資本は銀行・信託・保險等を通じて少數の人々の支配下に集中されてゐる。しかも大資本家は國家的民族的要望や多數國民の幸福を考へる前に、何よりも自己の利得を目的として資本を運營してゐるのである。したがつて多くの國民の生產企業熱も、これらの一部大資本家の意志を無視しては達成されなかつた。

たとへば戰時下、電力、石炭、石油、鐵等の物資增產を國家興亡の運命を賭けて要望してゐるにもかゝはらず、これらの生產は營利的採算に合致しないならば生產に着手しないのである。まして資本力のない者が、どんな富鑛を發見しても自ら開發することが不可能であつて

適當な價格で大資本家に買收されるには相當な年月を要したり、國家が、國營によつて生産するにしても、これまた國民の所得に依存してゐる國家財政の體制では、議會其の他の承認と、國民所得の增大化といふ前提條件で拘束されてゐる。

金融が、營利的な資本的性格から離脱しないかぎり、國家所要の生産資金の調達が不可能であつた。

次にあげられる自由主義經濟の反國家的性格は、生産の無計畫性である。しばしば述べたやうに、自由主義的營利經濟下の生産は利益の個人的收得を目的として商品を生産する經濟組織である。商品は利益を求めていづれの國へでも飛び歩く。經營者としても利潤をより多く收得しなければ企業戰線から脱落しなければならぬ。生産に必要なる資本も、したがつてまた勤勞力も、設備も、より收得の高き部門へ流れ、移動を開始する。そこには何等國家的な目的に副ふところの意志があるのでなく、利益をめざしての生産であり、個人の意圖に從つて生産されるものである。

また國家も、國家經濟全體の需要量を豫め測定して生産を開始せしめるのではない。物資は個人主義的に生産するのであつて、その商品は賣れるであろうといふ見透しの下に生産する。生産の結果、賣れなければ生産を停止し、賣れる場合は可能なかぎり價格を釣り上げて賣ることにつとめる。

水は低きに流れるが、自由主義的營利經濟下における經營は利得の高きに流れる。遊興施設の部面、奢侈品生産の部面、國外市場向きの生産部面、購買力の豐富な、先進的國家の要求を滿たすところの商品生産等、ひたすら營利を求めて人も生産設備も方向轉換を展開した。それがため國民經濟の自給自足體系が目茶苦茶に破壞されたのである。

封建經濟は、近代的生産樣式とは比較にならない幼稚さであつたが、それにもかゝはらず、かゝるものとして自給自足の經濟體制であつた。外部との物資の交流を遮斷されたまゝ社會生活が可能であり、そのまゝ戰鬪を繼續できる狀態におかれてゐた。これに反して自由主義經濟は、商品生産の經濟であり、利得追求のみの經濟であつて、自給自足の經濟體制の確立といふことは嗤ふべき時代錯誤として葬られてきたのである。それは利得になることならば何の考慮もせず敵國の飛行機、軍艦をも製造して賣り、國内における鐵鋼生産の能力が低い場合は、その需要を滿たすために、はるばる海外から輸入して暴利を貪つたりした。國家も事業家もかかる生産狀態を當然のこととして奬勵したりさへしたのである。たまたま國家的に憂ふる人あ

つて、不足物資を國内で生産しようとすれば、貿易商は擧げて反對し、外國品の優秀性を說き低價格を主張して國内生産を妨げた。したがつて技術の研究、代用品の研究などの科學的進歩をも阻止してきたのである。それは自由主義經濟體制下における國家の眞の生産狀態であり、常道であつた。

國境に轟く一發の銃聲が開戰の警報を亂打するや、たちまちにして自國の無計畫的經濟の脆弱性に當面した。國外生産に依存してゐたすべての物資は杜絶された。賴るべき物資は哀れにも顧みられなかつた國産品だけである。それも右から左へ消耗したり、輸出を急速調にすることをもつて「本邦貿易の殷賑」として謳歌してきたのであつて、蓄積などありうる筈がない。石炭・石油・鐵鋼・アルミニユームの增産、造船設備、軍需品工場の增設を計つても、それでもなほ國境で消耗する砲火の嵐は、自國に對し武器の增産を要請する。それがため代用燃料の發明、水力發電の增大化、貧鑛の開發等に努力し、つひには生産の根幹、國民勤勞の再編成を行はんとする。

自由主義經濟から國家主義經濟への轉換、無計畫生産から計畫生産へ、――民族の興亡を決する戰爭は、否應なしにその改編を命ずる。

自由主義的無計畫生産は戰時における經濟動員を混亂に陷れるとゝもに、他面、國民生活の需要物資を最低限度の生産にとゞめるをつねとする。商品生産の經濟は賣れるから生産するのである。購買力が國民にあるときは商品をやたらに生産し、購買力がなくなれば不景氣として生産を減退せしめる。商品生産は、生産の過程において使用する勤勞者を最低賃銀に釘付とし商品の販賣面において同業者組合、あるひは獨占的生産等によつて高價格で販賣する。したがつて多數國民の生活はつねに最低水準線を彷徨せざるを得ない。多くの勤勞者が企業家の利潤獲得の犧牲となつて低賃銀を餘儀なくされることは、他面において多くの國民購買力の減少を招くことを意味する。

自由主義社會における商品生産量は、市場の購買力の量によつて決定される。したがつて購買力の減少した自由主義經濟社會の生産力は、それに應じて低下するのが當然である。實に自由主義的・民主的體制の國家にあつては、國家的な全體的な問題よりも個人の繁榮を目的とするがゆえに、國家豫算が著しく減額され、國家が必要とする物資も生産することができない狀態に置かれがちである。

自由主義經濟社會の生産設備は、國家的社會的需要をよそに購買力の伴ふ物資量のみを生産

する機關を設備するに過ぎない。それかといつて、それは個人の意志ではなく、かゝるものとしての機構なのである。

かくのごとき國内生産能力の縮小は、ひとたび開戰となるや立ちどころに物資不足に惱まされた。國家の最低消費量のみを生産してゐた生産機關に、戰地の絶大な消耗量の生産が課せられたのであるから物資が不足するのは當然である。何よりもまづ、國家の運命を背負つて第一線で死鬪しつゝある護國の英雄に必要な物資を送らねばならない。國民勤勞力は、從來の職場から戰爭が要求する生産部門へ移行し、その結果、國民の生活必需物資に甚大なる不足を生ぜしめるにいたる。しかも他方、貿易の杜絶によつて輸出品製造工場の煙突の煙が消え、わびしく操業休止の生産機關があちらこちらに立ちはだかるといふ奇現象を呈する。

生産力の弱少と跛行性生産の現狀を、戰鬪經濟への增産と均衡化の狀態に調整すべく政府は懸命の努力を拂ふのであるが、前線における戰鬪は國内のかゝる生産狀態を顧慮することなく展開され、兵器と兵員の補充をしきりに要請する。しかるに國内經濟の戰鬪經濟への轉換は、戰地の消耗を補充しえられる速度をもつて增進されるものではない。第一次世界大戰においてのドイツは、正にかゝる典型的な現象を起した。戰鬪の途中において計畫的經濟體制への轉換を痛感したドイツ政府は、「ヒンデンブルグ・プログラム」に基いて戰鬪的經濟への編成に着手しはじめたが、前線の消耗に答へる前に、國民生活が惡化してみじめにも世紀の敗北を喫したのであつた。以來、ドイツ國民の腦裡には、無限の怨みとともに自由主義經濟體制の脆弱性と缺陷とが刻印せられたのであつた。

自由主義經濟の缺陷はたゞに生産の部面だけではなかつた。それは生産物資の集配部面においても重大な缺陷が現はれたことである。自由主義社會における物資は商品として取り扱はれ一切の國家的社會的な物質的生活を支へてきたのである。すべての國民は、自己の要求する物資を、自己の勤勞で生産するのでなく、社會性のある物資を生産し、社會性のある勤勞を行ふことによつて、その報酬としての通貨を獲得し、所要の物資を購入するのであつた。各個人の自給自足の經濟は自由主義經濟社會では見られなくなつたのだ。すべての物資は商品化され、すべての生産物は社會化された。人は、もはや商品なしには生活しえられなくなつてゐたのである。

しかるに、これらの生産された商品は、營利を目的とする商業者の手に集中された。國家の消費物資、生産機具と原料、國民生活の消費物資等のすべての商品は、商業者の手を通じて購

入された。その意味で商業は經濟社會の動脈であつたのだ。この動脈がひとたび停止されるならば、當該社會は立ちどころに大混亂に陷るのである。商業者は直接の生產活動に從事するのではないが、國家生存圈に必要な物資を集配する役割を演じてゐるのである。だが、かれは物資集配の社會的役割を目的とはせず、かれは營利の獲得を目的とした。自己の勤勞以上の報酬を獲得すべく活動した。國家的社會的な勤勞者層から、可能なかぎり搾取することに努めた。それは國家が國防上必要な物資であつても、營利に合致しないならば集中した物資を供給することなど欲しない。商業者は營利追及の權化かの如くであつた。

自らの尊き汗を流すことなく、他人の尊き勤勞によつて生產された商品を操作することによつて、より多くの收入を計らんとしたのは商業者であつた。しかも多くの人は商業をめざして生產の任務を捨てた。農民は土地を捨て、職工は技術を放棄し、商業者として獨立することをもつて「立身出世」と心得た。――封建時代から自由主義時代にかけての商業者は著しく增大した。かれらは勤勞せずして、他人の勤勞の成果を「盜」むことに專念したのである。

したがつて生產者は、國家社會の必要とする人員の生活必需物資、並に生產者相互の生活物資、あるひは國防的物資等を生產するにとゞまらず、不生產的な人員、國家社會に寄生する多くの遊動的人員の生活物資をも生產しなければならなかつた。それゆえ自由主義社會における生產能力は多くの投機的・遊動的な商業者を除いた殘餘の勤勞の總和でしかありえない。

しかしながら、商業の反國家的性格が一般に痛感されてきたのは、その本質が國家社會の寄生的存在の故からではない。商業の目的、その本質が搾取的な非生產的な反國家的な目的を有するものであるとはいへ、自由主義社會においては、いまや無くてはならぬ物資集配の社會的役割を果しつゝあるのである。しかるに國家間の經濟戰、あるひは武力戰が展開されて、國際的な自由主義的貿易が停止され、勤勞的人員が國防の前線に武器をとつて起つやうになつて、物資の不足、あるひは一方的に國防兵器類の需要が增大するにいたるや、商業者は露骨に自らの目的を現はしはじめたのである。

社會生活の必需物資が急に不足するやうになると、かれは買占めを行ひ、暴利を貪つて販賣し、國防資材の需要が增大するや、これまた多額の利潤を收得せんと心がけた。そのために國民生活を窮迫せしめ、兵器の生產を阻害する點が多かつた。兵器の增產並に國民生活の最低水準の確保は、國家總力戰體制上不可缺の要素である。未曾有の國難に際會してゐるのに、一部商業者の利己的行動から國內を攪亂されてはならない。國を憂ふるすべての者は物價の公定、

物資集配の統制を斷行する政府の政策を支持するのが當然のことである。

かの第一次世界戰においてみじめな敗北を遂げたドイツは、武力戰で敗れたのではなかつた。それは國内における國民生活の惡化がもたらすところの政治的・思想的動搖のために戰鬪の基地を失つたからである。しかも國民生活を惡化させた最大の原因は、國内の物資集配機構が、前記のごとき利益の獲得を目的とする商業者の手にゆだねられてゐたからである。

封建時代から自由主義時代にかけて、あらゆる國家的社會的な勤勞人員をして、あたかも結核菌が人體を蝕むごとく腐蝕し崩壞せしめてきた商業も、近代において國家總力戰態勢が要請されるにおよんで、遂にその反國家的性格の改變を現實的に要求されはじめたのである。

それにつけても、自由主義經濟はあまりにも短命であつた。人智が進歩してゐる今日とはいへ、その生存の歷史があまりにも短命である。歐米諸國においても十九世紀の後半から發達し二十世紀の今日、すでに全面的に自由主義經濟體制を變革せんとする氣運が一般的な風潮となつてゐる。わが國は明治維新以後急速に自由主義經濟の發達を見たのであるが、今日すでに反國家的性格の經濟體制として論難改變の途上にある。

しかしながら、それは自由主義經濟の宿命とでもいはれやう。そもそも發生史的に觀ても分るやうに、自由主義經濟は、全體的な家族的な性格として生れたのでなく、また民族的な國家的なものとして發生したものでもない。その發生は、全體に對立する部分として、國家に對しては個人の利益を目的として、反逆的に、功利的に生れた我利我利の經濟であるからである。人は和を欲する。民族は相愛を望む。一家は團欒を求める。全體の幸福の中に自らの幸福を求める。自由主義經濟は正にその反逆兒であつた。平地に亂を起すもの、一家の團欒をかき亂すもの、他人を踏み臺にして自己のみが熟柿を得んとする者は叩かれる。國内の敵、人類の敵としていまや覆滅の危機に瀕してゐるのが自由主義經濟である。

第四章　相剋經濟としての社會主義

第一節　社會主義思想の發生

社會主義思想は個人主義的獨占經濟に反抗して生れた。富有なる個人が國家民族の苦難を顧みず、ますます經濟的制覇の手を延ばしつゝあるとき、生活水準の下層部分を形成してゐたいはゆる無產者が、これまた國家生存圈全體の利害を考慮せず、自己階級のみの解放といふ部分的・個別的利害のために着想され、運動を開始したのが社會主義であつた。

社會主義運動の中にはキリスト教社會主義、理想鄕社會主義等空想的な性格のものもあり、また無政府共產主義といはれる狂暴な性格のものもあつた。

自由主義經濟は前章に述べたごとく、漸次生產の集大成化を促進し、資本の蓄積を行ひ、生產樣式が大規模化されるにしたがつて、多くの勞働者や沒落した中小商工業者は、現實の個人主義的獨占經濟の下では、とうてい「再起」しえられないものと諦めるとともに、現實の社會に不滿を抱き、反抗しはじめた。

また、かゝる情勢を見た知識層の中で、ものを全體的に觀察しえない少數の人々は、社會主義理論を組み立てたり、あるひは一方的に同情したりして社會主義運動を形成したのである。

かれら社會主義者は生活苦にあへぐ無產者層に對し、野牛に火をつけるやうな煽動とともに社會主義運動へ驅り立てた。そこには國家生存圈全體の運命を考へることよりも、自己にまつはる火を消すことにのみ懸命な階級鬪爭が展開された。個人主義的獨占經濟に反對したかれらも、また國家的全體的な利害の見地から出發することなく、あくまでも自己階級の解放といふ部分的利害を代表したものであつた。

社會主義思想はマルクスの論策にかゝる「資本論」によつて統一されはじめた。かれらはマルクスの思想を「科學的社會主義」と稱して運動を統一化することに努めた。すなはち哲學的には「辯證法的唯物史觀」に立ち、經濟の原理を「勞働價値說」に求めたのである。

「商品の價値は資本力でもなければ、社會の要給度によつて形成されるものでもない。價値は物に加へられたる勞働力の量であり、それの變形に過ぎない」と主張し、人間が勤勞しうる安定せる社會を維持するに必須的な國防・行政等の國家政治の努力、および企業體を運營する經營家の努力、技術家等の國家的、綜合的な人間の努力を認識しえなかつた。

かゝる歪められたる勞働價値說を根柢とした社會主義思想は、「この世の富は勞働者階級の歷史的所產である。」として、勞働者階級への還元を正當とし、「勞働者階級のみの國家を樹立する。」といふ偏狹な理論を組み立てたのである。そしてかかる目的を貫徹するために「勞働者階級」の團結せる大衆的勢力によつて鬪爭することを主張し、「萬國プロレタリアートの團結」を强調した。

いふところの科學的社會主義の全理論體系は、かくのごとく部分的な力——勞働力を全體の綜合力とすり換へた勞働價値說に根柢を求めてゐる。したがつて全政治運動は階級鬪爭といふ相剋性のものであつた。そこには國家內における同胞相互の融和もなければ、祖國愛もなく、また孜々營々として努力して築かれた富であつても、その經營者は勞働者を使用してゐる限り「ブルジョアジー」として排斥せんとしたのであつた。

マルクスによつて代表された社會主義運動は、かくのごとき病的偏見から組み立てられた勞働價値說を、現實の社會への展開によつて國家民族を階級鬪爭の淵へと投げ込んだのである。

無產者層は、個人主義的獨占經濟の制覇を憎惡するのあまり、自らの置かれた地位を脫却せんとする焦慮のあまり、ものを全體的に、道義的に觀ることができなかつた、哀れにもひたむきに社會主義理論に魅惑されて、血で血を洗ふ同胞爭鬪の凄慘な運動に投じた者がすくなくなかつた。

かくのごとき社會主義運動の嵐はまづ歐米を席捲し、やがてまた東洋の沿岸にも吹き荒びはじめた。それは歪められた理論であつても、個人主義的獨占經濟の吐き出す弊害が激增してゐた時代であつたから、無批判的に無產者層の多くを哀れにも盲者にし、狂暴な病人にしたのである。

爾來、全世界の各國家內部には豫期しなかつた「階級鬪爭」が續出した。すなはち歐米においては二十世紀の初頭から第一次世界戰にかけて、社會主義の嵐に見舞はれない國がなかつた。東洋においても支那をはじめとして、わが皇國にまでこれらの不逞思想が侵潤してきたのである。

社會主義運動の發足は、自由主義運動の立場と同じく、國家生存圈全體の觀點に立つものではなく、全體の中における部分の利害を主張したのである。自由主義と異なるところは、自由主義はあくまでも個人そのものゝ利害の立場に立つに對し、社會主義は同じ社會的地位にあるところの勞働者層の集團的利害の立場から出發し、かつ國際的橫斷的結合を形成せんとする點

である。

社會主義運動のかくの如き立場は、有史以來、國家生存圏を中心として生成し來つた人類生存の基本的動向と異なるものである。人類の生活は國家なくして存續しえない鐵則の下にあるにかゝはらず、社會主義運動は國家を無視して、國家圏内における一部社會層の利害のみを主張する。そこに大なる矛盾が内在してゐるといへよう。

國家生存圏が生存場裡において敗北し滅亡するならば、社會主義運動の攻擊對象とした「資本家」も、また勞働者層そのもの丶生命も、共に滅亡する運命にあるのである。しかも社會主義運動がやうやく熾烈化しつゝあつた時期は、國家生存圏自體が喰ふか喰はれるかの世界戰に直面してゐた。

生存資源に惠まれない國家生存圏は、人類の歷史から抹殺されんとする危局に當面してゐるとき、資源獲得の方法の批判や、あるひは國家内部の生活において誰が最大の幸福者であるか、また誰が利得を獨占しつゝあるかといふことよりも、國家民族はいかにして生存資源を入手するかの問題が先決問題であつて、國家内部においての利得の配分問題等は、第二義的な問題であり、あくまでも内部的な問題である筈である。

しかるに社會主義運動は國家生存圏の運命を打開せんとはせず、ひたすら國内における「階級鬪爭」に熱中し、國家的統一を阻害したのである。それがため心ある多くの國民は、かゝる社會主義運動に參加することなく、國家的任務に努力することを忘れなかつた。

第二節　社會主義國家の成立と經濟機構

社會主義思想は多くの矛盾を内包しつゝも、自由主義的營利主義經濟體制の國家内に宿痾のごとくに蔓延した。だが世界の大勢は自由主義や社會主義運動に左右されることなく、國家生存圏の生存を確保するために、生存資源の獲得に向つて突進しつゝあつた。西暦一九一四年、つひに第一次世界大戰が勃發した。

周知のごとく戰爭の原因は、生存資源に惠まれた國家圏の現狀維持政策と、生存資源に惠まれざる國家生存圏の鬪爭であつた。しかしながら、戰爭の動機や目標とは別に、戰爭そのものは尨大な物資を消耗した。しかるにいづれの國も國内は前章のごとき自由主義的經濟體制であつて、とうてい長期戰に堪へうるものではなかつた。

勃發した世界戰において、内部的に脆弱な交戰國は最も早く疲れるのが當然である。當時の

ドイツ、イタリー、フランス、ロシヤ等が、戰爭の長期化とともに國民生活の最低線の確保が困難となつたが、そのうちでも最も困窮したのは帝政ロシヤであつた。一九一七年、ロシヤに世界最初の社會主義革命が勃發し、社會主義國家――社會主義ソヴエート聯邦共和國「ソ聯」政權が樹立されたのであつた。

樹立されたソ聯政權の指導黨としてのロシヤ共產黨は、マルクスの病的偏見から割り出された勞働價値說を信奉する黨である。かれらは社會主義國家を樹立するに際して、勞働者・農民以外の社會層を排除したことはいふまでもなく、一切の大工場、大經營、大土地等を新政府の所有に歸せしめたのであつた。それは勞働者農民が支配するといふ體制ではなくして、一部の社會主義者が支配する國家體制が出現したといへよう。

いづれの國の歷史を見ても革命には血の爭鬪がつきものである。しかしながら同胞殺戮の悽慘さはロシヤの革命をもつて古今未曾有のものといはれた。國家民族全體の擁護の戰ひに奮戰した指導者、企業家、地主の階級はいふまでもなく、多くの非社會主義者等が根こそぎに姿を消されてしまつたのである。

かくして社會主義思想に基く政權が樹立されたといふものゝ、それは社會主義を信奉し、共產黨の指導に服從するところの勞働者、農民層の一部――全體の半數にも滿たない人々によつて樹立されたのである。この赤色革命は、いふところの舊支配者層を慘虐な手段で迫害したばかりでなく、また多くの勞働者、農民層の青年をも對立相剋のうちに死にいたらしめた。したがつて全體として、同胞相互の殺戮の上に樹立された革命であつた。それは無產者の解放といふ目標を抹殺してなほあまりある被害といはねばならぬ。

社會主義社會の建設を叫んで樹立されたソ聯は、黨と軍權を支柱として人民代表の國家と假裝された政府を樹立し、何よりもまづ、從來國民に公約した社會主義經濟機構の編成に着手することになつたのであるが、革命直後は內外の「干涉戰爭」がたえず、軍需品を戰線に送らねばならないし、食糧品の充足をも計らねばならなかつた。それがため全產業を國家が管理し、食糧品のごときも切符制を强化したのであるが、戰爭と革命で生產が荒廢に歸してゐる上に、領土が廣大であり、他面、經濟の再建に際して基本的な要素であるところの經營の才能家、高級技術者等をブルジョアジーとして排除し、國民の勞苦の結晶たる財產を無償沒收する等、非人道的手段のゆえに、國民の一般的傾向としては經濟再建の熱情を傾注しえなかつた。

工業と農業が小規模に分散されてゐて、物資不足につけ込む闇相場と買占め件數は刑罰をは

るかに超へる有樣であつて、經濟を組織化するといふ社會主義の理想とは相容れない現實に當面したのである。一九二〇年頃內外の戰亂も終熄し、政治的危機を脫したので「新經濟政策」を採用し、國民の生產に對する協力を求むるにいたつた。すなはち經濟に對する國家の統制を緩和し、自由主義的・營利主義的な經濟を多分に加味したのであつた。

國營事業と丶もに營利經營とを併用したソ聯は、その間にあつて新たなる國家經濟計畫の再編成を行ふべく準備した。それは修正に修正を加へて立案せる產業五ヶ年計畫であつて、革命政權樹立後十ヶ年餘を費し、つひに一九二九年五月、第十六回黨會議で採擇されたのである。以後第二次、第三次と產業計畫を實施して、漸進的に新經濟政策の實現を計つた。その主要なものは次のごとくいはれてゐる。

(一)金融機關の國營はすでに革命と丶もに行はれてゐた。

(二)土地の國有――主要な土地は國有にされてはゐたが、個人的な小規模の私有的農業經營が多く、計畫經濟の實施前には國家管理の農業は全農業生產の七%であつた。しかし第一次五ヶ年計畫實施後は播種面積が九六・六%となり、國家管理が强行せられたのである。

(三)一切の勤勞人民は國家の計畫的動員下に置かれ、命令に違反する者は嚴重な刑罰を科せられた。

(四)貿易の國營。

(五)國營工業――一九二九年、第一次五ヶ年計畫開始當時の國營工業の生產高は、全工業生產の八九・五%であつたが、一九三五年に九九・七一%と發表された。

(六)集配機關の國營化――戰時共產主義時代は國民の全商業機關を禁止し切符制を採用したが、新經濟政策の採用後は民間の商業機關と國營の配給機關を併用した。そして漸次的に全商業運營を國營事業へ再組織せんとした。すなはち國營工業附屬の卸商業は一九二六年に卸賣取引高の九二%を占め、その後間もなく個人の卸商業を驅逐してしまひ、消費組合も國家の管理下に置かれた。當初、小賣商業機關は、國營小賣商業機關よりも、個人商業機關が優勢であつたが、これも漸次國營機關に壓迫され、單に一部の存在となつたといはれる。

かくして經濟を國家の指導と計畫の下に置き生產配給等の全經濟が國家の意志に從はしめられたのであつたが、經濟の再建は遲々として進まなかつた。

しかし經濟を國家の計畫化に組織したことは、曲りなりにもかゝる國家の目的に沿はしめたのであつて、その國家に不要な生產がなくなつたことは事實であろう。

經濟の國家計畫化、經濟機關の國營化、經濟機關の單一的集大成化等の諸政策は、經濟を國家目的に副はしめ、經濟を計畫的に運營することゝなつた。個人主義に基く營利主義的經濟機構の國家においても、資本の自己運動として生產の集中化が進行するものであるが、いかんせんそれは個人の營利に合致する目的のもとに行はれるのであつて、國家的な需要を滿たすものでもなければ、また計畫的なものでもなく、國民の購買力に制約せられてゐた。それに反して社會主義經濟は、社會主義者の國家權力によつて、社會主義の國家目的に合致するところの經濟にその基礎を置き換へたのである。

さりながら、社會主義經濟への進行、自由主義經濟から社會主義的國家經濟への編成換は、單に機構の轉換によつてのみ達成されたのではなく、それはすでに明瞭なごとく、世の偏見者といふものゝ、狂氣のごとく熱し切つた「同志」の行動と、一般的な國家擁護の思想とが基底をなしてゐたからである。いひ換へるならば、全國的な黨組織の存在と、一般的な祖國防衛の思想が內在してゐたので經濟の國家計畫が達せられたと見るべきであろう。が、それとゝもに社會主義運動が、その根本において歪められた原理に立つが故に、國家經濟全般の活動が遲々として進行しなかつた。それは後述するやうに國內は終始暗鬪と相剋の連鎖であつて、政治經濟の全面にわたつて、そこには民族的な溫かさもなければ、また信賴關係も見られなかつた。その相剋の樣相は、かれらが否定した自由主義社會以上の對立社會であり、恐怖政治であつた。

第三節　社會主義の沒落

社會主義政權――ソ聯國家は、內外の反社會主義國家群からの强烈な攻擊の裡に樹立されたものであり、社會主義經濟への轉換と育生は、國際的經濟封鎖と國內における反社會主義者の「怠業」に加ふるに、封建的農業、生產の分散化といふ客觀的情勢を前にして編成されたのであつた。

かゝる情勢と歪められたる原理に立ちながらも、とに角一應社會主義經濟體制を形成し得たことは、ささに述べたごとく、國家民族の防衛といふ對外情勢に當面してゐたこと、および自由主義的營利經濟に對する過去の憎惡があつたからであろう。

だが、社會主義思想並に社會主義政權に對する憎惡と反感は決して抹殺されたわけではなく、却つて逐年倍加するばかりであつた。社會主義者にいはしむれば、社會主義への憎惡は、資本家陣營の利己的思想から發するものであると獨斷するのであるが、それにしても社會主義に對する反感は資本主義的要素のみが抱いたものではなく、いふところの無產者的な社會層もまた漸次憎惡の念を昂めるにいたつた。社會主義思想が擡頭した當初は、燎原の火のごとく風靡し、世界の勞働者層の支持をかち得たものゝ如くであるが、社會主義國家の育生と併行して世界の勞働者層は逐年離脫する傾向を辿つたのである。それはドイツ、イタリー、日本等の勞働者層が、國際共產黨及び赤色勞働組合から漸次離脫して、ついに社會主義思想も、その運動をも棄て去るにいたつたことである。

實に社會主義國家、ソ聯の情勢を觀れば、常識では理解できない事件が頻發してゐる。それは社會主義國家が樹立されたその日から、同志相喰む暗鬪を起したことである。社會主義運動そのものは、いかに誤まれるものであらうとも、社會主義者としては自らの誤りを自覺してゐないのであるから、社會主義者相互の間は親密であろうと觀察するのは人々の常識であつた。にもかゝはらず、その反對に「憎惡は內部の異端者から」といふ新標語の下に、かつての同志が爭鬪をはじめたのである。かくてソ聯においては、「革命の功勞者」であるとされてゐたトロツキー、カーメネフ、ブハーリン等の領袖が屢次の「肅淸工作」によつて處刑され、赤軍建設の「殊勳者」といはれたトハチエフスキー等々もまた斃された。

わが國においても社會主義の陣營が左右兩翼に分れて相剋し、宣傳戰や亂鬪に火華を散らし、かつて共產黨內でリンチ事件といはれる慘虐事件が頻發したことは周知の事實である。

ソ聯政權が樹立された當時の社會主義者の行動を觀れば、一切の大土地、大工場を無償沒收し、所有者、經營者、高級技術者、貴族等を追放し、一切の非社會主義的要素を迫害した。これらの中には、ロシヤ民族生存のために功勞のあつた者もあり、企業經營に才能ある者もあり、また發明發見に勝れた科學者もあつた。孜々營々勞苦を忍んで富を築いた者もあつたであろう。しかるに社會主義者はこれらの人々の功績と努力を何等顧るところがなく、非人間的な慘虐な手段で斃してしまつたのである。そのためにソ聯國家は大企業運營の才能ある人物が不足し、技術者が涸渴を告げ、軍隊指揮者の能力が低下したことは人の知るところである。

かれら社會主義者が「萬國のプロレタリアート團結せよ」と叫び、同志の結束を信條とするかのごとくであつたが、事實は正にその反對で、かれらこそが世界のいかなる思想陣營よりも暗

鬪相剋を繰り返へしたものであつた。かれらは內部の暗鬪を續けつゝ、また非社會主義思想の純眞な國民に對して言語に絕する迫害を行つた。少しでも政府に對する反感を發するならば、暗黑裁判で處斷した。昨日の高官は今日は死刑臺に上るといふ不安な境涯に曝された。

社會主義はすべての國民の力を國家に集中しようとはしない。すべての國民を、自らの國家建設に參加させようとはしなかつた。それは全く一部共產黨員の獨裁國家であり、他の國民は外敵以上の扱ひを受けた。人類愛と平等を强調した社會主義者は、何よりも冷酷な政策を實施し、いかなる國家よりも差別待遇を嚴にした。それがため農民の反感はつのり、工場勞働者の怠業が續出した。ソ聯國家は、社會主義者が內部對立の國家といふ營利主義經濟體制の國家よりも、はるかに激烈な內部對立があり、不平等であつた。そのために新經濟政策を實施して、一時、社會主義經濟への編成の速度を下げねばならなかつた。かれらは革命後二十年にして始めて社會主義經濟體制を形造くることができたのであるが、それは前述のごとく狂信的な社會主義者をもつて組織する黨活動の存在と、言語に絕する迫害の手段をもつて行はれた結果であるとみるべきであろう。

だが一定の組織力も、獨裁的强權も、それは生きた人間の思想の熱度によつて決せられる。

あまりに甚だしい慘虐な相剋、あまりに激しい非社會主義的國民に對する迫害の連續は、社會主義者自らに疑念を起させたのである。「裏切者」として共產黨幹部から處斷される者がまた年々增加した。しかしながら目に見える反感は對策を講ずる餘地があるが、目に見えない憎惡は雰圍氣として現はれ、處斷の方法がない。社會主義ソ聯は、國民の見えざる憎惡と反感の雰圍氣の連續によつて、つひに社會主義の「鐵則」の一部を變更せざるをえなくなつた。それは國際主義から民族主義への轉換であり、祖國愛への百八十度の方向轉換であつた。

祖國主義——國家主義は社會主義の邪道と唱へたものである。かれらは「國際プロレタリア」の橫斷的結合を强調してきたのであるが、打續く國民の反感に惱まされてやむなく祖國愛を强調せざるを得なくなつたのである。社會主義經濟の建設は二十年の長年月を要したことを辯明して曰く「それは地球の六分の一を占める廣大な地域であり、工業生產は小規模に分散されており、封建的生產手段の農業國であり、國民の文化水準が低位であつたが故」として自らの政策、社會主義自體の偏狹性を自覺しようとはせず、社會的に妥當な理論として狂信してゐた。

自由主義經濟から社會主義經濟への編成替が、かくも長年月を要したことの理由は、かれら社會主義者が言ひ譯するやうな「ソ聯における特殊事情」にあつたのではなく、それは經濟再

建に對する國民の情熱が集中されなかつたからであろう。

ソ聯においては同胞が疾視反目し、常に相剋の連鎖であり、經濟運營にあつては國民の全智全能が動員集中されえなかつたのである、それは政府の運營の誤りといふやうな性格からもたらされるものでなく、社會主義そのものゝ個性であり、原理の現はれなのである。

前項で述べたやうに、社會主義は勞働價値說といふ偏見の上に築かれたものであつて、勞働者や社會主義を信奉せざる國民等を輕視し、驅逐することを信條とする階級鬪爭を方法論としてゐるのである。それゆえ全國民層の創意や情熱が發揮されうべくもない。したがつて社會主義そのものゝ本質は、國家の經濟機構として妥當性のあるものではなく、個人主義的經濟と同樣、部分的社會の利害に立つ思想を原理としたものである。

ソ聯政權の樹立によつて、社會主義の姿をまざまざと見せつけられた人々は、社會主義の非社會性、非國家性を認識した。特に從來社會主義を信奉してきた者の多くは、失はれた過去を嘆じつゝその陣營から離脫する者が續出した。國際共產黨の弱化、赤色勞働組合の崩壞が開始された。

かくのごとき社會主義の凋落、秋風落漠の傾向は共產黨の幹部さへ方向轉換の必要を痛感させたのであろう。近時ソ聯政府は祖國愛を强調し、民族的相愛の精神を鼓吹しはじめてゐた。それは「萬國プロレタリアの團結」といふ組織論とは逆行するものである。

一九三九年、ドイツの空陸精鋭がポーランドに進軍し、第二次世界戰の火蓋を切るや、ソ聯赤軍もまた進駐を開始し、續いてエストニヤ、ラトヴイヤ、リツアニヤのバルト三國を併呑しフインランドの一部、ベツサラビヤ等の領土を火事場泥棒式に嚙り取つた。かゝる行爲は、共產主義の鐵則に背反するもので、戰爭とは「資本主義搾取の延長であり、市場獲得の武力戰である」と規定した獨善的論斷を自ら否定するものである。社會主義ソ聯も、また自らの立國の精神たる「科學的社會主義」を現實に否定したものであろう。

ソ聯のうつて變つた侵略的行動を見たドイツは、一九四一年六月二十二日、三百萬の大軍を動員してソ聯領土に雪崩れ込んだ。しかるに打ち續く內部相剋によつて優勢なる赤軍幹部を失つたソ聯は、社會主義政府の樹立以來、血の出るやうな努力で建設した近代工業の大半を、爆擊と砲彈と戰車で破壞され、自らもまた焦土戰術によつて、これらの生產裝備を破壞せねばならぬ運命に置かれた。

すべては宿命であつた。部分的價値——勞動力を、國家的全體的價値と觀念的にすり換へて

組み立てられた社會主義は、現實の社會を欺き過ごすことが不可能であつた。

第五章　全體主義經濟の登場

第一節　全體主義運動の發生

第一次世界戰はドイツの敗北によつて終結した。大戰により物資を極度に消耗し、戰勝國と戰敗國の如何にかゝはらず、國民生活を奈落の底へ突き落した。社會組織の脆弱な國家、生存資源の貧弱な國家の國民をして、現狀打破の革命的行動を勃發せしめたのである。

國民の不平不滿、現狀打破の對象は、反國家的・反社會的な自由主義經濟體制の批判と破壞とに集中され、ロシヤにおいては自由主義經濟に反撥して社會主義政府が樹立されたことは、さきに述べた通りである。

だが、近代國家の經濟機構としての二つの型——自由主義經濟と社會主義經濟は、いづれも國民相剋の性格をもつものであることを認識した人々は、その反對に國民相協力するところの體制への要望を抱いたのである。

西暦一九一八年、ドイツを襲つた社會革命の嵐は、共產黨の指導を排除したが、社會民主々

義の勝利となつて、かの「ワイマール憲法」に基く共和國が生れた。新政府は社會施設に重點を置き、大戰によつて破滅に瀕した生産の再建に努力を傾注したのであるが、それにもかゝはらず、經濟機構そのものは個人の資本力に制約されたる自由主義經濟であり、戰敗國としての尨大な賠償金を戰勝國から背負されてゐるために、ドイツ國内は暗黑に閉されてゐた。しかもドイツは各邦に分れてゐて、國民の擧國態勢を依然として妨げてゐたのである。

かくのごとき情勢下のドイツに、一九一九年一月五日、著述家オット・ハルレル及び錠前鍛治工アントン・ドウルーツケの兩名は、ナチスの前身「獨逸勞働黨」を組織したのであるが、同年九月十六日アドルフ・ヒトラーは同黨に加盟し、翌二〇年二月二十四日、第一回の黨大會を開き、その後變更されることなき黨綱領を採用した。要約すれば左のごとく二十五ヶ條からなる民族的・全體主義的な性格をもつものである。

(一)民族自決權に基き、凡ての獨逸人は一致團結し、大獨逸國を結成すること。

(二)他國と平等の權利を享有すること、ヴェルサイユ條約、サン・ジェルマン條約の廢棄。

(三)國と植民地。

(四)國民同志のみ獨逸公民たることを得。國民同志は獨逸人の血統を有せざるべからず。從つてユダヤ人は國民同志たるを得ず。

(五)獨逸公民に非ざる者は單なる客人として獨逸國内に滯在することを得。

(六)獨逸公民のみ國政の指導及び法律に關する決定に參與し且公職に就くことを得。

(七)國家は獨逸公民の職業及び生活に就き考慮すべきものとす。獨逸公民に非ざる者は追放せられることあるべし。

(八)獨逸人に非ざる者の獨逸への移住は之を阻止することを得。

一九一四年九月二日以降移住せる獨逸人に非ざる者は追放せらるることあるべし。

(九)凡ての獨逸公民は同一の權利及義務を有す。

(十)獨逸國民は第一の義務として、精神的或は肉體的に生産に從事すること。個人の行爲は共同の利益と衝突すべからざること。

(十一)無職及び不勞所得の禁止、利子奴隷の打破。

(十二)一切の戰爭による利得の回收。

(十三)トラスト經營企業の國營化。

(十四)大企業の生ずる利益の分配。

(十五)養老事業の確立。

(十六)健全なる中產階級の確立。百貨店を地方公共團體に依る經營に移すこと。小商工業者の匡救。

(十七)土地制度の改正――卽ち土地が不合理に取得され、又は公衆の利益に反して管理せらるる場合は、公衆の利益のため無償にて收用さる。土地賣買投機の防止、及び地代の廢止。

(十八)公衆の安寧を害する者は彈壓し、重罪犯は死刑に處す。

(十九)獨逸全般法の實施。

(二十)國民敎育事業の確立、卽ち貧しくして特に天賦の才能に惠まれたる兒童を國家の經費に依つて敎育すること。

(二十一)國民の健康增進、母性小兒の保護、未成年者勞働の禁止、體育の奬勵。

(二十二)國民軍の組織。

(二十三)政治的惡宣傳に對する彈壓、獨逸新聞の社員は國民同志たらざるべからず。非獨逸新聞は許可を要し、獨逸語を以て發行することを得ず。獨逸人に非らざる者は獨逸新聞の經營に參與することを得ず。

(二十四)獨逸國家に對して危險なく且ゲルマン人種の道德に背かざる限りに於て、國內に於ける信仰の自由を認む。獨逸勞働黨は一定の信仰告白に束縛さるゝ事なく積極的にキリスト敎の立場を代表す。我黨はユダヤ的物質的精神に挑戰す。

獨逸國民の恒久的更生は「公益は私益に優先す」といふ根本的概念によつてのみ可能なるものなり。

(二十五)鞏固なライヒ中央政權の確立。全國土に對する中央政府の無制限權能の確立、各盟邦國家にライヒの法律を施行するため階級及び職業會議所を設立すること。

同年八月八日、黨名は「國民社會主義獨逸勞働黨」と改められ、以來「ナチス」と略稱されるにいたり、間もなく現ヒトラー總統は黨首となつたのである。

右の綱領を見ても分るやうに、ナチスは屈辱的對外政策に反對し、民族の統一を叫び、「公益は私益に優先す」といふ立前をとり、個人主義的經濟を認めはするが、それは國家本位の經營を優先的にしなければならないことを明示してゐる。トラスト企業の國營化を强調するとともに、中產階級の安定化を希望し、生產の根本は人間の勤勞にあるといふ認識のもとに、すべ

ての國民に勤勞の義務を要請し、無職および不勞所得を禁止することを提唱してゐる。――ナチスのかゝる思想は、自由主義的營利主義經濟の反國家的性格を矯正して、國家目的に合致する體制たらしめんとするものであり、他面、養老施設等の社會事業を實施して、無產者的國民層を救濟せんとした。それといふのも、ドイッ國內の勞資の對立を緩和して擧國一致の態勢を形成し、ドイッが投げ込まれてゐる國際的屈辱の地位から脫却するとゝもに、旺盛な生活意慾を充足すべく、對外發展を圖らんとするにあつたのであろう。

第一次世界戰において、あへなくも敗れたドイッではあるが、それは戰鬪に敗れたのではなく、石油、鐵鑛、綿布、食糧品等の物資不足と、國內における經濟的・社會的組織の個人主義的性格の脆弱さのゆえに敗れたのであつた。しかもドイッをとり卷く隣邦諸國、イギリス、フランス、ソ聯等はそれぞれ廣大な領土や植民地を擁し、生存資源が豐富に存在してゐる。それに反してドイッは、國民の生活力が旺盛であるにもかゝはらず、生存資源の重要部分を國外から補給しなければならない弱點をもつてゐた。したがつてドイッ國民の第一の要求は資源の再分割にあつた。それがためにドイッは、國民の民族的擧國的統一化を圖る必要があつたのである。ナチスの運動はかゝるドイッ國民の切なる要望に應へる運動であつたと見るべきであろう。

ナチスは活動を開始するや、國民の各層から迎へられて燎原の火のごとく擴大したのも、また當然のことゝいはねばならぬ。

一九二九年、世界を襲つた經濟恐慌の嵐は、敗戰の責苦にあへぐドイッを見逃しはしなかつた。共和國政府によつて生產の回復がもたらされてはゐたが、世界恐慌により輸出物資は停滯して國外からの資源の輸入が困難となり、その上、國內に投下されてゐた外國資本の引上げが行はれ、ドイッ國內の生產機關が休止と操業短縮で萎縮し、數百萬を數へる失業者群は街路に氾濫した。かてゝ加ふるに、戰勝國は恐慌の危機打開のために、ドイッに對する賠償金の支拂を强硬に迫つたのである。かくてドイッの內外に亘る困苦缺乏が言語に絕するものとなつた。

かくのごとき國外的・國內的困難の增大の上に、共產黨の指導する階級鬪爭がまた激發され國民をして文字通り四分五裂に分裂せしめ、相剋暗鬪が日增しに激化するにいたつたのである。

戰勝國の英米が指導するヴエルサイユ條約の破棄――對外强硬、民族統一・階級鬪爭の廢止

と協調等を絶叫するナチス運動が急速に伸張し、遂に一九三三年ナチスが政權を獲得したのであつた。以來ドイツは自由主義經濟の反國家性を矯正し、勞資の對立を解消せしむべく生産者を打つて一丸とする統制經濟機構へ移行したのである。

自由主義の基礎に立つ營利主義經濟の反國家的性格と、それに反撥して生れた社會主義の階級鬪爭を眺めて、兩者ともに自己の利害のみを擁護する運動であるとし、何よりもまづ國家的國民的全體性の利益擁護を第一義的任務としなければならないといふ思想は、たゞにドイツにのみ起されたものではなかつた。第一次世界戰後には同じくイタリーにおいてもファシズム運動の形態をもつて擡頭し、ドイツより一足先に全體主義的な經濟體制が樹立されたのである。

イタリーは、第一次世界戰には聯合國側に參加して戰勝國となつたのであるが、參戰の代償として約束されたダルマチア併合の希望は踏みにじられ、戰死・戰傷者は二百萬餘の多きに達し、國内は物資の大消耗の後をうけて極度に窮迫し、まことに燒け野原を思はせるものがあつた。しかもイタリーは、鐵鑛、石炭、棉花、羊毛等の重要資源の悉くを外國に依存する狀態であり、主要食糧品たる小麥は國内需要の三分の一より自給出來なかつたのである。ためにイタリー朝野は憤懣と缺乏の暗黑の色に閉されたのであつた。

しかるにイタリー國内の自由主義的勢力は相も變らず自己の利益のみに專念して國民の窮乏も國家の危局も顧みはしなかつた。他面勞働者大衆はこれまた自己の當面の貧困を解決することにのみ死鬪し、勞働爭議は全土を覆ひ、一九二〇年九月には勞働者による工場占領がはじまり、鎌とハンマーの赤旗が空高く揭げられ、全生産が停止するの不安に陷つたのである。いふまでもなくこの運動は、社會主義の黨、社會黨の指導するものであり、この黨は議會においても多數を占めてゐたのである。

かゝる形勢を見て憂國の熱血をたぎらしたムッソリーニは、かの有名な黑シャツ隊を組織して、勞資雙方の個人主義的行動を實力によつて制壓し、國家の利益を本位とする經濟機構の確立を强調して、もつぱら危機打開の運動に專念し、つひに一九二二年十一月、黑シャツ隊を率ひてローマ進軍を敢行、ファシスト政權を樹立したのであつた。

ドイツにおけるナチス運動、イタリーにおけるファシズム運動は、國情の差によつて形態を異にするところがあるが、ともに自由主義的經濟を修正し、かつ多數國民の地位を向上し、國家的立場から經濟の運營を統制せんとしたところに共通點があつた。

第二節　全體主義の經濟機構

經濟の國家統制化を主張して成立したドイツのナチス、およびイタリーのファシズム運動は政權を掌握するやまたゝく間に經濟の再編成を完了した。その構成を一言にしていへば、營利主義經濟に對する國家統制である。それは社會主義經濟のごとく假裝的學理的體系に基いて再編成されたものではない。また自由主義經濟のやうに自然成長的に形成されたものでもない。當面してゐる經濟――自由主義經濟の缺陷を國家權力によつて是正し、國家的目的に合致せしむべく指導することにあつた。したがつてその改組、再編成は簡單に行はれた。

ドイツのナチス、イタリーのファッショ運動が政權獲得後再編成した經濟體制の主なる點を擧げれば次のごとくである。

(一)生產機關は民有民營とし、資本の利得を認めるが、運營の方針は國家が指導し、利得の分配も國家の方針に服さしめる。

(二)經濟團體は產業別に組織され、產業別單一團體が合して產業團體の全國組合が結成される。この全國組合の役員任免權を國家が有し、以下の下部機關はそれぞれ上部機關の指導に服す。(これはわが國の統制組合と同一形態のものであるが、ドイツ、イタリーにおいては產業指導の廣汎な權限をもつてゐる)。

(三)金融機關は民有民營であり、資本力を是認するが、機關の統合、運營の方針は國家が決定する。

(四)通貨は金・銀等物質通貨の準備制を廢棄し、公債、信用制度を活用して國家所要の生產擴充資金等を豐富にする。

(五)貿易を國家管理とし、國家的利害の見地から輸出入の統制、國際的通貨關係の換算等を行ふが、貿易商等の民有民營を認める。

(六)農業は食糧の自給自足の立場から重農政策をとり、ドイツにおいては農地の世襲制を確立した。

(七)勞働者と資本家の階級別的組織を解消せしめ、企業家を指導者とする勞資混成の生產者團體を結成せしめ、生產に對する勤勞を圓滑ならしめ、勞働裁判所等を設置して勞働者の保護に當る。

(八)生產に對する發明・發見等技術的な進步改善等がみられた場合は、當該全產業に適用し

普及せしめる。

(九)物價の公定制を確立し、「闇相場」を嚴重に取締る。

(十)强固にして全國的な一國一黨によつて全國民層を指導する。

經濟力が國家を支配しようとする自由主義經濟に、國家主義的なナチスが反感を抱き、國家の權威によつて經濟を指導することになつたのである。これは社會主義のごとく、營利主義經濟そのものゝ性格を分析して改變せんとするのでなくして、營利主義經濟をそのまゝ認めて、その橫暴――國家も國民をも資本力で拘束せんとすることに對する抑制であつたのだ。ヒトラー總統は「我が鬪爭」において次のごとく述べてゐる。

「經濟が國家を決定する主婦にまで成り上つたと同じ程度に、貨幣は、凡ての者がこれに仕へ、凡ての者がその前に拜跪しなければならぬ神となつた。天の神々は、古くなり時代遲れとなつたものとして、愈々隅の方に押し遣られ、これに代つて黃金の神に讃美が捧げられるに至つた。斯くて全く有害な墮落が起つたのであつたが、その墮落は實に、將に恐るべき危機の襲來せんとして、國民がその極度の英雄的精神を一層必要とされた時に於いて起つた爲に、殊に有害なものであつた。これが爲にドイツは、その『平和的活動』の方法に依つて日々のパンを確保する企圖（貿易に依る世界制覇の企圖）をば他日劍を以てこれを守ることを自ら容認しなければならなかつたのだ。

而もこの金力の支配は、悲しいことには、これに對して最も反對しなければならなかつた筈の方面からまで贊成されたのであつた。かの皇帝陛下に於かれては不幸にもこれをば嘉し給ひて、特に貴族の稱號をこの新たなる金融資本の分野にまで及ぼし給ふたのであつた。勿論、これに就いてはカイザーのみが責めらるべきでなく、その點に於いては、悲しい哉、ビスマルクさへもその危險の到來を認識しなかつたことが考慮されなければならない。が、いづれにしても、これが爲に觀念的の諸德は實際上貨幣價値の下に置かれるに至つたのであつた。蓋し、この方向に向ひ始めるや、武門貴族は忽ちにして金融資本の背後に押しやられねばならなかつたことは明瞭であつた。貨幣工作は戰鬪よりもヨリ容易に成功した。斯くしてまた、眞の英雄や眞の政治家にとつては、その邊にザラに存在する銀行ユダヤ人と並んで列せしめられることは、最早有難いことではなかつた。眞に功勞ある人々は、左樣な安價な勳章を頂戴することに最早何等の關心も持ち得なくなり、謹んでこれを拜辭したのであつた。實際純血統的關係から考へても、斯樣な發展は悲しむべきことで

あつた。貴族は益々その存在の血族的前提を失ひ、その多くの者にとつては、恐らく、貴族といふよりも『非貴族』といふ方が遙かに彼等に適したものとなつた。

更に、一の重大な經濟的墮落現象は、個人的所有權が漸次失はれて、全經濟が次第に諸株式會社の所有に移つて行つたことであつた。

これによつて先づ勞働が、當然、良心なき奸商共の投機の對象にまで下落せしめられた而も勞働者に對する持てる者の虐待は無限に昂まつて行つた。財閥共が凱歌を擧げ始め、徐々にではあるが然し確實に、國民生活をその支配下に置くに至つた。

右の言葉で分るやうに、營利主義經濟に對するナチスの態度は、資本力が國家・國民を支配することの現實に對し道義的觀點から否定したのであつて、營利主義そのものゝ內容を理論的に掘り下げて否定したのではない。したがつて政權掌握後における政策も營利主義經濟そのものゝ廢絕の上に築いたのではなく、國家の權威によつて抑制したのである。すなはち自由主義的營利經濟の現實的な反國家的行爲を抑制したに止まる。

他面において、勞働者階級の現實的な生活苦を、端的に除去することに努めたのであつた。

ナチスが政權を獲得した一九三三年は、失業者が數百萬を越えるといはれてゐた。したがつて何よりもまづ、失業者の一掃に乘り出さなければならなかつた。鐵道、道路、橋梁、治水等の大土木事業を起し、開發資金は「勞働賦與手形」を公共團體をして發行せしめ、所定の金融機關で割引して通貨に換へるやうにした。その上「勞働奉仕隊」を組織して國民勤勞力の遊休狀態を克服したのである。生產は勤勞によつて生ずるといふ經濟原則を確認してゐるナチスとして、けだし當然の政策といはねばならぬ。

ナチス運動もファッショ運動も、ともに勞資の階級鬪爭には手を燒いてゐた。それゆえ政權掌握後の重點は階級鬪爭の克服にあつた。階級鬪爭の克服は階級鬪爭そのものに對する對策からは不可能であつて、その根源であるところの、資本の個人主義的搾取に對し、その餘剩金を國家に奉納せしめ、かつまた勞働者への保護政策に轉化しなければならないといふ認識に基いてゐた。企業家の利得分配を制限して、國家財政の安定化へ、社會施設の實施へ、發明・發見の奬勵へ、等々に餘剩利潤を誘導することに努めた。勞資兩階級層の協同體の結成は、かゝる思想に立脚して行はれたものである。それがため、さしも激烈を極めた階級鬪爭も遂に終熄するにいたつたのである。

ナチスおよびファッショの思想は全體主義といはれ、あるひは全體主義經濟と稱されるの

は、經營家の個人的な繁榮のみの追求を牽制し、勞働者層の階級鬪爭を抑制する代償として、勞働者層への保護政策を實施するといふ調和政策のゆえであり、國内全階層の統一を圖つたといふ點にあつた。また自由主義的營利經濟を國家が抑制し、自由主義的部分を削減して國家的に生産を計畫し遂行することであつた。したがつてドイツおよびイタリーにおける全體主義經濟は、個人主義的營利主義的經濟の本質を改變したものではなく、自由主義的部分を個人の手から國家に移し、國家によつて統制したのである。それゆえかゝる經濟を正確にいふならば、國家統制的營利主義經濟と稱されるべきものであろう。

しかしながら、ドイツ、イタリー等は、世界戰に突入する前に、從來の經濟を國家的に改變しえたといふことは實に偉大な國家的利益をもたらしたといへよう。それはまづ、國家所要物資を計畫的に增産しえたことであり、失業者としての休眠勤勞力を動員したことであり、國内をして相剋から統一へと導いたことであつた。ドイツ・ナチスが、經濟に對する國家統制を加へてから、いかなる經濟的現象を示したか、それを次の數字において眺めることにする。

年次	失業者指數（單位千人）	生産財指數
一九三三年六月	四、八五七	五五・六
一九三四年三月	二、七八九	七四・六
一九三五年三月	二、四〇三	九三・〇
一九三六年三月	一、九三七	一〇三・五
一九三七年七月	一、二四五	一一五・九
一九三八年三月	——	一二九・一

右の統計が示すごとく、ナチスが政權を掌握してから失業者が激減し、生産もまた躍進的に增大した。近年の國家がいはゆる平時狀態にあつては生産が增大することは稀であつて、一般に自由主義的經濟の國家は、一九二九年に開始された恐慌の餘波をうけて生産が停滯してゐたのである。ドイツ國家がナチスの天下になつて生産が增大したことは、國家が計畫的に生産を指導したからであり、國家豫算を增大して失業者の救濟に努力した結果であつた。

ナチスの經濟、ファシズムの經濟體制が示した中で、歷史的な發展を見逃すことができないものは、しばしば述べるやうに、この兩國は、國際間の戰爭を見透して、國家總力戰態勢を形成すべく國内對立を解消せしめたことであり、生産に對しても國民的總力を綜合的に發揮しようと努めたことであつた。

第三節　全體主義の理念と其の矛盾

ドイツのナチスおよびイタリーのファッショが、指導者の黨を結成して國内を指導したが、共產黨や自由主義政黨のごとく内面的指導にとゞまらず、公然とあらゆる社會的部門にまで指導者として登場し、國民の政治的統一を圖るとともに、經濟的には資本の營利性を是認し、被雇傭者としての勤勞者層には社會政策の實施を强化して、生產の國家的計畫化を行つたのは一定の原理に立つからである。

それは、戰ひに勝ち拔かねばならぬ。たゝかひに敗れた民族は滅亡し、たゝかひに勝利せる民族は繁榮する。しかもそれは自然の眞理であり、適者生存の「神の命」であるといふ原理に基いてゐた。經濟も社會も國家もすべてかゝる法則を遂行するために武裝しなければならぬ。——といふ信念に基いての行動であつた。この點に關してヒトラー總統は「我が鬪爭」の中の民族と人種の項で次のごとく述べてゐる。

「高度の等しくない二つの生物が交配すれば、生れたものは必ず兩親の水準の中間のものである。つまり、子供は兩身の中の、人種的に劣弱な一方よりは高い水準にあるかも知れないが、すぐれた一方の高度には達しない。したがつて水準の高い方と競爭すればやがて敗北するに違ひない。かゝる交配は、抑々人生を高度に育生してゆかうとする自然の意思に反するものである。此の人生を高度に育生すべき前提は、高等なものと劣弱なものとの結合ではなくて、前者の完全な勝利にある。」

かくのごとく强者は弱者と結合することは自然の鐵則に背くものであつて、高等なものは——强者が、弱者を征服するのは自然の法則であるといふのである。適者生存の原理はナチスの理念であつた。

かゝる理念から出發するならば、人道主義や共存共榮などゝいふことは嗤ふべき妄想といふことになる。强者は弱者を支配してこそ眞の平和が實現されるといふ思想に基いてゐる。「たとへばこの世界において平和主義的思想の勝利を本當に心から望もうと思ふものは、獨逸人による世界制覇のためにあらゆる手段を盡して努力しなければならないであろう。」（同上）——と述べ、さらに次のごとく徹底的に適者生存の原理性を强調してゐる。

「過去における一切の大文化が滅びたのも、一に本來は創造的であつた人種が血液汚辱によつて死滅したゝめに他ならない。かゝる沒落の根本原因は常に、全文化は人間あつて之

そ存在するもので其の逆ではない――卽ちある一定の文化を維持するには、それを創造した人間が維持されねばならぬといふことを忘れた點にある。だがこの維持は、最も優れたもの、より強いものゝ勝利の必要性と勝利の權利といふ鐵則に固く結び付いてゐるのである。

生存せんとするものは闘ふべし。此の永遠の闘爭世界に於て闘ふことを欲せざるものは生存に價しないのだ。」（同上）

闘爭の世界觀、適者生存の人生觀――に基いてナチスはすべての政策を打ち樹てた。すなはち國内的には指導者原理を確立し、企業家を優者として是認し、對外的には「平和的活動の方法に依つて日々のパンを確保するの企圖（貿易による世界制覇）は他日劍を以てこれを守ることを自ら容認しなければならなかつたのだ。」（同上）――と述懷して、第一次世界戰後のドイツ共和國政府が、貿易によつて經濟的需要を滿たさんとしたことに反對してゐる。それは必要な物資は進んで獲得すべきであり、資源地の再分割を行ふべきであるといふのである。この點に關しては同書の中で明瞭に語つてゐる。

「大戰前にドイツ國民人口は恐ろしく增加せる爲に、その必要なる日常のパンを調達するの問題は、益々切實に、凡ゆる政治的及び經濟的の思考及び行爲の第一問題となつた。が悲しい哉、人々はその唯一の正しい途（歐洲大陸にロシアの犧牲に於いて新領土を求むる方法）を採るの決意をなし得ずして、より安易なる方法（貿易）に依つて同じくその目的を達し得んものと考へたのであつた。」（同上）

第一次世界戰に敗れたドイツは、ヴェルサイユ平和條約で縛られ、國内ではワイマール憲法の維持者に制肘されて新領土の獲得を斷念せしめられてゐた。これはドイツにとつては馬鹿げたことであつて、適者生存の自然の法則に背くものであるといふのである。

ナチスが政權を掌握するや、國を擧げて軍備の擴充に專念し、戰闘態勢の確立に邁進したのも、ヒトラー總統のかゝる理念に基いての行動とみなければならない。また、これを客觀的にみれば、ナチスが政權を掌握した當時のドイツは、民族的にも優秀であり、生活力も旺盛で日日人口が增大してゐた。發明發見に長じ、闘爭精神の旺盛なことは西歐民族中決して劣るものではなかつた。しかるに隣邦のイギリス、フランス、ソ聯等は廣大な領土によつて生存資源が豐富であつたが、ドイツはすべての屬領を失つて窒息狀態に陷つてゐた。したがつてドイツの國民は一般に強い自信と復讐心に燃えてゐた。だから右の如き戰闘精神が育生されたものとい

はれうる。

弱者は亡び、強者は生存する。強力な國家民族は繁榮し、劣弱な民族は滅亡した。――これは歴史が語るところの眞理であつた。すくなくとも今日の世界のごとく、地球に散在する資源を、數十ヶ國の國家勢力圏に分割してゐる限りにおいては、必然に資源獲得の鬪爭が展開されることは明らかである。戰ひが今日必然的な運命であるとするならば、戰ひに勝つ體制を確立しなければならないことも亦た眞理であろう。全體主義的經濟機構といはれるドイツ、イタリー等は、戰ひに勝利するための準備をしたのであつた。

しかしながら、人類は「永遠の鬪爭」の宿命に繫がれてゐるのであろうか。また、戰ひの態勢――鬪爭形態として、ドイツ的、イタリー的な「國家統制的營利主義經濟」が最良の機構といひうるであろうか。

世界戰の段階においての國家は、何よりもまづ、國防兵器の生産と增大化を要求し、國民生活必需品の生産を求めてゐる。それは限られた人力で、無限の增大化を欲する性格のものである。ドイツ、イタリーにおける國家統制的營利主義經濟は、生産を國家所要の方向へ誘導し、公益優先の原則を經濟の分野に確立したが、それは前章で述べたやうに、米英等一連の營利主義經濟體制の國々と同樣、國家の生産目的と營利生産機構との矛盾を解消したものではない。國家の統制を强化した經濟ではあるが、生産目的は營利的であつて、國家的にすべてを奉仕したものでもなければ、また家族的體制でもない。したがつて國家總力を擧げての經濟體制とはいはれないであろう。

だが、それにもかゝはらず、ドイツ、イタリーの强みは、全面的な世界戰に突入する以前において、すでに經濟を計畫化してゐたことであり、かゝる目的を持つ同志的黨を組織し、國民の各層内で指導してゐることが、戰後國家統制を强化した國々とは異なるものがある。ドイツ、イタリー等は國家の政策を實踐すべく、同志が全國的に配置され、あらゆる機關、あらゆる職域に同一歩調で國策遂行に努力してゐるのである。本質的には個人主義であり、自由主義であり、營利主義である國々は、戰後再び舊體制に還元しえないといふ惧れから、かゝる同志的黨の全國的組織を形成しえないところに、國家の方針が末端まで徹底させられない弱點がある。まことに黨組織の存在はドイツ、イタリーの長所であり、强さである。

しかしながら、かゝる强みがあつても、資本に依存する經濟、國民の所得に依存する國家財制の體系、および營利主義的經濟の根本的な弱點を補ひうるものではない。